

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作 —実現に至らなかった会談をめぐって—

塩原 将行

目次

はじめに

1. 冷戦下におけるケネディの「対話」による緊張緩和
2. ケネディから池田への会談申し入れとその背景
3. ケネディの意向を伝えた人物
4. 戸田城聖の遺命実現とケネディとの会談
5. 自民党大物代議士の「横やり」による会談中止
6. 会談中止後の実現可能性
7. 池田にとってケネディは「心の盟友、

おわりに

資料1～8

ジョン・F・ケネディと池田大作関係事項年表

はじめに

一昨年、思いがけなく、*The Japan Times* 紙（1963年2月16日付）に掲載された池田大作へのインタビュー記事（巻末の資料1）を手にすることができた。そこには、“Soka Gakkai Plans JFK Meeting” “Group’s Leader Eyes K’chev Parley Too” という2段の見出しとともに、“Actually, it was planned that the Soka Gakkai leader would meet Kennedy sometime this month or early next month, but because of political reasons the plans fell through” と書かれていた。これは、創価学会第3代会長の池田大作（1928～2023年）が、ケネディからの会談要請に応じて、1963（昭和38）年の2月か3月のはじめにアメリカ合衆国（以下「アメリカ」と略す）第35代大統領ジョン・フィッツジェラルド・ケネディ（1917～1963年）（以下「ケネディ」と略す）と会談する予定であったが、何らかの「政治的理由」で頓挫したことを意味している。この記事は、中止決定から間もない時期に池田から直接聞き取った記録である。

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作—実現に至らなかった会談をめぐって—

インタビューが行われたのは、1963（昭和38）年2月14日（木）である。インタビューが掲載された2月16日付の記事には“*Ikeda told The Japan Times in an interview Thursday*”（下線引用者）と書かれている。

ちなみに、創価学会が対外的に初めて会談申し入れとその中止を発信したのは2月の男子部幹部会（『聖教新聞』への記事掲載は、2月5日）で、*The Japan Times* 誌関係者も、この時知ったと思われる¹。

ケネディから申し入れがあった時期は、その後池田が行ったトインビー、周恩来、ゴルバチョフなど数多くの国家指導者・文化人・学者との会談の最初期にあたる。1967（昭和42）年6月に会ったモーリス・ジャベール（ベルギー国立二十世紀バレエ団主宰者）とロベール・ギラン（フランスのジャーナリスト）や、同年10月に会い、後に池田にとって初めての対談集に結実したリヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー（パン・ヨーロッパ運動提唱者）との会談より前ということになる²。

この記事を読んで、次のような疑問が湧いてきた。

- (1) ケネディは、なぜ池田との会談を希望したのか。そして、どんなことを池田と語り合いたいと考えたのか。
- (2) 池田の存在を誰がケネディに伝え、ケネディの会談希望の意向を誰が池田に伝えたのか。
- (3) ケネディに会った際、池田は何を語ろうと考えていたのか。
- (4) *The Japan Times* 紙に書かれている「政治的理由により頓挫」とは、どのようなことだったのか。
- (5) *The Japan Times* 紙の見出しに「J F Kとの会談を予定」とあるが、会談中止後も実現の可能性はあったのか。
- (6) *The Japan Times* 紙の見出しにある「フルシチョフとの会談も視野に」の意味することは。

このような疑問を解決するため、本稿では、*The Japan Times* 紙の記事だけでなく、このインタビュー以前に開催された創価学会男子部幹部会（1963年2月1日）と女子部幹部会（同月4

¹ 高瀬広居は『週刊読売』1963年2月17日号（2月7日発売）において、「〔2月度男子部幹部会の〕来賓席には、評論家協会のメンバーが来ていた。そして席について間もなく、政治評論家の細川隆元氏がやってきた」（13頁）と記している。また、『週刊文春』の記者も、1963年2月25日号（2月18日発売）に掲載される「折伏に生きる若き指導者・池田大作 この人と一週間」の密着取材（2月1日から7日）のため、幹部会の会場である早稲田記念会堂に来ていた（同誌88頁参照）。*The Japan Times* 紙の論説委員長斎藤忠は、小平芳平『創価学会』（鳳書院）の再版（1962年8月15日刊）に収録された識者による「私の見た創価学会」に「重大なる責任の自覚」と題した文章を寄せている。男子部幹部会には、同紙関係者も臨席していた可能性がある。

² 「池田SGI会長が会見した海外の主な人物一覧」（東洋哲学研究所編『池田大作 世界との対話—平和と共生の道を開く』、第三文明社、2010年）、280～318頁参照。

3 Students' Suspension Under Probe

Three Tokyo junior high school students were suspended from school for an indefinite period for lack of conduct in an experimental chemistry class against any scientific procedure. State-provided curriculum.

Nagoya City Grows After Adding Ward

NAGOYA, Nagoya special city, has a population of 2,026,541 as of the end of the year. The city of Nagoya, with a population of 1,709,000, is the largest city in Japan.

Acquittal Upheld By Defense

The defense counsel Friday asked the verdict of the Bench of Higher Court acquitting 12 defendants in the second day hearing in the Supreme Court of the late Emperor's assassination.

16th Assembly of JMC To Be Held in Osaka

The 16th assembly of the Japanese Medical Association (JMA) will be held here from April 1 through 8, involving some 2,000 doctors in this country and from abroad.

Weather Eye To Orbit, Be Read Here

Any country on earth with the equipment will be able to read the information from the projected weather satellite launched by the U.S. on Feb. 23.

Let Me Have My Say - Controversial Movie

It was only after the picture was given an OK that members of the committee saw the picture. It was a 20-minute film.

2 Killed, 4 Injured In Hit-Run Crash

Investigation is continuing over the collision of a truck and a car in Niibatah.

Youth Magazine Checked by Police

A Tokyo publishing house Friday was searched by police on suspicion of publishing a pornographic novel in a youth magazine.

6 Burned to Death In Yamagata Fire

Six persons were burned to death in a fire which started at a residence in Yamagata.

Boy Attacks 2 Policemen, Overpowered

ORSAKA - A 17-year-old youth attacked two policemen Thursday afternoon.

Film Director Lean Praises 'O'Toole's Work in 'Lawrence'

British film director David Lean praised the work of Peter O'Toole in the film 'Lawrence of Arabia'.

U.S. Marines Hit 50 Miles in 14 Hours

Palace in Seoul with the 4th Marine Division in 14 hours.

Japan Boats Take Shelter in USSR

RUSSIA (Kyodo)—Twenty Japanese fishing boats took shelter in the USSR.

Bus-Truck Crash Injures 27 Students

OSAKA (Kyodo)—Twenty-seven junior high school students were injured when a bus and truck crashed.

Group's Leader Eyes K'chee Parley, Too

Soka Gakkai Plans JFK Meeting. Nishimura, 13th century Buddhist saint.

Mother Strangles Daughter in Fit

A woman strangled her daughter in a fit of rage.

MP Eye Erupts

MIYAKI (Kyodo)—An eye in the northern Japan Alps erupted several times from late Thursday night to early Friday.

Bridge

WASHINGTON (AP)—A bridge in Washington collapsed.

School in Kagawa Destroyed by Fire

KAGAWA (Kyodo)—Part of a school in Kagawa was destroyed by fire.

Censorship Body Grilled Over Controversial Movie

Members of the private Japan Censorship Commission (JCC) were grilled over a controversial movie.

Buddhist Ass'n Asks Revisions

BUDDHISM—The All-Japan Buddhist Association asks for revisions to its constitution.

Group's Leader Eyes K'chee Parley, Too

Soka Gakkai Plans JFK Meeting. Nishimura, 13th century Buddhist saint.

Mother Strangles Daughter in Fit

A woman strangled her daughter in a fit of rage.

MP Eye Erupts

MIYAKI (Kyodo)—An eye in the northern Japan Alps erupted several times from late Thursday night to early Friday.

Bridge

WASHINGTON (AP)—A bridge in Washington collapsed.

School in Kagawa Destroyed by Fire

KAGAWA (Kyodo)—Part of a school in Kagawa was destroyed by fire.

Censorship Body Grilled Over Controversial Movie

Members of the private Japan Censorship Commission (JCC) were grilled over a controversial movie.

Buddhist Ass'n Asks Revisions

BUDDHISM—The All-Japan Buddhist Association asks for revisions to its constitution.

SCREENS MADE IN JAPAN PERSONALIZED DISHES TORAYA CO. ORIENTAL CUISINE PAINTED SCREENS ASAHIAI ART CO.

池田大作へのインタビュー 記事が掲載された The Japan Times 紙 1963年2月16日付4面 (国立国会図書館所蔵)

日)における池田講演(資料2,3)、1970(昭和45)年に出版された浅野秀満『あすの創価学会』(経済往来社)の池田からの聞き取りに基づく記述(資料4)、ケネディとの会談に言及した主な池田の記述・発言(資料5)、などを精査した。

さらに、池田がケネディとの会談について最も詳細に記しているのは、創価学会の歴史を自ら綴った小説『新・人間革命』第7巻(資料6)である。そのため、同書も視野に入れて考察を進めることにした。

1. 冷戦下におけるケネディの「対話、による緊張緩和

a. 核戦争の危機から緊張緩和へ

最初に、冷戦下のケネディ政権が、危機的な国際情勢に対して、どのような姿勢で臨んだのかを概観しておきたい。

1962(昭和37)年10月、ソビエト社会主義共和国連邦(以下「ソ連」と略す)が、核弾道ミサイルを含む攻撃用兵器をキューバに持ち込んでいることが明らかになった。このことについて、当時アメリカの国防長官だったロバート・S・マクナマラは、「核時代到来以来、最大の破滅的戦争の危険に直面した³」と記している。

青野利彦は、『「危機の年」の冷戦と同盟—ベルリン、キューバ、デタント 1961-63年』(有斐閣、2012年)において、次のように述べている。

「[ケネディが大統領に就任した1961年1月から]自身がこの世を去る六三年十一月までの間、ベルリン、キューバ、ラオス、ベトナム、コンゴ、中東と、世界中で紛争に直面した。(中略)ケネディ政権期の二年一カ月は、アメリカが『グローバル危機』に直面した『危機の年(the crisis years)』であった。

この『危機の年』の冷戦対立の中で、最も危険だったのは、一九六一年から翌年にかけて発生したベルリン危機と、一九六二年十月のキューバ・ミサイル危機とであった。特にキューバ危機は、第二次世界大戦後、人類が熱核戦争に最も近づいた瞬間であった⁴。しかしキューバ危機の終息後、アメリカとソヴィエト連邦は関係改善へと向かった。その結果、六三年七月に部分的核実

³ ロバート・ケネディ著/毎日新聞社外信部訳『13日間 キューバ危機回顧録』(中公文庫、2014年改版)、マクナマラの序文「非凡に結合した人間」の9頁。1962年10月16日、閣議室で米軍偵察機がキューバに建設中のミサイル基地を発見したことについて正式な事情説明が行われる。10月22日、ケネディ大統領が国民に事態を公表し、キューバを海上封鎖すると発表。10月24日にソ連の輸送船が封鎖線に近づき一触即発の状態になったが、10月28日にソ連のフルシチョフ首相がミサイル撤去を正式に発表し、最悪の事態は回避された。

⁴ ちなみに池田は、キューバにおける危機事態について、1962年10月28日に行われた創価学会本部幹部会において、「これは絶対に、戦争を起こしてはならない。この祈りが大事になってきました、と強い危機感をもって語っている(『聖教新聞』1962年11月1日付2面参照)。

験禁止条約（the Partial Test Ban Treaty; PTBT）⁵が締結され、一定の緊張緩和状況——デタント状況——が達成されたのである」（下線引用者、2頁）

続けて青野は、1963（昭和38）年のデタントは、その後の米ソ関係安定化の出発点とみなすものだと言えようが、実際のところ解決のできなかつた問題、具体的には相互に絡まりあった5つの争点（ドイツ統一、東西ベルリン問題、核不拡散、東西不可侵協定、核実験禁止）が存在していたことを指摘している。ちなみに、この5つの争点は、アイゼンハワー前政権から継続している課題であった⁶。

キューバ・核ミサイル危機⁷直後のケネディとフルシチョフ（ソ連首相）について、青野は、次のように記している。

「翌〔1962年10月〕二十八日朝、フルシチョフはミサイル基地撤去を宣言したが、この宣言に対する回答の中でケネディは、『おそらく、危険から一歩後退した今なら』米ソは、軍縮という『決定的に重要な領域で、共に歩むことができるでしょう』と強調し、特に核不拡散問題と核実験禁止問題を最優先すべきであるという見解を示した。（中略）

他方、フルシチョフも、キューバ危機直後から、危機の解決を米ソ合意につなげる意志を示している。（中略）二日後の十月三十日にフルシチョフは再び書簡を〔ケネディに〕送り、キューバ危機のような深刻な紛争の再発防止を訴えた。そして、東西緊張緩和のために、核実験禁止条約や東西不可侵協定を締結し、またドイツ問題を解決することを提案したのである⁸」

なお青野は、このようなやりとりが米ソ冷戦を大きく変えたとする見方に対して疑問も投げかけている。

「キューバ・ミサイル危機は、冷戦史上の大きな転換点だとされてきた。カリブ海で核戦争の可能性に直面した米ソが緊張緩和に大きな関心を抱き、それがPTBTの締結に象徴される一九六三年のデタントへとつながったと描かれてきたのである。しかし実際のところ、キューバ危機後、米ソ関係は直線的に緊張緩和へと向かったわけではない。危機後の六二年秋から翌年春にかけて、米ソ関係はジグザグの道筋をたどった⁹」（下線引用者）

⁵ 地下での核実験をのぞき、大気圏内外あるいは水中での核実験を禁止する条約。アメリカ・イギリス・ソ連のほか、発効日までに105カ国が調印した。ただし、フランス・中国などは不参加（前田寿『軍縮交渉史 1945年—1967年』、東京大学出版会、1968年、637頁参照）。PTBTについては、「部分的核実験禁止条約」もしくは「部分的核実験停止条約」と訳されている。本稿では、引用を除き前者を使用した。

⁶ 前出、青野利彦『「危機の年」の冷戦と同盟』、2～8頁参照。

⁷ 従来、「キューバ危機」もしくは「キューバ・ミサイル危機」と記されることが多いが、当時国務長官だったマクナマラによれば、「一九六二年にキューバに駐留していたソ連軍は、中距離ミサイルの核弾頭だけでなく、核兵器も戦術核兵器の弾頭までも持っていた」（ロバート・S・マクナマラ著／仲晃訳『マクナマラ回顧録 ベトナムの悲劇と教訓』、共同通信社、1997年、「付章 一九六〇年代の核による危機と二一世紀への教訓」の453頁）とのことなので、八木勇『キューバ核ミサイル危機』（新日本出版社、1995年）の表記も踏まえ、本稿では「キューバ・核ミサイル危機」とした。あわせて、シオドア・C・ソレンセン著／山岡清二訳『ケネディの遺産 未来を拓くために』（サイマル出版会、1970年）の347頁などを参照。

⁸ 前出、青野利彦『「危機の年」の冷戦と同盟』、182～183頁。

⁹ 同前、182頁。

「キューバ危機の経験は、危機後の米ソ関係の展開にも影響を与えた。この論点については長らく、危機の経験が米ソに緊張緩和を模索する動機を与えた、という『ポジティブ』な側面のみに光が当てられてきた。しかし（中略）キューバ危機の影響には、アメリカの対ソ不信を強めるという『ネガティブ』な側面も存在していた¹⁰」

このような米ソ間の交渉に加え、1962（昭和37）年夏までには中華人民共和国（以下「中国」と略す）の核保有の懸念が高まっていた¹¹。1963（同38）年中には中国が核実験を行うことが予想されており¹²、中国への対応がケネディ政権にとっての難題になってきていた。さらに、同じ社会主義国である中ソの関係も、1960（昭和35）年以降悪化の一途をたどっていたのである¹³。

ともあれ、キューバ・核ミサイル危機の回避には、ケネディとフルシチョフによる書簡や特使を通しての「対話」があったことは事実である。ケネディの弟ロバート元司法長官は、自著『13日間 キューバ危機回顧録』において、相手の立場に立って考えることの大切さを次のように述べている。

「キューバ危機の究極的な教訓は、われわれ自身が他国の靴をはいてみる、つまり相手国の立場になってみることの重要さである。危機の期間中、ケネディ大統領は、自分のやっている行動の中で、なによりもまず、こういう行動をとったらフルシチョフあるいはソ連に、どんな影響を与えるかはわかり知ろうと、より多くの時間を費やした。彼の慎重熟慮を導いたものは、フルシチョフを侮辱したり、ソ連に恥をかかせたりしないという努力であった。それは、彼らに付託されているソ連の安全保障とか国益のゆえに、対米対応策をエスカレートしなければならないと思ひ込ませないようにすることだった¹⁴」

「危機がすべて終わったあとでさえ彼〔ケネディ大統領〕は、有頂天になって喜び、ソ連に屈辱を忍ばせるような言動を、いっさい許さなかった。彼はこの事件を、彼自身あるいはケネディ政権の、手柄であることを示すような声明は、いっさい行なわなかった。彼は、エクス・コム¹⁵と政府の全員に対し、どんな形でも勝利をうたうようなインタビューや言明を、いっさい行なってはならないと指示した。

彼は、なにが自国の利益で、なにが人類の利益かを、適切に判断したフルシチョフを尊敬した。

¹⁰ 同前、4～5頁。

¹¹ 同前、188頁参照。『朝日新聞』東京本社版1962年8月5日付朝刊3面には、中国外相陳毅の談話として、「原爆製造の研究進む」という見出しの記事が掲載されている。

¹² 『読売新聞』東京版1962年8月28日付朝刊2面には、「中国が数か月内に核実験」という見出しの記事が米軍縮局筋談として掲載されている。ただし、中国が実際に初の核実験を行ったのは、1964年10月16日。67年6月17日には、初の水爆実験が行われ、中国はアジア初の核保有国になった（平松茂雄『中国 核大国への道』、勁草書房、1986年、178頁参照）。

¹³ 穴戸寛『中ソ対立の歴史的経過』（菊地昌典他『中ソ対立 その基盤・歴史・理論』、有斐閣選書、1976年）、146～185頁参照。同書で穴戸は、「中ソ会談の決裂、部分核停条約の締結で中ソ関係は決定的な対立の段階に入った」（179頁）と記している。

¹⁴ 前出、ロバート・ケネディ『13日間 キューバ危機回顧録』、105頁。

¹⁵ キューバ・核ミサイル危機に対応するために設置された「国家安全保障会議執行委員会」のこと（同前、20頁参照）。

もしこれが一つの勝利であったとするならば、それは次の世代にとっての勝利であって、特定の政府や、特定の国民にとっての勝利ではなかったのである¹⁶⁾

ケネディが池田との会談を打診したのは、このように世界が最も緊迫したキューバ・核ミサイル危機の緊迫感が残っていた頃のことである。ちなみに、1970（昭和45）年の浅野によるインタビューの後、池田がケネディからの会談要請について次に語るのは、1990（平成2）年に出版されたライナス・ポーリングとの対談集『「生命の世紀」への探究—科学と平和と健康と』に結実した対談においてである¹⁷⁾。ポーリングが、ケネディが部分的核実験禁止条約締結を決断した時のことを話した後、池田は次のように語っている。

「ケネディ大統領といえば、私にも一つの思い出があります。当時、ケネディ大統領から招待状をいただいでお会いする予定でした。折悪しく私のほうの都合でお会いすることができず、今もって残念な思いが残っております¹⁸⁾

b. 大統領在任3年間の功績

ケネディの大統領就任式を現地取材した大森実は、ケネディがダラスで凶弾に倒れた直後に「偉大な指導者を失う」と題して、次のように記している。

「ケネディ政治の真骨頂は、強烈な`指導性、である。その`指導性、を裏打ちの考え方は、真実に対する大胆なる対決であり、真実に対応する政策を真一文字に突きさせること。ただし、ケネディ列車は、ただ一本の軌道を走るだけでなく、彼のことばを借りれば『現実的、実利的に世の中の無限の複雑さに対して誤った行動をとらぬようにすること。それ以外の原則はない』という政治原則を貫くこと。それがケネディそのものであり、過去三年間のケネディ政治は実際にこの原則で貫き通されたといつてよい¹⁹⁾

また、西洋史・アメリカ史の研究者である中屋健一は、ケネディの死から4年後に次のように述べている。

「在任わずか二年十か月という短い期間ではあったが、彼が大統領に就任した一九六一年一月と彼がこの世を去った一九六三年十一月の世界情勢を比べるだけでも、その間に大きな変化と進歩が起り、その変化と進歩をもたらした原動力が、彼の努力にあることを知ることができよう。アメリカ国内においては、景気は後退し、失業者の数は増加していた。

しかし、一九六三年には景気はまったく回復し、失業者の数も減少していた。彼の主唱したニュー・フロンティア諸政策は、議会勢力の反対にあつて、完全に実現したとはいえないまでも、

¹⁶⁾ 同前、108～109頁。

¹⁷⁾ 同書は、1987年2月以降4度の語らいをもとに出版された。ポーリングは、1954年にノーベル化学賞を受賞。さらに、核兵器廃絶への取り組みにより、1962年にノーベル平和賞を受賞している。

¹⁸⁾ ライナス・ポーリング/池田大作『「生命の世紀」への探究—科学と平和と健康と』（読売新聞社、1990年）、166頁。

¹⁹⁾ 『毎日新聞』東京版1963年11月23日付夕刊3面。大森実は、1954年から62年まで、毎日新聞社ワシントン特派員・ニューヨーク支局長・ワシントン支局長を歴任している。

公民権、社会保障、教育、宇宙競争、インフレ克服などにおいて相当の成果を収め、次の大統領ジョンソンの『偉大なる社会』政策に引き継がれて着実に前進している。また、外交政策の面においても、暗雲たちこめていた東西関係の改善に全力を傾け、ついに部分的ながら核実験停止条約の成立にこぎつけ、また、キューバへのソ連ミサイル持込みによる危機を巧みに切り抜け、平和共存体制の基礎をつくることに成功し、第三次世界大戦の危険を遠ざからしめたことは、私たちにとっても幸いなことであった。ケネディと反対の立場に立ち、異った思想を持っていた、ソ連の前首相フルシチョフも『彼は情勢を現実的に把握し、現在世界を分裂させている国際問題を、交渉によって解決する道を見いだそうと努力した、幅の広い見解を持った政治家であった』と賞賛している。まさに、ケネディは、偉大なる世界の指導者であったということができよう²⁰]

c. 核管理の取り組み

ケネディとフルシチョフとの間の非公式な使者²¹を務めたノーマン・カズンズは、「ジョン・F・ケネディの遺産」の中で、ケネディがアメリカ大統領の職をどのように考えていたかを次のように述べている。

「彼〔ケネディ〕は彼の地位には、単にアメリカ人だけでなく、世界のあらゆる地域の何千万という人々の希望が托されていることを知っていた。国家的利益と人類の利益は一致すると彼は深く信じ、それをしばしば口にした。歴史的に、また哲学的に、これはいつも重要な思想であったが、核時代において、それは厳然たる現実となり、支配的な原理になった。彼は二億に近いアメリカ人から成る国家の大統領に選ばれたのであるが、彼の責任の、ある部分は全人類に及んでいた。

(中略)彼の仕事は人類の全将来につながっていることを彼は知っていた。人類の歴史において、ひとりの人間がこれ以上大きな責任を背負わされたことはないのである²²」(下線引用者)

そのうえでカズンズは、ケネディの最大の功績を次のように記している。

「ジョン・ケネディの政策はそれ〔分別のある対話〕を通じてソ連が他国の犠牲において国家的、イデオロギー的利益をおし進める可能性のあるあらゆる隙間をふさぐと同時に、共同の利益ならびに人類の利益のために両国による分別のあるとりきめができるようにあらゆる道を開けておく

²⁰ 中屋健一『ケネディ—英知と勇気の大統領—』(旺文社文庫、1967年)、3～4頁。細野軍治は、ケネディが、その在任中に取り組みなければならなかった問題は、主なものだけでも、対外的には、ベルリン問題、ラオス・ベトナム問題、キューバの問題などがあり、国内的には、黒人問題、宇宙計画問題、社会保障や失業問題があった、と記している(細野軍治『勇気ある指導者 ケネディ』、偕成社、1971年、258～259頁参照)。

²¹ ジェフリー・サックス著／櫻井祐子訳『世界を動かす ケネディが求めた平和への道』(早川書房、2014年)、100頁参照。

²² ノーマン・カズンズ「ジョン・F・ケネディの遺産」(米国大使館文化交流局出版部編『日米フォーラム』第10巻第4号、永見社、1964年4月)、44頁。©1963 by Saturday Review Inc. 執筆当時彼は、サタデー・レビュー誌編集長。1961年6月のケネディ・フルシチョフ会談の後、カズンズはケネディに、「ロシアの人々に対して、息をのむような新しい姿勢をうち出し、冷戦の終結と米ソ関係の再スタートを呼びかける」よう熱心に勧めている(前出、サックス『世界を動かす』、100頁参照)。

ことだった。この政策の実例はキューバだった。もう一つは核実験禁止だった。この二つは全く反対の方向を旨ざしているように思われるが、ともに同じ基本的な目的の一部であった。すなわち侵入に抵抗する決意と恒久的な平和を築くためにあらゆる機会を採求する決意。

大統領のこの政策は一九六三年六月十日のアメリカン大学の卒業式の演説²³のなかにもっともはっきり述べられている。一九六一年九月二十日の国連総会での演説を除くと、アメリカン大学での演説は彼の在任三年間のもっとも歴史的な、もっとも重要な人間記録である。六月十日の演説においてケネディは新しい現実²⁴に直視しようとした。彼は増大する核貯蔵と増大する敵意の狂気を断ち切ろうとした。彼は重大な国際問題に人間的な展望をあてはめようとした。彼はロシア人に直接話しかけ、説教するのでも、叱るのでもなく、彼らの苦しい試練と困難を強調し、共通の希望はもっとも古い敵意をさえ解消することができることを認めた。この演説の全文はソビエトの新聞に掲載された。

六月十日の演説は外交政策の分野における大統領の多分最大の勝利と思われるものを直接生み出した。これは、彼の言葉を使えば、核兵器という鬼をもう一度ビンに押しこめるための戦いの成功であった。彼は核兵器禁止条約に対するソ連の同意をものにし、ついで上院の批准をものにしなければならなかった。そして二つながらものにした。彼はこの条約をそれ自身目的とは考えないで、二国間にあるはるかに困難、かつ重大な問題に打ちこまれたくさびであると考えた²⁴（下線引用者）

このようなケネディの平和への強い信念を形成したものの一つに、太平洋戦争中、南太平洋において魚雷艇の艇長として従軍した経験が考えられる。1943（昭和18）年8月2日、彼が乗る魚雷艇PT109は、日本の駆逐艦に衝突されて沈没。乗員13人中2人は行方不明となり、生き残ったケネディとその部下10人は、島から島へ泳ぎ、5日後に救出されるまでの間、過酷な体験（戦争というものの現実）を経験している。この時ケネディは、自らも深い傷を負いながら、負傷した部下を救助したなどとして、名誉戦傷章と海軍海兵隊勲章を受けている²⁵。また、ヨーロッパの戦場では、ケネディの長兄ジョセフ・ジュニアが戦死している。

戦後ケネディは、弟ロバート・妹パトリアとともに、1951（昭和26）年の中近東・アジア旅

²³ 大森実は、「第十八回国連総会と世界政局」（『公明』第12号、公明新聞社、1963年9月）において、「さる六月十日のアメリカン大学のケネディ演説は、言葉を強めて、『ソ連を理解しよう』と説いている。おそらく、歴代アメリカの大統領の言葉として、最初のものであろう。もちろん、ケネディは、ソ連を信頼しようというのではない。`信頼、ではなく`理解、を説いているのである。従って、私は、現段階の米ソ関係を`相互不信、から`相互理解、への過渡期の段階でもないかと考える。そして、その過渡期的段階の意味する変化の意義は、極めて重大である。ワシントンとクレムリンの間に、ホットラインと呼ばれる、直通テレタイプ線が架設され、ついで、部分核停条約が調印された。さらに、米英ソ三国は、国連でも外相会議を開き、相互理解のための努力を継続することによって、東西の緊張を一つ一つ、揉みほぐそうという態度に出ている」（下線引用者、20頁）と述べている。

²⁴ 前出、ノーマン・カズンズ「ジョン・F・ケネディの遺産」、46～47頁。

²⁵ 前出、細野軍治『勇気ある指導者 ケネディ』、164頁などを参照。

行の途次、10月下旬頃に1日東京に立寄っている²⁶。その折出会った青山学院大学教授の細野軍治に、彼が乗っていた魚雷艇を沈めた駆逐艦の艦長を探してほしいと依頼。早速細野が調査し、その艦は「天霧」で当時の艦長は花見弘平だと判明した²⁷。ちなみに、ホワイトハウスの私的応接室には、天霧の生存者17人の寄せ書きが表装されて飾られている²⁸。

ロバート・ドノヴァンは、次のように述べている。

「この魚雷艇でのケネディ大統領の体験と、その結果彼が耐え忍ばなければならなかった苦痛が、彼を賢明で強い、一層自信に満ちた人に鍛え上げていたのであった。もしPT109の体験がなかったならば、彼はホワイトハウスの主人公にはなりえなかったかも知れないのである²⁹」

d. 「平和部隊」に参加した青年たちへの期待

ケネディは、平和社会実現のため、青年に大きな期待を寄せていた。特にそれが表われているのが、ニュー・フロンティア政策の一環として、就任まもない1961（昭和36）年3月1日に大統領令に署名し発足させた「平和部隊」（Peace Corps）である³⁰。中屋健一は、次のように記している³¹。

「ケネディの考え方によれば、平和というものは、戦争さえなければそれでよいというものではなかった。共産主義によって引き起こされた不安と闘争から脱して、自由で独立した諸国家による国際社会をつくるのが平和のため必要であった。それには、恵まれた国々が欠乏と貧困に苦しんでいる国々を援助することが、まず大切だと、彼は考えた³²。（中略）新興国は、国によってその進歩の程度が異り、また、それぞれ異った問題に直面していた。だから新興国の近代化のためには、それぞれの国の資源を動員して長期計画をたてさせなければ、いくらアメリカが援助しても効果がないことをケネディは知っていた」

「〔ケネディは〕二つの特別の計画を進めた。一つは、平和のための食糧、計画で、（中略）もう一つの特別計画というのは平和部隊であった。（中略）平和部隊は、アメリカの青年男女をアジア、ラテン・アメリカ、あるいはアフリカのおくれた国々に送って、それらの国の教育や生活の向上に役立たせようという雄大な試みであった。（中略）初め発表されたときは、『文明から遠

²⁶ ロバート・F・ケネディ著・波多野裕造訳『自由の旗の下に 正義の友として勇敢な敵として』（日本外政学会、1962年）の13～15頁、および、図録『「JFK—その生涯と遺産」展』（国立公文書館、2015年）の26頁などを参照。

²⁷ 細野徳治「無冠の国際人、細野軍治の学問と行動の事蹟」（『拓殖大学百年史研究』第6号、拓殖大学創立百年史編纂室、2001年）、4～5頁参照。著者は、細野軍治の次男。

²⁸ 朝海浩一郎「ケネディ大統領の憶い出—精通していた日本の問題—」（『経済往来』第16巻第1号、経済往来社、1964年1月）の84頁、および、細野軍治「訪米記（四）」（『ニュースレター』第252号、日本外政学会、1961年3月21日）の7頁を参照。

²⁹ ロバート・ドノヴァン著／波多野裕造訳『PT109 太平洋戦争とケネディ中尉』（日本外政学会、1963年）、345頁。

³⁰ 日本では、同様の趣旨の青年海外協力隊が1965年に発足した。

³¹ 前出、中屋健一『ケネディ—英知と勇気の大統領—』、183～187頁参照。

³² 牧口常三郎が『人生地理学』で提唱した「人道的競争」と相通じる考え方である。

いアフリカやアジアのジャングルの中で、二年間も働き、大切な青春を棒にふるようなもの好きがあるものか』と笑った人たちもいた。しかし、『諸君の国が諸君のために何をなしうるかを聞いたもうな。諸君が諸君の国のために何をなしうるかを聞いたまえ』というケネディの就任演説の言葉はアメリカの青年たちに大きな勇気を与えた。アメリカの青年たちは、これにこたえて立ち上がった。彼らは無気力になっていたのではなかった。彼らに機会と目標を与えるものが今までなかっただけのことである」

「平和部隊に対しては、ケネディは特別の関心をはらった。彼らは帰国するとホワイト・ハウスに招かれ、ケネディは一々労をねぎらって握手した。一人一人が大使なみに取り扱われたのである。隊員は「ケネディの子どもたち、と呼ばれるときもあった」

平和部隊は、1年目(1962年)には698人のアメリカの青年男女が12カ国で働き、2年目(1963年)には3,992人が41カ国で働き、1,017人の志願者が訓練を受けて14カ国に配属されることになっていた³³。この平和部隊は、共和党政権下でも中断されることなく継続し、1997(平成9)年までに約14万3千人がおよそ130カ国の開発援助に参加している³⁴。

2. ケネディから池田への会談申し入れとその背景

a. 会談申し入れの時期と経緯

ケネディからの池田への会談申し入れについて、浅野は『あすの創価学会』において、次のように記している。

「かつて池田は、アメリカの故ケネディ大統領から「内密の会見」を申しこまれたことがある。東京・信濃町にある学会本部に、ある有力民間人が意向打診に現われた。

アメリカ国務省の意を受けてきたといい、

『ケネディ大統領が両国政府に関係なく、貴下と個人的な資格で会見をもちたい、と希望されている³⁵。国務省が私に、使者として意向をたしかめてほしいと依頼してきた。いかがですか』

池田は、突然の話に驚いたが、二人の会見がケネディ大統領の強い希望であることを確認したあと、しばらく考えたという。

池田が会長に就任して三年目の〔昭和〕三十七年十二月で、当時、日米安保条約締結による混乱が尾を引き³⁶、左右両翼が激しい対立をみせていた。学会は、そうした国内情勢のなかで、参議

³³ 米国大使館文化交流局出版部『日米フォーラム』第9巻第5号(永見社、1963年5月)、口絵頁参照。

³⁴ 栗木千恵子『ケネディの遺産 平和部隊の真実』(中央公論社、1997年)、4頁参照。

³⁵ 池田は、『新・人間革命』第7巻の「操舵」の章で、「個人的に会いたい旨の要請」があったと記している(聖教ワイド文庫、2004年、333頁)。

³⁶ 1960年6月、改定日米安全保障条約に反対するデモ隊が連日国会議事堂を取り囲み、革命前夜の様相を呈していた。6月15日、国会議事堂構内に突入した全学連の学生と制圧する警官隊がぶつかり、混乱の中、東京大学学生の樺美智子が犠牲になった。日本国内が騒然としたことで、6月20日に予定されていたアイゼンハワー大統領(ケネディの前任)の訪日は中止になった(田中浩『戦後日本政治史』、講談社学術文庫、1996年、167～172頁参照)。

院に進出するなど、政治的にも比重が大きくなりつつあった。ケネディ大統領の会見意図はなにか。内外に政治的に利用されないか。アメリカ布教のこともある……。

『お会いしましょう。私もお話ししたいことがいろいろあります』³⁷⁾ (下線引用者)

以上のように浅野は、アメリカ国務省の意向を受けた有力民間人が学会本部に池田を訪ねて来たのは、1962 (昭和 37) 年 12 月と書いている。池田も、「ケネディ大統領から、私に会いたいと連絡が入ったのは、一九六二年 (昭和三十七年) の暮れであった³⁸⁾」と記している。

ケネディはなぜこの時期に池田に会談を申し入れたのだろうか。その理由を池田は、*The Japan Times* 紙のインタビューで、「ケネディはきっと、学会が将来、どっちの方向に行くのか、反共になるのか、容共になるのか、じかに聞いたかったのだでしょう」と述べている³⁹⁾。これは、会談の意向打診に訪れた人物の話からケネディの意図を推し量ったものと思われる。

秋山栄子によれば、夫の秋山富哉 (当時、創価学会のニューヨーク支部長) は、1963 (昭和 38) 年 1 月 14 日に池田から「ケネディ大統領と会見するかもしれない。来月、もう一度、アメリカに来るからね」と聞いたとのことである⁴⁰⁾。また、池田に同行して渡米していた渡部一郎も、同年 1 月 14 日頃に「今度、ケネディ大統領と面会することが決まったよ」と池田から聞いている⁴¹⁾。

b. ケネディのアジア政策

大統領に就任したケネディは、1961 (昭和 36) 年 8 月のベルリンの壁の問題や 1962 (同 37) 年 10 月のキューバ・核ミサイル危機の回避など、共産主義の大国ソ連との困難な課題に取り組んできた。そして、次に取り組むべき大きな課題は、もう一つの共産主義の大国中国との関係だった。その前に、1960 (同 35) 年の安保騒動以来こじれていた日米関係を修復する必要があった⁴²⁾。

1962 (昭和 37) 年 12 月 3 日 (現地時間)、ケネディは、第二回日米貿易経済合同委員会に出席した日米双方の閣僚をホワイトハウスの昼食会に招き、「現下の問題は侵略主義、スターリン主義と結びついた中共勢力の増大である。いかにしてアジアの共産勢力を封じ込めておくかが問題である。米国は広範な地域に責任を持っているので手薄である。日本も協力者として共産侵略

³⁷⁾ 前出、浅野秀満『あすの創価学会』、55 頁。

³⁸⁾ 池田大作「随筆 人間世紀の光 61」(『聖教新聞』2005 年 1 月 14 日付 2 面)。

³⁹⁾ *The Japan Times* 紙 1963 年 2 月 16 日付 4 面参照。

⁴⁰⁾ 『大白蓮華』第 713 号 (聖教新聞社、2009 年 6 月)、30～31 頁参照。

⁴¹⁾ 吉村元佑が 2025 年 8 月 8 日に記した筆者への書簡による。

⁴²⁾ 松山幸雄「知性、若さ、先見性ある政治家 私が見たケネディ大統領」(日本記者クラブホームページの取材ノート、2013 年 11 月掲載)を参照。松山によれば、ケネディは日米関係修復のために、「まず日本に精通しているライシャワー・ハーバード大教授を駐日大使に任命、次いで、日米貿易経済合同委員会を新設して第 1 回会議にはラスク国務長官ら 5 人の閣僚を日本に派遣、さらに弟のロバート・ケネディ司法長官を訪日させるなど、『日本重視』の政策を次々と打ち出した」とのことである。

阻止に協力してほしい」という趣旨の演説をした⁴³。

ケネディと親交が深い細野軍治は、「恐らくケネディさんとしては再選後アジアの問題と取組み、日米連携して解決しようと考えておつたのであろう⁴⁴」と述べている。

c. ケネディによる対日政策の変化

春名幹男は、1961（昭和36）年1月にケネディが大統領に就任したことで、対日政策が変化してきたとして、次のように述べている。

「若い民主党の大統領が登場して、それまでの基本的な対日政策に変化の兆しが見えた。アメリカの自民党支持に微妙な変化が現れたのだ⁴⁵」（下線引用者）

「ケネディは、大統領就任後、池田勇人首相に会うより三カ月も先に、民社党を支持する労働団体、全労の議長、滝田実をホワイトハウスに招いた。その舞台裏では、こんな政策転換があったのだ⁴⁶」

1961（昭和36）年6月の池田勇人首相訪米前の3月3日、全日本労働組合会議（以下「全労」と略す）初代議長の滝田実は、ホワイトハウスで40分ほどケネディと単独で会った。滝田は、「〔ケネディが〕外国の労働代表との会見ははじめてだそうで、異論もあったらしいが、大統領自身が決断されたのではなかろうか⁴⁷」と記している。彼は、『忘れえぬ人々』に次のように記している。

「ケネディ大統領と私が会談したのは一九六一年（昭和三十六年）三月三日、ホワイト・ハウスの大統領執務室であった。（中略）アメリカ側の私を招きたいとの意向は、マッカーサー駐日大使からうけた。私は当時、総評〔日本労働組合総評議会〕が階級闘争至上主義に走り、容共路線に深入りしすぎることに反対して総評から分かれ、全労会議（後の同盟）を結成して議長の立場にあった。

どうしたわけか、中国ヤソ連からも招きの打診があり、もしそちらに行けば毛沢東主席やフルシチョフ書記長との会見もありうるとのことであった。私はその意思がないので、訪米するとしたら政治的に全く自由な立場で、出来れば大統領に直接会って日本の労働者や大衆の声を伝えたい旨希望した。

折しも池田首相の五月訪米^(ママ)を控え、それ以前に前例のない労働代表と大統領会談は確約できな

⁴³ 『日本経済新聞』1962年12月5日付朝刊1面参照。

⁴⁴ 細野軍治「ケネディ米大統領を悼む」（『自警』第46巻第1号、自警会、1964年1月）、50頁。飯野海運社長の俣野健輔は、「私の会ったケネディさん」という特集で、1959年4月14日に上院議員だったケネディと会った時、開口一番「日本は中国問題にどのように対処していくつもりか」と尋ねられたのにはびっくりしたと回想している（『週刊朝日』〈緊急増刊〉第68巻第53号、朝日新聞社、1963年12月10日、30頁参照）。

⁴⁵ 春名幹男『秘密のファイル（下）—CIAの対日工作』（共同通信社、2000年）、284～285頁。

⁴⁶ 同前、286頁。

⁴⁷ 滝田実「魔よけの獅子頭を贈ったが」（『週刊朝日』〈緊急増刊〉第68巻第53号、朝日新聞社、1963年12月10日）、29頁。なお、ライシャワーは、1961年1月31日には既に駐日大使就任を受諾していた。外交委員会と上院本会議で承認されるのは、同年3月28日。

い、が、『とにかく』ということで訪米を応諾した。

二月二十日、ワシントンに着いたが、ただならぬ歓迎の気配であった。まずボールドウズ国務次官と会って、日本の国内事情を話した。それからマイアミに飛び、労働界を代表するAFL・CIO(全米労働総同盟・産別会議)のミーニー会長ら幹部らと会談した。そこで就任早々の大統領との会談が決定したことを伝えられた。ただし、『公表するまでは内密に』ということだった。(中略)

テレビやカメラの砲列を早く退け、儀礼的なあいさつ抜きで、二人は単刀直入の話を始めた。

まず私がアメリカの対外政策について、軍事より経済の優先、安保、貿易について意見を述べ、日米間の改善のため、国民各階層との交流を促進するために日本人が親しみ易い人を駐日大使にしてほしいと希望した。重要な発言だった。大統領は耳をかたむけ、こんな重要な内容を私に話しているのかと思うほど率直に国内事情や考えを語った。さらに平和部隊の構想を中心に青年への期待などを熱っぽく説いた。最後に、『日米間の各階層の交流』と『訪日』を約束した。信頼の対話だった。会議を終えてプレアー・ハウス(迎賓館)で昼食がもたれた⁴⁸⁾(下線引用者)

まず興味深いのは、ソ連や中国からは最高指導者と会う前提で誘いがかかっていたことである。滝田が議長を務める全労は、共産主義とは一線を画して民社党を支持していたが、アメリカと共産主義を掲げる国の双方から声がかかったというのである。さらにケネディが、青年への期待と訪日の意向を語っていたことも興味深い。

d. 1962年2月のロバート・ケネディ司法長官の来日

池田大作への会談申し入れの約10カ月前、1962(昭和37)年2月4日から10日まで、ロバート・ケネディ司法長官夫妻が、同夫妻歓迎日本青年委員会⁴⁹⁾(以下「RK委員会」と略す)と法務省の招へいで来日している(ただし、4日、5日は政府賓客)。ロバート訪日の目的は大統領訪日の地ならしの意味を持っていたというが⁵⁰⁾、吉次公介は「その最大の目的は、日本における反米感情の緩和だった⁵¹⁾」と述べている。帰国後、ロバートは詳細な報告書を提出し、ケネディは興味深く読んだという⁵²⁾。

ロバート司法長官(当時36歳)は、政府要人だけでなく、青年・学生や労働団体の関係者と

⁴⁸⁾ 滝田実『忘れえぬ人々』(私家版、1996年)、41～43頁。

⁴⁹⁾ 実行委員長は、小坂徳三郎。主な委員は、中曽根康弘・五島昇・藤川一秋・永末英一・鹿内信隆・湯浅佑一・平沢和重・犬養道子。事務局長は、岩堀喜之助。顧問には、紹介者の細野軍治などがついた(『財界』第10巻第3号、財界研究所、1962年2月15日、18～19頁ほかを参照)。中曽根は、『週刊平凡』第4巻第6号(平凡社、1962年2月7日)の「ニュースの広場」で、「昨年の三月十日に、わたしがワシントンで、ロバート・ケネディに会いまして、約一時間半、彼と話をしました。会わしてくれたのは、細野軍治さんと、ジョン・W・マコーマックという当時の民主党の院内総務です」(下線引用者、87頁)と語っている。

⁵⁰⁾ 前出、細野徳治「無冠の国際人、細野軍治の学問と行動の事蹟」、7頁参照。

⁵¹⁾ 吉次公介「日米関係史のなかのロバート・F・ケネディ司法長官訪日」(『沖繩法学』第33号、沖繩国際大学法学会、2004年)、79頁参照。

⁵²⁾ 『朝日新聞』東京本社版1962年2月24日付夕刊1面参照。来日前の同紙東京本社版1962年2月3日付夕刊1面にも、「あす来日のケネディ長官／大統領名代、の色彩／注目される視察報告」という見出しが一面トップに出ている。

も積極的に会って、ケネディ大統領のイメージアップとともに、「じかの見聞⁵³」に基づいた確実かつ信頼できる情報を得ようとしていた⁵⁴。

以下、来日時のロバートの行動をできるだけ詳しく挙げてみる⁵⁵。ただし、時間帯は新聞によって異なる場合があるので、おおよその時間帯である。

▽2月4日 = 19:26 羽田空港着。米大使館に入る。毎日新聞の波多野裕造記者と単独会見。

▽5日 = 6:30～朝日新聞の取材に応じる（米大使館）。7:30～産経新聞・中日新聞・東京新聞の合同取材に応じる（同）。8:30～9:30 池田首相と会談（新宿区信濃町の私邸）。9:40～10:10 小坂外相と会談。10:15～11:20 植木法相と会談。11:20～12:10 衆参両院議長を訪問。衆議院予算委員会を傍聴。12:15～14:00 植木法相主催の昼食会に出席。14:00～14:40 最高裁判所長官・検事総長を訪問。15:00～15:55 NHKで平沢和重（*The Japan Times* 紙編集主幹・産経新聞社論説顧問）と対談（21:00～NHKテレビ録画放送）。16:00～17:30 法律家協会主催のティー・パーティに出席。18:00～米大使館での歓迎レセプションに出席（池田首相はじめ200人）。その後、NHK番組「わたしは誰でしょう」に出演。20:00～22:00 小坂外相主催の夕食会。22:00～中曽根康弘および労組幹部と懇談・夕食。

▽6日 = 8:00～9:15 若手財界人10人と懇談。9:15～10:15 社会党議員5人と懇談。10:20～10:55 民社党代表5人と懇談。11:00～自民党若手議員6人と懇談。12:00～学生・青年団体代表17人と懇談。14:00～日本大学の名誉学位記授与式で20分講演（日大講堂、1万5千人）。15:25～16:20 早稲田大学で学生討論会に出席（大隈講堂、4000余人、16:50～NETテレビ録画放送）。18:15～18:55 フジテレビで「ロバート・ケネディ夫妻を囲んで」を収録（18:25～フジテレビ録画放送・21:40～ニッポン放送録画放送・7日22:50～TBSテレビ録画放送）。18:45～19:35 内外記者団100余人と会見（23:35～日本テレビ録画放送）。21:40～22:20 読売新聞社で編集首脳と懇談し、社内を見学。労組幹部とも会う。

▽7日 = 5:30～聖ジョセフ修道院訪問。9:30 東京羽田発、10:13 伊丹着。10:45 丸善石油学院授業参観・学生と質疑応答。その後隣接する箕面第一中学校の生徒と交歓。11:20～13:00 松下電器茨木テレビ工場訪問、労働組合代表らと昼食をともにして懇談。13:30～香里団地で主婦らと懇談。14:00～開成小学校を訪問し、授業参観。15:30～奈良東大寺大仏殿を見学。16:15～

⁵³ 『朝日新聞』東京本社版1962年2月4日付朝刊1面。

⁵⁴ 『週刊朝日』第67巻第8号（朝日新聞社、1962年2月23日）は、「こんどのケネディ長官は、明らかに、選挙ポス、よりも選挙民、ひとりひとりに語りかけ、一票一票を確実につかみとるという熱意をみせていた。ことに、アメリカ青年の典型というべき、持ち前の善意と探求心が、日本人に強い印象をのこした」（26頁）と記している。

⁵⁵ 『朝日新聞』東京本社版・『読売新聞』東京版・『毎日新聞』東京版・『日本経済新聞』・『産経新聞』・『東京新聞』・『京都新聞』・『大阪新聞』・『中日新聞』・*The Japan Times*・*The New York Times*などのロバート日本訪問関係記事、および、前出のロバート・F・ケネディ『自由の旗の下に』の32～34頁などを参照。細野軍治は、ロバート・ケネディ司法長官の来日を以前から促進していたので、訪日前に2度ロバートと会って具体的な打ち合わせをしている（『ニュースレター』第282号、日本外政学会、1962年1月21日、4面参照）。

17:00 記者約60人と会見（奈良ホテル）。移動のバスの中でも記者と懇談。17:20～17:40 山城町役場で職員と懇談。19:00～RK委員会主催で関西財界人と懇談。22:00～大学教授4人と懇談。
▽8日＝朝、京都のカトリック教会訪問。7:00～8:00全労代表6人と懇談。8:00～学生5人と懇談。9:00～裏千家今日庵で茶会。9:30～京都御所の紫宸殿を見学。11:00～川島織物を見学。12:00～京都新聞記者と会見。13:00～14:30 関西若手財界人約50人と懇談。その後、会社員・学生と懇談。15:05～長岡町役場で生活改善展示会を見学。^{おとくに}乙訓農協で農民・職員20人と懇談。その後農家訪問。17:00 大阪空港発、18:20 羽田空港着。21:20～22:20 言論界代表24人と懇談。
▽9日＝6:15 ホテル発。大使館そばの霊南坂幼稚園で園児と交流⁵⁶。6:40～合気道道場（養神館）見学。7:15～7:45 理研光学職員・学生約500人と後楽園アイスパレスでスケート、中学生と懇談。8:15～川崎工業地帯をバスで見学（ソニー工場を見学し、その後労働者と懇談。日本鋼管水江製鉄所で労働者と懇談後、圧延工場見学。富士電機川崎工場の食堂で労働者と一問一答の後、主要2工場を見学。12:40～日本外国特派員協会の昼食会で講演。14:30～総評・炭労・中立労連代表と懇談。15:30～全労・新産別労組代表と懇談。16:30～財界実力者と懇談。18:30～日本外政学会主催のレセプションに出席（天霧乗組員6人も出席）。20:00～21:40 RK委員会主催のサヨナラ・パーティに出席。21:45～産経新聞社訪問、編集・印刷職員と懇談。22:05～毎日新聞社訪問。その後、朝日新聞東京本社訪問。23:00～米報道関係者と懇談。
△10日＝9:00～京都新聞・産経新聞の記者とそれぞれ会見。宮内庁で記帳。10:10 羽田空港着。香港経由でインドネシアへ向け出発。

このような極めて過密なロバート・ケネディ司法長官の来日日程から見てくることは、ケネディ政権が、政財界の実力者や各政党の代表者だけでなく、むしろ、これからの日本を担う学生や青年、労働者や婦人といった庶民の声に耳を傾けようとしていることである⁵⁷。これは、ケネディがなぜ池田との会談を望んだかを考える上で、大事な視点である。

この訪日は、アメリカ国務省筋も非公式ながら「全体として大成功だったと思う」と語ったようだが、課題もまた見えたようである。『朝日新聞』ワシントン特派員は、次のような記事を寄せている。

「こんどの訪日はとくに政治的な交渉はふくまれていなかったが、同司法長官がケネディ大統領名代の親善使節といった形をとったため、一行の動静には米政府は強い関心を示した。米国の新聞も出発以来細大もらさずとってよいくらい詳細に報道し、ニューヨークタイムズ紙などは岩井総評事務局長との対談の模様を情景描写入りで記事にするほどの力の入れ方だった。（中略）

いちばん派手に報道されたのは早稲田大学で左翼学生のヤジにかこまれた時で、一部には『全学連（これはもう英語になっている）がケネディ夫人の腹にぶつかった』というような刺激的な

⁵⁶ 『産経新聞』1962年2月10日付朝刊3面参照。

⁵⁷ さらに、『毎日新聞』東京版1962年2月6日付夕刊1面によれば、各政党代表者との懇談の中で、沖縄・小笠原返還問題、核実験禁止、中華人民共和国の国連加盟問題などについて、各党の見解を聞いたという。

書き方をする新聞もあったが、全体としては『ケネディ長官が興奮した左翼学生にマイクロフォンを渡したのは言論の自由の何であるかを自ら教えたもの』（クリスチャン・サイエンス・モニター紙）というように日米双方にとって有意義な経験だとする論調が多かった。

（中略）かんじんの国務省では『今後の外交政策にきわめて有益』と双手を挙げて賛成しており、日本の一部に極端な主義者のあることをじかに見ることで自体がよいことだった、と評価している⁵⁸」（下線引用者）

左翼の学生たちは、ロバートとの会談を拒否したり、デモやプラカードを掲げて彼の行動を邪魔しようとしたりしたのである。弟ロバートからの詳細な報告書を読んだケネディ大統領は、日本の世論をどうしたら好転させることができるか思慮したことと思われる。

ちなみに、凶弾に斃れる3日前の1963（昭和38）年11月19日にケネディは、アジア訪問についてロジャー・ヒルズマン国務次官補らと協議しており⁵⁹、細野軍治によれば、1964（同39）年2月のケネディ来日がほぼ確定していたという⁶⁰。

e. 参議院の第三勢力になった公明政治連盟

1962（昭和37）年7月1日に投票が行われた第6回参議院議員選挙で、公明政治連盟の9人全員が当選し、全国区7人の総得票数は412万4267票、得票率は11.53%に及んだ。非改選も併せると15人となり、民社党の11議席を抜いて、参議院では、自民党（142議席）、社会党（66議席）に次ぐ第三会派になった⁶¹。公明政治連盟は、7月3日に参議院の院内交渉団体「公明会」結成を発表。7月20日に結成式を行い、12月6日には公明会結成国民大会（台東体育館、約12000人）が開催されている⁶²。2. a. で述べたように、ケネディから会談の要請があったのは、この年の暮れであった。

ちなみに、公明政治連盟は前年の1961（昭和36）年11月27日に結成され、結成時の議員勢力は、284人（参議院9人、都道府県議会7人、市区議会268人）だった。基本政策は、①核兵器反対（いかなる核兵器の製造、使用、実験のいっさいに反対）②民主的平和憲法の擁護（主権在民、戦争放棄の現憲法を擁護し改悪に反対）③公明選挙、政界の浄化④参議院の自主性確立の4項目であった⁶³。

⁵⁸ 『朝日新聞』東京本社版1962年2月11日付夕刊1面。

⁵⁹ 前出、春名幹男『秘密のファイル（下）』、286頁参照。

⁶⁰ 細野軍治「ケネディ大統領の死を悼む」（『ニューステア』第349号、日本外政学会、1963年12月1日、8面）参照。

⁶¹ 『増訂版 大衆とともに 公明党50年の歩み』（公明党史編纂委員会、2019年）、29～30頁参照。第6回参議院議員選挙の結果、民社党は改選前の16議席を11議席に減らした。ちなみに、『週刊朝日』は、1962年7月の参議院議員選挙前から創価学会の動向を注視しており、1962年6月8日号（5月31日発売）には創価学会についての記事が組まれ、「池田会長との一問一答」が掲載されている。

⁶² 『聖教新聞』1962年7月24日付1面・12月8日付1面参照。公明政治連盟は、参議院に15議席を得たことで、本会議での代表質問権や法案提出権を持つ院内交渉団体の資格を得ることになり、「公明会」という会派を結成した。

⁶³ 前出、『増訂版 公明党50年の歩み』、28頁参照。

1962（昭和37）年7月3日付の『日本経済新聞』朝刊2面には、「創価学会台風の目に 護憲勢力のカギを握る」の中見出しで、次のように書かれている。

「創価学会は全国区七名、地方区二名の候補者が全員当選し、一躍参院での第三党にのし上がった。これにより同会是非改選議員を含めて十五の議席を持つことになり、議案発議権、同修正発議権、議院運営委員会委員および常任委員長ポストの割り当てを要求する権利のある⁶⁴院内交渉団体、の資格を獲得した。これは一宗教団体の国会進出としてはわが国の政治史上、空前のものであり、今後の参院の運営に当たっては同会の存在が⁶⁴台風の目、の役割を果たすことは必至である⁶⁴」（下線引用者）

公明政治連盟の躍進は、日本国内だけでなく、アメリカにも伝えられ、一躍創価学会が注目されるようになった。半年後の記事になるが、アメリカ『リポーター』誌の1963年1月31日号には、次のように記されていた。

「七月の〔参議院議員〕選挙で起こった最も驚くべき現象は、創価学会と称する宗教団体の目ざましい進出であった。創価学会からは九名が当選して、参議院の議席数は民社党を上まわって十五議席となり、自民党がたとえば憲法の不戦条項の修正といった憲法改正に必要な三分の二の多数を獲得しようとするような場合には、その成否を左右する潜在的にきわめて重要な勢力となった⁶⁵」

また、当時、読売新聞政治部記者であった渡辺恒雄⁶⁶は、その頃のことを「創価学会に期待するもの」と題して、次のように記している。

「私は昨年〔1963年3月～6月〕欧米旅行をした際⁶⁷、各地で日本での創価学会の驚異的進出が話題になっているのを知った。特に米国での関心はかなり強いものがあつた。国防省やアジア財団の幹部たちからも私はさかんに質問を受けた。彼等の質問は一様に『ヒトラーの再現ではないか』というのである。学会の統一ある秩序ある行動を見たり聞いたりした彼らは、池田会長の強力な指導力をヒトラーのそれと同一視しかけていた。

私は彼等の質問に答えていった。『ファシズム、ナチズムの特性は独占資本や軍需資本と結

⁶⁴ 『日本経済新聞』1962年12月5日付1面の「記者手帳」には、「大平外相の留守中外相臨時代理となった川島行管長官が四日閣議後外務省に姿をみせ記者会見を行なった。（中略）話が日韓問題におよぶと『西尾民社党委員長まで日韓会談賛成だから楽だよ。民社党と社会党では国際感覚が自民党と社会党以上に違っているんだ』と民社党はわが陣営といわんばかりだったが、そのすぐあとで『もともと西尾さんより創価学会がああいうことを言ってくれたほうがより影響が大きいんだがね……』」と書かれている。

⁶⁵ エドワード・ネイラン「日本の社会主義の四つの顔＝日本社会党を分析する＝」（内閣調査室監修・内外情勢調査会編『国際情勢資料』第872号、1963年2月19日）、8頁。

⁶⁶ 渡辺恒雄（1926～2024年）は、日本の新聞記者・実業家。株式会社読売新聞グループ本社代表取締役主筆。政治部長時代、池田大作と宮本顕治にそれぞれ単独インタビューを行い、創共十年協定をスクープしている（渡邊恒雄『増補版 わが人生記 青春・政治・野球・大病』、中央公論新社、2021年）、33～34頁参照。

⁶⁷ 『読売新聞』東京版1963年6月14日付朝刊1面には、「渡辺記者帰社 読売新聞政治部渡辺恒雄記者はアメリカ国務省の招待で二か月間アメリカ各地を視察、そのあと欧州各国を約一か月歴訪し十三日午後九時十五分羽田着、帰社した」という記事が出ている。出発したのは、1963年3月4日。渡辺は、2か月間のアメリカ視察の間、政治家・政治学者・政治記者と会っている。

託すること、および戦争と侵略を是認し、暴力と宣伝を政権獲得の手段に使うことだ。だが創価学会は戦争や原水爆実験を否認し、暴力を否定し、またいっさいの資金も会の財務部員の浄財によってまかなっている。私は学会の教理を詳しくは知らないが、創価学会の政治行動は、ファシズムとはまったく別のものだ』と。

私はさらに、日本の議会政治が、財界の利権と結託し、次第に腐敗して行く保守勢力と、労組幹部の公式主義と出世主義に毒されつつある革新勢力との激突の形で展開し、このままで行けばふたたび議会政治の否認思想が一般化する恐れがある。その現情から、財界や労組の紐のついていない第三勢力としての創価学会の進出は、日本の議会政治の浄化、正常化のために大いに役立つだろう——と説明した。

帰国後、今日まで私は外国人に対するこの説明が間違っていなかったことを確信している。私は学会の信徒ではまったくないが、日本の民主政治の健全かつ正常な発展のために公政連がさらに一層進出し、地方政治だけでなく、中央政界で大活躍してもらいたいと期待している⁶⁸」(下線引用者)

ちなみに、ケネディのもとには、池田に対して好意的でない情報も入っていたと思われる。高瀬広居は『週刊現代』1963(昭和38)年3月7日号において、「きくところによると、在日米大使館は池田会長を第二のヒトラーではないかというとらえ方をし、本国にレポートしているといわれる⁶⁹」と書いている。

f. ケネディと部分的核実験禁止条約

ケネディは、大統領在任中に核実験禁止について強い意志を持つようになっていた。部分的核実験禁止条約の締結に向けては、次のようなステップが踏まれている⁷⁰。1962(昭和37)年12月の池田への会談申し入れは、その過程のことであった。

1961年 1月20日	ケネディ、第35代大統領に就任。
6月3日、4日	ケネディとフルシチョフがウィーンで会談。
9月25日	国連での演説で核実験禁止条約の早期締結を提唱。
1962年 10月	キューバ・核ミサイル危機
12月	ケネディ、池田大作へ会談を申し入れる。
1963年 6月10日	ケネディ、アメリカン大学の卒業式で「平和の戦略」と題して演説し、核実験禁止条約の重要性を訴える。ソ連のイズベスチャ・プラウダ両紙は、

⁶⁸ 「私が見た創価学会」(小平芳平『創価学会』4版、鳳書院、1964年4月)、222～223頁。小平芳平『創価学会』には、初版から4版まで「私が見た創価学会」が掲載されているが、版によって掲載されている人物が加除されている(資料6参照)。

⁶⁹ 高瀬広居「戦後異色人物探検33 創価学会会長池田大作」(『週刊現代』第5巻第9号、講談社、1963年3月7日)、75頁。高瀬は、1951年暮以降、少なくとも5度池田と会っている(同前参照)。

⁷⁰ 前出、中屋健一『ケネディ—英知と勇気の大統領—』の198～201・年譜の221～224頁などを参照。

演説全文を掲載。

- 7月2日 ソ連フルシチョフ首相、地下を除く核実験禁止条約の締結に合意。
8月5日 米英ソが部分的核実験禁止条約を正式承認。9月24日には、アメリカ上院が80対19の大差で批准⁷¹。

中屋健一は、次のように述べている。

「核実験停止条約は、平和への終着駅ではなく、スタートにすぎなかった。しかし、このスタートを切るためのケネディの忍耐強い、そして慎重な努力はまことに驚嘆に値するものだったといわなければならない。この条約は核兵器を持たない国々も参加できるものだった。日本を初め百を超える国々がこの条約に署名した。フランスと中国は署名しなかった。しかし、冷たい戦争はゆるみはじめ平和共存への道はともかく開かれた⁷²」

ケネディが核実験禁止についての考えを表明する前まで、核実験禁止活動に対するアメリカ政府の対応は極めて厳しいものがあつた。同活動を推進してきたライナス・ポーリングは、池田との対談で次のように語っている⁷³。

「ポーリング 私はバリー・コモナー、エドワード・コンドンと共同で、核実験停止の請願を書き、回覧して署名を集めました。その後、一九五八年一月十五日、ハマーショルド国連事務総長に世界各国の科学者が署名した請願を手渡しました。この請願書は『核実験の即時停止を要請する国連への請願書』と題したものです。

核実験反対の請願書に署名した科学者の数は、最終的に一万三千人になりました。これは一つの声明文に署名した科学者の数としてはおそらく最大のものでしょう。

(中略)

池田 科学者の発言は、核兵器の脅威を細部にわたって知悉しているだけに重みがあり、政治家にとって耳が痛いものであつたにちがいません。

ポーリング ですから、政治家の反応も大変厳しいものがあつました。私の平和活動に対する当局の素早い反応は、米国上院国家安全保障小委員会に出頭せよ、という召喚状でした。しかし聴聞会は数年間延期されました。米国上院侮辱罪で禁固と罰金を科すと脅されましたが、これらの脅しは実行されませんでした。

ジョン・F・ケネディ大統領が部分的核実験禁止条約締結を決断したときから、当局の私に対する態度に変化が現れました。私に対する大統領の話から判断すると、私の活動が大統領の決断にある程度の影響を与えたと思います。

(中略)

ポーリング 私は大気圏核実験再開について、ケネディ大統領に手紙を書き、そのなかで次の

⁷¹ ロバート・ダレク著／鈴木淑美訳『JFK未完の人生 1917-1963』（松柏社、2009年）、657頁参照。

⁷² 前出、中屋健一『ケネディ—英知と勇気の大統領—』、201頁。

⁷³ 前出、ライナス・ポーリング／池田大作『「生命の世紀」への探究』、164～167頁。

ように述べました。『あなたが核実験を再開したのは邪悪なことです。なぜなら、核実験は奇形児——つまり遺伝子の損傷による欠陥をもった子供——が生まれる原因となるからです。また人々がガンに侵される原因となるからです』

大統領からは返信がありませんでした。私が彼と唯一の会話を交わしたのはホワイトハウスに行ったときのことです。レセプションがあり、私はその晚餐に招かれていました。

大統領夫人が私を大統領に紹介してくださいました。大統領は私に会えてうれしいと話した後、『ポーリング博士、これから先もあなたの信念を堂々と発表してください』と言いました。それが大統領と私が交わした唯一の会話でした。

私はうれしく思いました。当時、政府は当然のことながら私を攻撃しておりました。しかし、ケネディ大統領が、アメリカは部分的核実験禁止条約を締結すべきであるとの見解を表明したとき、私の立場が正当化されたのです。それはレセプション直後ではなく、二年ほど経ってからのことでした。ホワイトハウスで晚餐会があったのは、一九六一年のことでした」
(下線引用者)

g. 池田は「日本の青年100万人」の代表

ケネディはなぜ、池田に会談を申し入れたのであろうか。The Japan Times 紙は、記事の冒頭の「拡大を続ける宗教団体・創価学会の35歳の会長池田大作は、近いうちに“日本の青年100万人”の代表としてジョン・F・ケネディ大統領との会談を予定している」に続いて、次の池田の発言を掲載している。

“Our organization now has one million youths. This means that we have Japan’s future in our hands.”

“Representing these one million young men and women, I would like to meet President Kennedy and ask him to stop testing nuclear weapons.”

「我々の組織には現在100万の青年がいます⁷⁴。これは日本の未来は我々の掌中にあるということです」

「私は、この100万の男女青年を代表してケネディ大統領とお会いし、核実験をやめるよう伝えたい」

池田は、日本の100万人の青年の代表としてケネディに会うと言っている。ケネディも、日本の青年のリーダーである池田と語り合いたいと伝えていたのかもしれない。当時創価学会の副理事長・青年部長であった秋谷栄之助によれば、ケネディとの会談に男子青年部幹部が同行するこ

⁷⁴ 1962年10月27日の本部幹部会では、総世帯数が298万6676世帯と発表されている（『聖教新聞』同年10月30日付1面参照）。

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作—実現に至らなかった会談をめぐって—

となり、略礼服の様な黒い背広を用意したとのことである⁷⁵。また黒柳明も、ケネディとの会談には、自分を含めた青年が同行する予定だったと語っていた⁷⁶。

続いて *The Japan Times* 紙の記事は、池田について次のように紹介している。

「核実験への反対自体は目新しくもない。しかし、眼光鋭くがっしりとした池田がそういう場合、人畜無害で陳腐なスローガン以上の意味を帯びてくる。彼は、日蓮正宗の熱心な信者 600 万人を率いる指導者で、その宗教政治団体は日本の第三の政治勢力へと急速に発展しているからだ。

さらには、創価学会は海外でも拡大している。池田は5回目となる海外布教の旅から帰国したばかりだ。今回はアメリカと、欧州・東南アジア合わせて10カ国を、8名の側近と共に歴訪した。

池田は、海外訪問の目的を「激励と正しい指導、を海外の会員に与えるためとした。アメリカには約3,700世帯、欧州に200～300世帯、東南アジアに数千世帯の会員がおり⁷⁷、ほとんどが日系だという」(下線引用者)

先に紹介した全労の滝田の場合、渡米前からケネディと会うことが決まっていたわけではなかった。池田の場合、ケネディから会談を申し入れたということは、ケネディの意向が強く働いていたと考えられる。

3. ケネディの意向を伝えた人物

a. 伝えた人物についての池田の言及

池田は、次のように述べている(下線引用者)。

「私が会長に就任した少しあと、大統領が『お会いしたい』とのことであると、大統領の関係者から連絡があった⁷⁸」

「かつて私も、ケネディ大統領の関係の方から、ご招待をお受けしたことが懐かしい⁷⁹」

「かつて大統領との会見の要請が関係者からあったが、実現しなかった⁸⁰」

池田は、『新・人間革命』第7巻において、「ある著名な民間人が伸一を訪ね、ケネディとの会見の意向を打診したのだ。その人は言った。『私は、本日は国務省の意向を受け、その使者としてまいりました (以下略)』⁸¹」(下線引用者)と書いている。1963(昭和38)年2月1日の創価学

⁷⁵ 2024年12月13日に行った秋谷栄之助からの聞き取りによる。

⁷⁶ 吉村元佑が2025年8月8日に記した筆者への書簡による。

⁷⁷ 高瀬広居『第三文明の宗教 創価学会がめざすもの』(弘文堂、1962年)の(付)5頁には、「海外支部及会員数(昭和37・10現在)」として、アメリカ総支部3,600人、東南アジア総支部1,500人、台北支部800人、ヨーロッパ連絡所100人以上、合計約6,000人と書かれている。

⁷⁸ 『聖教新聞』1993年11月23日付4面。

⁷⁹ 『聖教新聞』2004年4月10日付2面。

⁸⁰ 『聖教新聞』2004年8月11日付3面。

⁸¹ 『聖教新聞』1997年5月31日付3面。

会男子部幹部会では、「ケネディ大統領、ラスク〔国務〕長官⁸²にも、その主張がいえるような機会のルートができたのであります⁸³」と述べている。

また、浅野著『あすの創価学会』には、「東京・信濃町にある学会本部に、ある有力民間人が意向打診に現われた。アメリカ国務省の意を受けてきたといい、『ケネディ大統領が両国政府に関係なく、貴下と個人的な資格で会見をもちたい、と希望されている。国務省が私に、使者として意向をたしかめてほしいと依頼してきた。いかがですか』(中略)あわただしく準備が進むうち、当時の駐日大使であったライシャワーが二人の会見計画を知って驚き、渡米前に会見したいと申しこんできた⁸⁴」(下線引用者)と書かれている。これは、会談申し入れにアメリカ大使館が関与していなかったことを意味している。

これらから、会見の意向を伝えた人物は、「著名な民間人」で「ケネディの関係者」、さらには、国務省の使者が務まる人物に絞られる。

b. ケネディと面識のあった民間人

池田は、『新・人間革命』第7巻で、「ある著名な民間人」からケネディからの会談の意向が伝えられた、と述べている。そこで、まず日本人でケネディと面識があった人物を挙げることはじめたい。凶弾に斃れたケネディの死去を受けて、1963(昭和38)年11月23日の新聞各紙には追悼文が掲載されている。その中で実際にケネディと言葉を交わしたことがあるのは、次の人々である⁸⁵。

『朝日新聞』：朝海浩一郎(前駐米大使)・犬養道子(小説家)・細野軍治(日本外政学会理事長)、『読売新聞』：細野軍治、『日本経済新聞』：細野軍治と長女治子・朝海浩一郎、『産経新聞』：細野軍治・朝海浩一郎、『東京新聞』：細野軍治・朝海浩一郎、『中部日本新聞』：朝海浩一郎・細野軍治。

以上のように、新聞に最も掲載されたのは、朝海と細野である。

『週刊朝日』(緊急増刊)第68巻第53号(1963年12月10日)の「私の会ったケネディさん」では、佐藤栄作(国務大臣)、三木武夫(自民党政調会長)、田中角栄(大蔵大臣)、滝田実(全労初代議長)、俣野健輔(飯野海運社長)、阿部孝次郎(東洋紡会長)、朝海浩一郎、細野軍治がケネディとの思い出を語っている。そのうち「民間人」は、太字の4人。ケネディとの関係は、以下の通り。

⁸² 大森実は、『ケネディ 挑戦する大統領』(講談社、1978年)において、「国務長官ポストは閣僚最右翼としてナンバー・ワンの権威があった。国防長官にしてもCIA長官にしても、大統領の不在時は閣僚ポスト第一順位のラスク国務長官の発言には楯をつけない。それがアメリカの慣習だったし、ラスクはそういう権威主義者であった」(39頁)と記している。ラスクについては、デイビッド・ハルバースタム著/浅野輔訳『ベスト&ブライテスト1 栄光と興奮に憑かれて』(サイマル出版会、1976年)の40～58頁に詳しい。

⁸³ 『聖教新聞』1963年2月5日付1面。

⁸⁴ 前出、浅野秀満『あすの創価学会』、54～56頁。エドウィン・O・ライシャワー『ライシャワー自伝』(文藝春秋、1987年)には、「創価学会の池田大作会長とも何度か会った」(292頁)と記されている。

⁸⁵ 1963年11月23日付の『朝日新聞』東京本社版夕刊10面・『読売新聞』東京版夕刊11面・『日本経済新聞』夕刊5面・『産経新聞』夕刊7面・『東京新聞』夕刊6面・『中部日本新聞』夕刊5面、などを参照。

細野軍治は、1951(昭和26)年10月に当時GHQに勤務していた友人ガーディナーの紹介で、下院議員だったケネディ・弟ロバート・妹のパトリシアと新橋で会食。この時依頼された調査の報告をケネディに伝えたところ、そこから二人の交流が始まり、大統領就任式に招待されて再会。最後に会ったのは、1961(同36)年11月。『主婦の友』1964年1月号にも、細野軍治の談話「ケネディさん夫妻と私」が掲載されている。さらに、長女治子のアメリカ留学中の保証人は、ケネディだった。

俣野健輔は、細野と同じコロンビア大学の大学院で学ぶ。1952(昭和27)年に細野の依頼で、来日した妹のパトリシアと友人数人の歓迎会を両家族で開いた。その縁で、上院議員になったケネディと1959(同34)年4月14日にホワイトハウスの執務室で会う。ケネディとは何度か手紙を交わしており、長女の慶子は、細野治子と同じアメリカの大学に留学していた⁸⁶。

阿部孝次郎は、対米経済使節団(8人)の一人として、1961(昭和36)年4月21日にホワイトハウスで会っている。

滝田実は、前述(2.c.)のように、1961(昭和36)年3月3日にホワイトハウスで単独で会っている⁸⁷。

また、NHK総合テレビでは、1963(昭和38)年11月26日の「時の人」に細野軍治・治子。同日のケネディ追悼の特別番組の座談会には、朝海浩一郎・細野軍治・花見弘平・滝田実と官房長官の黒金泰美が出演⁸⁸。さらに、『週刊朝日』第68巻第52号(朝日新聞社、1963年12月6日)の「荒垣秀雄連載対談 時の素顔③」の対談者は、細野治子⁸⁹だった。

あわせて、後に池田と関係が確認されている若泉敬・渡辺恒雄・大森実について可能性を検討しておきたい。若泉⁹⁰は、1961(昭和36)年5月10日にワシントンD.C.近郊の大学に学ぶ留学生(日本人は24人)が招待されたホワイトハウスでのレセプションでケネディに会っている⁹¹。しかし、1962(同37)年当時は防衛庁勤務で、民間人とはいえない。渡辺は、前出の著書『増補版 わが人生記 青春・政治・野球・大病』では、ケネディのことに触れていない。大森⁹²は、

⁸⁶ 俣野とケネディの関係については、南日本新聞社編『俣野健輔の回想：昭和海運風雲録』(同書刊行会、1972年)の354～362頁も参照。

⁸⁷ 『週刊読売』第22巻第49号(読売新聞社、1963年12月8日)では、滝田実と朝海浩一郎がコメントを寄せている。

⁸⁸ 『読売新聞』東京版1963年11月26日付朝刊11面・『産経新聞』同日付朝刊11面などを参照。

⁸⁹ 細野治子は、アメリカの大学への留学の際、保証人になったケネディとは何度か会っており、大統領就任式には父軍治とともに出席し、後日ホワイトハウスでケネディと言葉を交わしている。

⁹⁰ トインビーに池田を紹介した若泉敬は、1954年4月から保安庁保安研修所(のちの防衛庁防衛研修所)教官を務め、その間、60年から米国ジョンズ・ホプキンス大学高等国際問題研究所へ研究留学。66年から京都産業大学教授。

⁹¹ 1969年9月23日付のトインビーから池田宛の書簡、ジョン・F・ケネディ大統領記念図書館博物館所蔵資料、『読売新聞』大阪本社版2022年8月11日付朝刊23面の福井版、などを参照。記事によれば、越前市で開催された企画展では、ケネディ大統領の末弟エドワードと若泉が写った写真も展示されていたという。

⁹² 大森は、池田との共著に『革命と生と死—大森実直撃インタビュー』(講談社、1973年)があるが、ケネディについては触れられていない。

大統領就任式の取材はしているが、ケネディと話したとは語っていない。

c. ケネディと日本をつないだ細野軍治

以上のことから、日本の「民間人」でケネディと最も親交が深いと考えられるのは、細野軍治(1895～1969年)である。彼は、ケネディが下院議員の時代に、駆逐艦天霧の艦長花見弘平を探し出したことをきっかけに、ケネディ大統領だけでなく、弟ロバート、妹パトリシアやユーンズ、ケネディの母ローズなどとも親交を深めていた。

実は細野は、10年間アメリカの大学で学び、7年間国際機関で働いていた。まず、ケネディと出会う前の略歴を見てみたい。

- 1895年5月5日 東京府南多摩郡南村鶴間（現在の町田市鶴間）に生まれる。
- 1915年3月 早稲田実業学校を卒業。12月より、アメリカへ留学。
- 1921年2月 南カリフォルニア大学政治科を卒業。9月より、コロンビア大学修士課程に進学。
- 1921年11月 ワシントン軍縮会議を大阪新報の記者として取材。
- 1926年6月 博士論文 International Disarmament（国際軍縮論）で、コロンビア大学から Ph.D. を授与される。
- 1926年11月から7年余 ジュネーブで国際労働機関の帝国事務所嘱託として会議に出席。政府代表は前田多門、国際連盟事務次長は新渡戸稲造。
- 1934年3月 ジュネーブより帰国。外務省嘱託に。
- 1939年5月 博士論文「国際裁判と安全保障—集团的平和機構の研究」で、東京帝国大学から法学博士の学位を授与される。国際平和機構を研究した博士論文は、日本の大学で初めてだったという。
- 1947年12月 日本国際連合協会常務理事に就任。
- 1950年4月 青山学院大学教授に就任。
- 1953年9月1日 財団法人日本外政学会理事長に就任。

以上のように、細野は、日本の平和学研究の先駆けとなった一人である。次に、彼とケネディの交友を見てみたい。

1951（昭和26）年10月 来日した33歳の下院議員ケネディらと築地の小料理屋で昼食をともにする。この時、ケネディからは是非協力してほしいと、次のような依頼をされる。

「私はソロモン海で1942年に日本海軍と戦った。そのとき自分の指揮していた魚雷艇を真っ二つにした勇敢な駆逐艦の艦長と、父が駐英大使だったときの日本の駐英大使重光葵氏に会いたい」

細野は「かつての敵に敬意を表したい」というケネディの話に感激して調査。その駆逐艦は「天霧」で、艦長は福島県耶麻郡塩川町在住の花見弘平であることが判明したが、急なことでケネデ

ィに会わせることはできなかった。一方、重光とはすぐに連絡が取れた。この日細野は、半日ケネディと行動を共にした⁹³。

1953（昭和28）年2月18日 ケネディが細野に、「日本を訪れたい。私は上院議員として両国の緊密なる関係を維持することに全力を尽くしたい」との書簡を送る。以後細野は、ケネディの来日を促進する活動を精力的に行う⁹⁴。後日細野は、ケネディの死去の報に「私はケネディ大統領の訪日にすべてをかけていたので、それを前にしての今回の訃報程私を驚かし、また悲しませたものはない⁹⁵」（下線引用者）と記している。

1958（昭和33）年6月15日 ピューリッツァー伝記賞を受章したケネディ著『勇氣ある人々』を細野が理事長を務める日本外政学会から出版。

1961（昭和36）年1月20日 大統領就任式に、長女治子とともに個人的友人として招待される。パレード終了後、退場するケネディと握手し、短時間語り合う。18日のレセプション、19日のコンサート・舞踏会にも出席⁹⁶。

1961（昭和36）年1月25日 昼過ぎ、ホワイトハウスの執務室で、長女治子とともに、ケネディに大統領就任を祝う池田勇人首相からの書簡と天霧の乗組員17人が書いたお祝いの寄せ書きを手渡す。ケネディは自著『勇氣ある人々』就任式特別版に、池田首相へ宛てて「最高の敬意をもって日本のために祈る」と書いて託す。30分近く懇談。この時ケネディは、改めて訪日の希望を表明した。細野にとって10年ぶりの再会だったが、ケネディが大統領就任以来外国人で面会した初めての人になった。このことは日本の新聞各紙で報道され、細野の存在は広く知られることになった⁹⁷。

1961（昭和36）年11月7日 ホワイトハウスの執務室でケネディと細野軍治・次男徳治の3人で30分位懇談。その際もケネディは訪日の意向を語る⁹⁸。

1962（昭和37）年2月21日 日本外政学会が主催する第9回奨学論文コンテストの最優秀者2名には、アメリカ視察旅行とともにケネディ大統領と会見が予定されていると同学会の『ニュースレター』に掲載⁹⁹。

また、日本外政学会（理事長：細野軍治）では、次のようなケネディ関係の書籍が出版されている。

⁹³ 『ニュースレター』第246号（日本外政学会、1961年1月21日）、7頁参照。

⁹⁴ 細野軍治「ケネディ大統領の死を悼む」（『ニュースレター』第349号、日本外政学会、1963年12月1日、8面）、および、前出の細野徳治「無冠の国際人、細野軍治の学問と行動の事蹟」の5頁を参照。『女性自身』（光文社）の特派員として世界各国をまわってインタビューを行っていた大野典子は、『花：世界のトップレディをいける』（河出書房、1964年）の中で、「民間大使といわれるほど日米親善に尽くしておられる細野軍治氏には、〔ジャクリーン夫人宛の〕紹介状を書いていただいた」（17頁）と記している。

⁹⁵ 細野軍治「ケネディ大統領の追憶」（『国防』第12巻第12号、国防研究会、1963年12月）、13頁。

⁹⁶ 前出の『ニュースレター』第246号の7頁および『毎日新聞』東京版1961年1月21日付夕刊1面を参照。

⁹⁷ 『読売新聞』東京版1961年1月19日付夕刊2面・1月26日付夕刊7面・2月13日付朝刊11面・2月14日付夕刊2面、『毎日新聞』東京版同年1月26日付夕刊7面、『朝日新聞』東京本社版同年1月26日付夕刊5面・2月13日付朝刊10面、『日本経済新聞』同年2月13日付11面、などを参照。

⁹⁸ 前出、細野徳治「無冠の国際人、細野軍治の学問と行動の事蹟」、7頁参照。

⁹⁹ 『ニュースレター』第285号（日本外政学会、1962年2月21日）、8頁参照。

- ジョン・F・ケネディ著／下島連訳『勇気ある人々－良心と責任に生きた八人の政治家－』（1958年）
- ジョン・ケネディ著／細野軍治・小谷秀二郎訳『平和のための戦略—新時代の探究—』（1961年）
- J・M・バーンズ著／下島連訳『ジョン・ケネディ：その生いたちと政治的横顔』（1961年）
- ロバート・F・ケネディ著／波多野裕造訳『自由の旗の下に—正義の友として 勇敢な敵として—』（1962年）
- ロバート・F・ケネディ著／波多野裕造・横堀洋一共訳『内部の敵』（1962年）
- ディーン・ヘラー、デヴィット・ヘラー著／細野治子訳『ジャクリーン・ケネディ』（1962年）
- ジョン・F・ケネディ著／下島連訳／中屋健一解説『勇気ある人々－青少年版－』（1963年）
- ジョン・F・ケネディ著／下島連訳『英国はなぜ眠ったか』（1963年）
- ロバート・ドノヴァン著／波多野裕造訳『PT109 太平洋戦争とケネディ中尉』（1963年）
- ジョセフ・ディニン著／中曽根由紀訳『ケネディ家の人々』（1964年）

細野は大統領の訪日は簡単には実現できないので、弟の司法長官ロバート・ケネディの来日を促す活動も精力的に行った。ロバートは、次のように記している。

「それ〔大統領就任式〕から数日の後、細野博士は司法省に私（訳注＝著者は司法長官に就任していた）を訪ねてきた。博士は大統領の日本訪問を望み、それが不可能な場合は私がかわりに訪日することを切望した。『日本にニュー・フロンティア精神を知らせることは絶対に必要です』と博士はつぎのように強調した。

『一九六〇年の反米安保騒動¹⁰⁰は米国のみならず、日本にもあと味の悪さを残しています。日本国民の大部分はアメリカに対して温かい気持を持っているのです。だから米国の代表的人物から何らかの呼びかけ——殊に青年や自由主義的な考え方の政治家に対して訴えるような呼びかけが行なわれることは非常に意義があると思います。』

私は新しい職責を負っているので、そのような旅行をすることは、なかなか難しいだろうということを説明した。博士はいささか失望したような顔をしたが、それで思いとどまった様子にはなかった。博士はライシャワー駐日大使を説き、ついに大使を賛同者にしてしまった。しかも博士はそれだけで満足しなかった。

私のもとには博士から数週間ごとに日本訪問の重要性を説いた手紙が舞い込んだ。十日にあげず、細野博士の紹介状を持った日本からの訪問客が私を役所に訪れた。訪問客たちは、握手をして座につくやいなや、申し合わせたように私に向かって、できるだけ早い機会に日本に来るべきだと切り出すのだった¹⁰¹」

以上述べてきたように、日本の民間人で、ケネディ大統領が池田との会談を希望していることを共有できるのは、細野軍治が最有力である。なお、彼は池田と面識はないが、政財界に幅広い人脈を持っている。池田とつながりのある人物に取り次いでもらって、池田と会ったのではない

¹⁰⁰ 本稿の注36を参照。

¹⁰¹ 前出、ロバート・F・ケネディ『自由の旗の下に』、16頁。

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作—実現に至らなかった会談をめぐって—

か。『新・人間革命』第7巻の「萌芽」の章には、「ある筋を通して、私に会いたいという連絡があったんです」（下線引用者）と書かれている。

d. ケネディに池田との会談を提案した人物について

池田は、前出の「随筆 人間世紀の光 61」において、「大統領との会見を推進してくださったアメリカの方々もおられた」と記している。おそらく、アメリカ在住の人物が、池田と会うことをケネディに働きかけたと推察される。

『池田大作—思想と行動』『池田大作—平和への旅』などを著した吉村元佑は、以前、渡部一郎（1963年1月の池田のアメリカ在住創価学会員への指導に同行）から聞き取った話を、次のように記している。

「ケネディ大統領と面会することが決まった、というビッグニュースを渡部に伝えた池田は、『大統領は、世界中の良い青年に会おうとしている』と、その背景を語ったそうです。

ケネディは、1961（昭和36）年3月に発足した平和部隊（本稿1.d参照）に参加した青年たちと会っていました。その出会いの中で、渡部の言葉に従えば、“そこへ食い込んだ人がいる”とのこと。アメリカの青年部員が、大統領との会話の中で、池田と創価学会の存在を熱っぽく語り伝えたのでしょう（趣意）¹⁰²」（下線引用者）

ちなみに、ケネディが池田への会談を申し入れた1960年代は、創価学会に関する欧米の研究が増え始めた時期にあたる。この時期の研究で特徴的なのは、政治活動が大きく扱われていることだ¹⁰³。それは、創価学会が推薦する公明政治連盟の候補が1962（昭和37）年7月の参議院議員選挙で全員当選し、その後公明党が結成されたことも影響していたと思われる。このような創価学会の伸長は、今後のアジア政策や訪日を考えていたケネディにとって、インパクトのあるニュースではなかったか。

1961（昭和36）年3月には、全労議長の滝田実とホワイトハウスで単独会見した先例がある。池田を語り合うべき青年とみたケネディは、「一私人」として会うことを望んだのではなかろうか。

4. 戸田城聖の遺命実現とケネディとの会談

a. 池田がケネディに伝えたかったこと

以下の *The Japan Times* 紙のインタビュー記事によると、池田が会談を承諾したのは、“今日の世界において責任ある指導者”2人のうちの1人であるケネディに、戸田城聖の遺訓である核実験停止と地球民族主義を伝えたいと考えていたことがわかる。池田は次のように語っている（下線引用者）。

¹⁰² 吉村元佑が2025年8月8日に記した筆者への書簡による。

¹⁰³ 栗原淑江「欧米における創価学会研究の動向」（『東洋哲学研究所紀要』第6号、東洋哲学研究所、1990年）、216頁参照。

Ikeda told The Japan Times in an interview Thursday that he wanted to meet Kennedy because the President is one of the two “responsible leaders of the world today.” The other is Premier Nikita Khrushchev of the Soviet Union, whom Ikeda also hopes to meet.

池田は、2月14日、本紙とのインタビューで、ケネディ大統領との会談を望むのは、“今日の世界において責任ある指導者”二人のうちの一人であるからだと言った。もう一人は、ソ連のニキータ・フルシチョフ首相で、そちらとも会談を望むと述べた。

“Representing these one million young men and women, I would like to meet President Kennedy and ask him to stop testing nuclear weapons.”

「私は、この100万の男女青年を代表してケネディ大統領とお会いし、核実験をやめるよう伝えたい」

“The second purpose of my meeting with President Kennedy is to tell him that the solution for ending present world tensions is inherent in the gospel of St. Nichiren,” Ikeda said. He termed it “global racialism.”

「ケネディ大統領と会談する第二の目的は、今日の国際的緊張を解消する方途は、日蓮大聖人の教えに内在していることを伝えるためです」池田はこれを「地球民族主義」と言った。

“Although I am not at all sure whether President Kennedy will listen to me on this point,” he added with a smile.

「ただし、その点に関してはケネディ大統領が耳を傾けてくれるかは分かりませんよ」と池田は笑顔で付け加えた。

池田は、1963（昭和38）年2月1日の創価学会男子部幹部会において、次のように述べている。

「私も、三百万世帯を越えた今日、なんとか、原水爆禁止の主張と、それから東洋仏法の神髄たる、唯心・唯物二大思想をも指導する色心不二の大生命哲学でなければ、絶対に、この行き詰まりを、どうしようもないということを、世界の大国の指導者に教えたい、聞いても聞かなくてもいいから訴えておきたい、こういう念願でございました¹⁰⁴」

また、3日後の2月4日に開催された創価学会女子部幹部会では、次のように述べている。

「先日は男子部の幹部会の時に、恩師戸田先生の原水爆禁止の主張を再確認して、しっかりそれを世界に流布していこう、こういうふうに申しました。その一つの具体的な方法といえますか、または日本民族の行き方として、全世界に向かって、日本の国だけが原水爆の洗礼を受けた犠牲

¹⁰⁴ 『聖教新聞』1963年2月5日付1面。

の国です。どんなことがあっても、原水爆の戦争はあってはならない。禁止をすべきだといきれる資格のあるのは日本民族です。

で、戸田先生の主張は、とうぜん私も、第一線に立って死ぬまでいきっていきます¹⁰⁵」

浅野著『あすの創価学会』（1970年刊）では、次のように書かれている。

『『お会いしましょう。私もお話したいことがいろいろあります』

早速、北条浩副会長（当時、総務）ら最高幹部を集めて「ケネディ会見」を伝え、必要な準備を指示した。

公明党（当時、公明政治連盟）幹部にも秘かに会見のことが伝えられた。会見に備えて内外の情勢分析が池田を中心に専門家を集めて行なわれた。池田はアメリカのアジア政策や核政策について一つの構想をいっていた」（下線引用者）

加えて池田は、『新・人間革命』第7巻の「操舵」の章では、ケネディとの会談において「米ソ首脳会談の早期再開」と「世界首脳会議の開催」も提案したいと考えていたと述べている。

「伸一は、世界の平和を打ち立てていくには、戸田城聖の『原水爆禁止宣言』の精神を、現実化せねばならぬと思っていた。彼は、そのために、ケネディに提案したいことがあった。それは、米ソ首脳会談の早期再開であった。（中略）

また、伸一は、核を廃絶し、恒久平和への流れを開くために、米ソ首脳会談とともに、世界各国の首脳が同じテーブルに着き、原水爆や戦争の問題などを忌憚なく語り合う、世界首脳会議の開催も提案しようと考えていた¹⁰⁶」（下線引用者）

実は、世界首脳会議の開催については、2月4日の女子部幹部会で、その構想が語られている。

「〔首脳会議では〕どんなことを論じてもよいけれども、究極の目的は、ぜんぶ世界の平和、人類の幸福、戦争は絶対に禁止、こういうふう話し合いを一年、二年つづけていけば、私はひじょうにいい、有意義な結果になるだろうと思うし、また指導者にそれだけの雅量がなければならぬと私は思うのですけれど、どうでしょうか¹⁰⁷」

さらに池田は、先に紹介した『あすの創価学会』の下線部分によれば、アメリカのアジア政策（より具体的には、対中国政策）についてケネディに尋ねる意向があったようだ。

b. 池田の根底にある核兵器廃絶と地球民族主義

ケネディからの会談の申し入れがあった半年後の1963（昭和38）年の初夏、池田は作家の杉本苑子に次のように語っている（下線引用者）。

「ぜったいに、私どもは戦争反対です。どのような犠牲を払っても平和は守られるべきだと思うのです。国と国とが対立し合うという現状は悲しむべきことで、世界は民族、国境を越えて、

¹⁰⁵ 『聖教新聞』1963年2月7日付1面。

¹⁰⁶ 池田大作『新・人間革命』第7巻（聖教ワイド文庫、2004年）、322～323頁。

¹⁰⁷ 『聖教新聞』1963年2月7日付1面。

ひとつにならなければいけません。学会の理想は、地球民族主義です¹⁰⁸」

また、核兵器廃絶について池田は、*The Japan Times* 紙の連載の中で、次のように述べている。

「わが師〔戸田城聖〕が、なぜ、これほどまで激しい表現をもって、核兵器を弾劾したのか。

それは、核兵器のもつ本質が、世界の民衆の生存の権利を奪う『絶対悪』であることを、明らかにするためにほかならなかった。

他者をほしいままに支配せんとするエゴイズムの魔性が、核兵器の保有という究極の姿で国家に体现された時代状況に対して、師は『生命論』の深き次元から強く警鐘を鳴らしたのである。

核兵器の存在を戦争抑止の『必要悪』とする思考が、核兵器廃絶への最たる障害である。この障害こそ、取り除かれなければならない。

恩師の宣言は、核兵器を『絶対悪』ととらえたがゆえに、イデオロギーや国家の利害にとらわれず、`力の政治、の議論にも惑わされることがなかった¹⁰⁹」

それでは、このような池田の根底にある核兵器廃絶と地球民族主義の思想はどのようにして形作られたのであろうか。

池田は、自身の戦争体験を次のように語っている。

「終戦のとき、私は17歳であった。

長兄はビルマ〔=現・ミャンマー〕の戦線で戦死し、次兄は中国で戦線に参加。3番目の兄も同じく中国で戦わされた。4番目の兄も、中国戦線に参加した。

昭和20年8月15日、日本は終戦を迎えた。(中略)

しかし、わが家の三人の兄が中国から帰ったのは、戦後1、2年経ってからだった。皆、命からがら、わびしそうに帰ってきた。

わりあい立派だったわが家も、戦争中、強制疎開させられた。東京・蒲田の糀谷から移って、馬込の親戚のそばに作らせてもらった家も、空襲で全焼した。

父親がリウマチを患うなか、母親は、精いっぱい、一家を守ってくれた。長男から4男まで戦争に取られ、5男の私は肺病であった。わが家は戦争に翻弄された。

あまりにも不平等であり、あまりにも理不尽な現実があった。

ゆえに、私は絶対に戦争に反対である。

戦争と権力に対して、反対する精神を、その時に持った。

これが、私が戸田〔城聖〕先生のもと、立ち上がった大きな原点である¹¹⁰」(下線引用者)

¹⁰⁸ 杉本苑子「大石寺詣での人々とともに 創価学会ルポルタージュ」(『主婦と生活』第18巻第9号、主婦と生活社、1963年8月)、195頁参照。8月号は、7月17日発売。

¹⁰⁹ 池田大作『明日をみつめて 池田大作の最新エッセイ集』(The Japan Times、2008年)、42～43頁。なお、同書は、*The Japan Times* 紙に2003年9月11日から2008年1月31日まで掲載された池田のエッセイに加筆・編集したもの。1975年5月にモスクワ大学が池田へ名誉博士号を授与した理由の二番目は、「核兵器禁止の構想」であった(『聖教新聞』1975年5月29日付1面参照)。これは、池田にとって初めての名誉学術称号。

¹¹⁰ 「全国最高協議会での名誉会長のスピーチ①」(『聖教新聞』2006年9月25日付)、2面。

池田は、戸田と出会った1年半後の1949(昭和24)年1月に戸田が経営する日本正学館に入社し、少年雑誌の編集を担当。6月からは編集長になった。池田が編集した同年10月号と11月号の『少年日本』では、GHQによる検閲がある中で、原子力と原子爆弾についての特集を組んでいる。まず10月号では、小松崎茂の画による「原子力機関車と原子力空中船 近づく輝く原子力時代は。」と、沢田謙の「世紀の科学者 アインシュタイン 相対性原理から原子爆弾へ」を掲載。沢田の文章は、「アインシュタインは、自分のつくらせた原子爆弾の将来について、大へん心配している。『科学の上からみて、原子爆弾をふせぐ方法は考えられない。人類がほろびてしまうのをすくうには、世界に正しい平和をうちたてるほかはない』といま一生けんめいそのことを考えている」(下線引用者)で終わっている。

続く11月号では、秋永芳郎の小説「原子野の花」と、新進気鋭の理論物理学者である中村誠太郎の「原子力とこれからの世の中」を掲載している。「原子野の花」は、原爆が投下された1945(昭和20)年8月6日の広島を描いたもので、結びの「ああ、荒野。この荒野に、美しい平和の花が咲くのはいつだろうね」という言葉が印象的である。当時、原爆の惨禍を描いた児童小説が発表されることは、ほとんどなかった¹¹¹。

社長である戸田は、11月号を6万部印刷し¹¹²、全国17の新聞に広告を掲載している¹¹³。発行を続けることが経営的に困難になり次号までで休刊していることを考えると、この時期に増刷し広告を出すのは、彼によほどの意志がなければできないことである。池田は、この経験を通して、戸田の原爆に対する強い怒りを感じ取ったに違いない。

一方、戸田はどうであったか。

『評伝 戸田城聖』下巻の「あとがき」では、「戸田の願いを端的に表現した三つの言葉」として、「地上から、`悲惨、の二字をなくしたい」「自らの思想は`地球民族主義、である」「たとえある国が原子爆弾を用いて、世界を征服しようとも、その民族、それを使用したものは悪魔であり、魔物であるという思想を、全世界に弘めることこそ、全日本青年男女の使命であると信ずる」を挙げている¹¹⁴。これに、若干の補足を加えたい。

戸田は、1番目の言葉「地上から、`悲惨、の二字をなくしたい」という趣旨の話をたびたび語っている¹¹⁵。池田が戸田と初めて会った時(1947年8月)にも、「私は、この世から一切の不幸と

¹¹¹ 「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝 戸田城聖』下巻(第三文明社、初版第2刷、2024年)、66～67頁参照。

¹¹² アメリカ合衆国メリーランド大学ホーンベイク図書館ゴードン・W・ブランゲ文庫提供のカラー画像による。戦後戸田が出版した少年雑誌『冒険少年』『少年日本』各号の発行部数の中で、1949年11月号の6万部は飛び抜けて多い(前出、『評伝 戸田城聖』下巻、初版第2刷、61・83・87頁参照)。

¹¹³ 前出、『評伝 戸田城聖』下巻(初版第2刷)、68頁参照。

¹¹⁴ 同前、525頁参照。

¹¹⁵ 『聖教新聞』1957年1月1日付第一元旦号1面の年頭の辞「仏法で民衆救済」、および、『池田大作全集』第73巻(聖教新聞社、1996年)の288頁などを参照。戸田は、「仏法の目的は、全人類の人格を宇宙大の最高の境涯に高めていくことだ。そうすれば戦争も不幸もなくなるだろう」と語っていたという(アレクサンドル・セレブロフ/池田大作『宇宙と地球と人間』、潮出版社、2004年、295頁参照)。

悲惨をなくしたいのです！」と語っていたという¹¹⁶。

2番目の言葉は、戸田が創価学会の第1回男女合同青年部研究発表総会（1952年2月17日）で「自らの思想は地球民族主義である、と述べたことによる¹¹⁷。彼がこの言葉を語った記録は、この時のものしか残っていない。池田は、次のように述べている。

「宇宙の根本法たる仏法の真髓を覚知された戸田先生は、つねに宇宙的視野から、物事を考えられていた。（中略）民族、国家、イデオロギーなどを超え、人類が『地球家族』『世界は一つ』という認識に立って、共存への道を開かなくてはならないというのが、先生のお考えであられた¹¹⁸」

「一国を超え、一民族を超え、人類という見地から、一人一人が地球民族、世界民族としての自覚をもつ時、おのずと争いのない平和な社会が現出するにちがいない。

戸田先生は、イデオロギーを「主」、人間を「従」とする、当時、支配的であった思想から、人間を「主」、イデオロギーを「従」とする新しき思想への転換の必要を鋭く見とおしておられた¹¹⁹」

このような世界の民衆の幸福と平和社会を希求する考え方は、戸田の先師である牧口常三郎以来、一貫したものであった。1930（昭和5）年11月に発刊された牧口著『創価教育学体系』に序文を寄せた一人に、第一次世界大戦後誕生した国際連盟の初代事務次長を務めた新渡戸稲造がいる。彼は、牧口と二十数年の親交があり、牧口をよく知る人物である。この序文は、新渡戸が書いた76の序文の中でも格段に長く¹²⁰、牧口が創価教育学に込めたものが鮮明に浮かび上がってくる。彼は、「殊に其の論述する所人生の目的より教育の目的を演繹し、国家社会生活に於ける人類の幸福を主眼とせる点に於て、従来の観念的な天上の幻影にも似たる教育目的を、科学的な地上の教育にまで現実化したるは偉大なる教育の転向であるといへる」（下線引用者）と述べている。つまり、牧口が掲げる教育は、児童の幸福に止まらず全人類の幸福（＝平和な社会実現）を目指しており、観念的な目的ではなく現実的な目的へと偉大なる教育の転換を果たしている、と洞察しているのである。

このように新渡戸が創価教育学に込められた核心部分を鋭く洞察できたのは、牧口が「人道的競争」を提唱した『人生地理学』（1903年刊）を熟読しており、青年期からの牧口の考えを深く理解していたからに他ならない。さらに、新渡戸自身が、軍国主義の色を濃くしていく日本の現状に強い危機感を抱いていたからだと考えられる¹²¹。

¹¹⁶ 山本伸一「隨筆 我らの勝利の大道 112 地涌の誉れの『八・二四』」（『聖教新聞』2013年8月24日付3面）を参照。8月24日は、池田が創価学会に入会した日。「山本伸一」は、池田のペンネーム。

¹¹⁷ 『聖教新聞』1952年3月1日付1面参照。

¹¹⁸ 『池田大作全集』第129巻（聖教新聞社、2004年）、247～248頁。

¹¹⁹ 『池田大作全集』第75巻（聖教新聞社、1997年）、42頁。

¹²⁰ 塩原將行「新渡戸稲造と牧口常三郎（上）」（『新渡戸稲造の世界』第34号、新渡戸基金、2025年）、98～99頁参照。

¹²¹ 塩原將行「創価教育学を生み出した牧口常三郎の教育実践〔前編〕」（『灯台』第776号、第三文明社、2025年5月）、71～72頁参照。

3番目の言葉は、1957（昭和32）年9月8日に開催された創価学会第4回東日本青年部体育大会における、戸田が遺訓の第一とした次の発言である。後にこの発言は、「原水爆禁止宣言」と言われるようになり、池田の核兵器廃絶への強い意志の原点になっている。以下、紹介する。

「今、世に騒がれている、核実験、原水爆実験に対する私の態度を、本日ははっきりと声明したいと思うものであります。

いやしくも私の弟子であるならば、わしの今日の声明を継いで、全世界にこの意味を透徹さしてもらいたいと思うのであります。それは核、あるいは原子爆弾の、実験禁止運動が今世界に起こっているが、私はその奥にかくされているところの爪をもぎ取りたいと思う。

それはもし原水爆をいずこの国であろうと、それが勝っても負けても、それを使用したものは、ことごとく死刑にすべきであるということを主張するものであります。なぜかならば、われわれ世界の民衆は、生存の権利を持っております。その権利をおびやかすものは、これ魔ものであり、怪物であります。それをこの人間社会、たとえ一国が原子爆弾を使って勝ったとしても、勝者でもそれを使用したものはことごとく死刑にされねばならんということを、私は主張するものであります。

たとえある国が原子爆弾を用いて、世界を征服しようとも、その民族、それを使用したものは悪魔であり、魔ものであるという思想を、全世界に弘めることこそ、全日本青年男女の使命であると信ずるものであります^{122]}

戸田がこの宣言のなかで、原水爆を使用した者は『ことごとく死刑に』と叫んだのは、決して、彼が死刑制度を肯定していたからではない。池田によれば、「彼〔戸田〕の眼目は、一言すれば、原水爆を使用し、人類の生存の権利を奪うことは、『絶対悪』であると断ずる思想の確立にあった^{123]}」のである。

池田は『新・人間革命』第1巻（聖教新聞社、1998年）の「はじめに」で、次のように記している。「戸田先生は、一九五七年（昭和三十二年）九月八日、あの原水爆禁止宣言を発表され、遺訓の第一として、その思想を全世界に弘めゆくことを、門下の青年に託された。

恩師は、間断なき世界の戦火や、暴政に涙する民衆の声なき声に耳をそばだてながら、しばしばこう語った。

『この地球上から悲惨の二字をなくしたい』

それは先生の願ひであり、ご決意であられた。師弟は不二である。不二なればこそ、私もまた、恩師の心を抱き締めて、世界を駆け巡り、『平和と幸福の大河』を切り開いてきた。『源流』の偉大さを物語るものは、壮大な川の流れにはかならない」（下線引用者）

このように池田の心の中には常に戸田の「原水爆禁止宣言」があり、その実現に向けて行動していたのである。

¹²² 『聖教新聞』1957年9月13日付1面参照。あわせて、2013年に創価学会が制作した映像『恒久平和を目指して 核兵器廃絶への挑戦』を参照。以前から戸田は、たびたび原水爆に言及した発言を行っている（前出、『評伝 戸田城聖』下巻、初版第2刷、388～389頁参照）。

¹²³ 池田大作『人間革命』第12巻（聖教ワイド文庫、2013年）、135～136頁。

5. 自民党大物代議士の「横やり、による会談中止

a. 「横やり、を入れた人物とその時期

ケネディから池田へ会談の申し入れがあったのは、1962（昭和37）年の暮れ¹²⁴である。その後池田は、1963（同38）年1月8日午前10時27分に羽田の東京国際空港を発ち、アメリカを含む11カ国訪問の海外指導を行い、同月27日午後9時6分に東京国際空港に降り立っている¹²⁵。会談中止について池田は、2月1日の男子部幹部会で語っているので、「政権政党の大物といわれている古老の代議士¹²⁶」（『新・人間革命』第7巻）と会ったのはそれ以前、1月28日から31日に絞られる。ただし池田は、1月28日（月）には、午後5時から約1時間、1月度教授会を聖教新聞社別館で行っている。また、『聖教新聞』に帰国の記事が掲載されたのは29日であり、この日彼は、午後5時50分から7時50分まで千駄ヶ谷の東京体育館で行われた本部幹部会に出席している¹²⁷。

ケネディとの会談中止の因となった「自民党の故人となった大物代議士」（浅野秀満『あすの創価学会』、1970年刊、56頁）とは、誰か。まず、浅野が出版した1970年時点で故人となった自民党の大物衆議院議員でなければならない。その条件に当てはまるのは、当時首相の池田勇人（1899～1965年）、大野伴陸（1890～1964年）¹²⁸、河野一郎（1898～1965年）、川島正次郎（1890～1970年）の4人と考えられる。次に、「自由民主党役員一覧 昭和37・8・30現在」によれば、総裁池田勇人、副総裁大野伴陸、幹事長前尾繁三郎。また、選挙対策委員会の委員長が池田、副委員長が大野、河野・川島は委員である¹²⁹。そのため大野は、1963（昭和38）年4月17日の都知事選挙の選対本部長を務めていた¹³⁰。さらに、同一覧で当選回数を見ると、池田勇人6回、大野伴陸12回、川島正次郎11回、河野一郎10回で、党内で大野が最多である。

なお大野は、この時期に池田と会っており、都知事選での支持の有無について、池田に会った際の感触を1963（昭和38）年3月18日に地元岐阜で、次のように語っている。

「東京都知事選は創価学会がカギを握っているといわれているが、同会では今月末か四月早々声明を発表すると言っている。先日池田会長に会ったときの呼吸ではわが党を支持してくれるだ

¹²⁴ 前出の池田大作「随筆 人間世紀の光 61」には、「ケネディ大統領から、私に会いたいと連絡が入ったのは、一九六二年（昭和三十七年）の暮れであった」と記されている。

¹²⁵ 『聖教新聞』1963年1月1日付2面・1月10日付1面・1月29日付1面参照。

¹²⁶ 前出、池田大作『新・人間革命』第7巻（聖教ワイド文庫）、325頁。

¹²⁷ 『聖教新聞』1963年1月31日付1面・2月2日付1面、および、池田大作『会長講演集』第9巻（創価学会、1964年）の39頁を参照。

¹²⁸ 大野伴陸については、『大野伴陸—小伝と追想記—』（大野伴陸先生追想録刊行会、1970年）の年譜を参照。彼は、通算7期副総裁を務めた自民党の実力者。

¹²⁹ 『自由民主』第156号（自由民主党本部、1962年8月30日）、1面参照。

¹³⁰ 『週刊読売』第22巻第8号（読売新聞社、1963年2月24日）、95頁参照。藤原弘達「花の都の巖流島騒動」（『新世代』第1巻第1号、学習研究社、1963年4月1日）には、「〔都知事選挙の〕全体のさい配をふるうのが大野伴陸、これに中村梅吉と安井謙が加わって、必勝態勢を期しているというところである」（64頁）と書かれている。

ろう¹³¹」(下線引用者)。

以上のことから、「政権政党の大物といわれている古老の代議士」は、上記いずれかの人物ではないかと推察される。

ちなみに、公明政治連盟は、1963(昭和38)年4月1日、自民党が推薦する東龍太郎支持を発表した¹³²。ただし、『財界』(財界研究所、1963年6月1日)の「市長選に振られた大阪財界」という記事には、「東京〔都知事選挙〕では、はっきり東氏推せんを明らかにした創価学会も、大阪では態度を決めなかった。大野伴睦老が池田大作会長に、『大阪もはっきり佐藤、和爾推せんをきめてくれ』と頼んだが奏功しなかった」(25頁)と書かれている¹³³。

また、1963(昭和38)年2月22日の佐藤栄作¹³⁴の日記には、次のように書かれている。

「本会議の後公正〔明〕会に原島〔宏治〕幹事長を訪れて、石田〔次男〕九州班長に杉本並に鬼丸君推薦方を依頼する¹³⁵」

このように、この年4月の統一地方選挙では、大阪府や福岡県の知事選挙などにおいても、創価学会が当落に影響すると見られていたのである。

b. 〘横やり、が入った背景

自民党の「大物代議士」は、有力な対立候補が立ったことで苦戦が予想されている東京都知事選挙(1963年4月17日)において、ケネディとの会見を取引材料にして、都内50万人の創価学会員の自民党推薦候補への支持を確実にしたいとの思惑があった¹³⁶。The Japan Times紙では、このことが次のように書かれている。

「実際のところは、池田会長は今月か来月はじめ頃にケネディと会談する予定であったが、政治的理由により頓挫したのだ。情報筋によれば、自民党幹部らはケネディ会談の後押しをする見返りとして、池田から4月の都知事選で東龍太郎への支持確約を取り付けようとした。しかし、この取引の提案は、池田の逆鱗に触れたのだと言う。

池田大作にそのような圧力がかけられるのには、十分すぎるほど理由がある。

東京に会員50万人を擁する創価学会は、保守系の東と、社会党系の元兵庫県知事・阪本勝が争う東京都知事選の勝者を決定するだけの力を手にしているのだ。

¹³¹ 「内閣改造、大幅に／幹事長は七月交代か／大野氏語る」(『読売新聞』東京版1963年3月18日付夕刊1面)。池田は、央忠邦の問いに、会ったことがある政治家として、歴代総理大臣と河野一郎と大野伴睦を挙げている(前出、央忠邦『日本の潮流 創価学会発展の歩み』年、1968年、142頁参照)。また、2025年12月13日に行った秋谷栄之助からの聞き取りによれば、池田は大野と何度か会っていたとのことである。

¹³² 『読売新聞』東京版1963年4月2日付朝刊1面参照。

¹³³ 「佐藤」は、大阪府知事選挙の候補左藤義詮。「和爾」は、大阪市長選挙の候補和爾俊二郎。現職の左藤は、当選。和爾は、落選。

¹³⁴ 佐藤栄作は、1964年11月から72年7月まで、第58代から第60代の総理大臣を務める。

¹³⁵ 『佐藤栄作日記』第二巻(朝日新聞社、1998年)、43頁。「杉本」は、北九州市長選挙の候補、杉本勝次。「鬼丸」は、福岡県知事選挙の候補、鬼丸勝之。ともに、日本社会党推薦候補に敗れ、落選。

¹³⁶ 『政治経済』第16巻第2号(政治経済研究会、1963年2月)、27頁参照。

前回1959年の都知事選で、東は169,157票差で社会党系の有田八郎を破った。東の得票数は1,821,346に対し、有田は1,652,189であった。創価学会員は東に投票したとする確かな根拠がある。

池田は本紙に対し、創価学会員の参議院議員15名から成る政治団体・公政連は、両候補のいずれかを選び、それに追随するよう創価学会員に促すことになるであろうと語った。

『我々は、どちらの候補がより東京都民の福祉のためになるのか、厳正にその判断に基づいて選択をします¹³⁷。両候補およびその支援者から、金銭その他のいかなる形であれ圧力があれば、それはその候補にとってマイナスになるでしょう』と池田は警告した。

池田はまた、どちらかの候補を選んだからといって、必ずしも創価学会がその候補を推している政党を支持するという意味ではない、とも強調した。池田は、今日の日本の政党は派閥争いに明け暮れていて、自分たちを選んでくれる民衆に奉仕する義務を怠っていると語った。

『日本に真の安定をもたらすのが我々の願いです。終戦から17年、諸政党はまったくそれが出来なかった。そのために民衆は苦しんできた。それもすべて、日本人には指針がないことが原因です。他の国々には、考え方や行動の基盤となる偉大な哲学がある。しかし日本人には、そのような基盤がありません』

また池田は、1963(昭和38)年2月1日の創価学会男子部幹部会における講演で、「いろいろ方法もあろうと思いますが、どうしても政治的に複雑になってしまったり、その〔ケネディとの会談の〕機会がとらえられなかった」と語っている。

浅野著『あすの創価学会』(1970年刊)では、次のように書かれている(下線は引用者)。

「あわただしく準備が進むうち、当時の駐日大使であったライシャワーが二人の会見計画を知って驚き、渡米前に会見したいと申しこんできた。会うことになった。

その前夜、自民党の故人となった大物代議士が、池田の前に現れたのである。

『ケネディに会うそうだが、自民党内には異論の声もある。なんとか私が骨を折ろう。そこで、一つだが、力をかしてくれないか』

政治的圧力で会見などどうにでもなるとほのめかしながら、目前に迫っていた東京都知事選の協力を、暗にちらつかせたらしい。

池田は会見計画に、政治の暗い影がさしてきたのを察知すると怒った。

『それでは話が違ってきます。またの機会をまちましよう』

その場で、大物代議士のさそいを断わり、ケネディとの会見をとりやめた。

ライシャワーとの会談も中止した。有力民間人を介して、池田の丁重な断わりのあいさつがケネディ大統領に伝えられた。

池田とケネディ大統領の会見準備は、二人とも一私人としてすすめていたので、池田が旅券申請するまで、外部では知らなかった。

池田の日程に「大統領会見、が組みこまれていることがわかると、間もなく、自民党筋の知る

¹³⁷ 『公明新聞』1963年1月1日付3面には、自民党推薦と社会党推薦の「二人の都知事候補に聞く」を掲載している。

ところとなったという」

c. さまざまな憶測

このようにケネディからの会談の申し入れがあり、ワシントンで会うことも決まっていたにも関わらず実現しなかったことから、さまざまな憶測がささやかれることになった。

雑誌『政界往来』1963年6月号に掲載された、清水貞夫（毎日新聞政治部）・福富達（読売新聞政治部）・山本弁介（NHK政治部）による記者座談会では、「米国布教と交換条件で東支持」との中見出しで、次のように書かれている。

「B 池田大作会長が、政策の面で自民党を叩いていながら、自民党についたということは、アメリカさんの力も大いにあずかったんじゃないか、という話もありますよ。

A ライシャワーが二回あったそうです。池田大作に。

B 池田会長がアメリカに行ったときに、『アメリカでも布教を許しましょう。だから一つ東を応援してやってくれ。自民党を支援してやってくれ』ということ、アメリカのさる高官から交換条件にだされたというんですがね。『それじゃやりましょう』ということで、池田大作が買って出たという話も伝わってる。

C 池田大作が外遊するにあたって、ケネディと会いたいという話を、アメリカ大使館のほうにもって行ってるんですよ。自民党のある筋を通して。

それも池田は、ケネディに会うとともに、ソビエトのほうも回って、フルシチョフとも会いたいという、両またをかけていたわけです。

ところがアメリカの圧力があって、ケネディと会うことをやめ、フルシチョフに会うこともやめた。これは事実です¹³⁸」

また、『週刊読売』1963年2月17日号（2月7日発売）において、高瀬広居は次のように述べている。

「ケネディー池田会談。これはすでに早くから下交渉が進められ、アメリカの大使館も積極的に動いていたという。では、政治的妨害、とはなんだろう。右翼の工作とも消息筋はいう。だが、はたしてそうだろうか。政界某実力者が中に立ち、池田首相が会長との会見を申し入れ、池田会長がこれを断わったという情報がある。

とすると、これは私の推測だが、そこには都知事選五十万票をめぐる「取り引き」があったのではあるまいか。それが、あまりにも露骨だったため、池田会長はケネディ会談を不調に終わらせたのではないか。私はそう考える。

〔早稲田〕記念会堂を出るとき、政治部の参謀に『会長は、はっきりとケネディのことをいい

¹³⁸ 「記者座談会 地方選挙のツメ跡診断書」（『政界往来』第29巻第6号、政界往来社、1963年6月）、142頁。

ましたね』と声をかけると、彼は笑いながら『学会には、取り引きは成り立たないんですよ』と白い歯を見せていた¹³⁹⁾

さらに、央忠邦も『日本の潮流 創価学会発展の歩み』(1968年刊)において、次のように書いている。「いまは亡き、ケネディ大統領と会見するという話が、ある時あったのも事実である。それが実現しなかったことも事実である。何故、そうなったのか。『紹介に当たった人物が、そのことを実現させることによって利用しようとする下心(したごころ)があると感じたからです。こちらで手を引いたのです』と、その当時、私はある幹部からそんな話を聞いたことがある¹⁴⁰⁾

6. 会談中止後の実現可能性

a. 完全中止ではなかった会談

The Japan Times 紙(1963年2月16日付)に掲載された次の池田の発言は、ケネディとの会談が後日実現する見込みだったことを示している。

He declined to say when he would go to Washington, but indicated that it would be in the not too distant future.

池田は、ワシントン行きがいつになるか明言は避けたが、そう遠くない未来になるだろうと示唆した。

池田が1963(昭和38)年2月1日の創価学会男子部幹部会で話した内容は、『聖教新聞』では次のようなまわりくどい表現になっている。

「いろいろ方法もあると思いますが、どうしても政治的に複雑になってしまったり、その機会がとらえられなかった。今回も、ときには、まず、ケネディ大統領、ラスク〔国務〕長官にも、その主張がいえるような機会のルートができたのでありますけれども、日本の為政者が、なんとなくじゃましたり、おせっかいかけて、ひじょうに、そういうものに迎合するのは私はいやであります。今回は見送ろうと思っておりますけれども¹⁴¹⁾

しかし、同幹部会に臨席した高瀬広居は、次のように記している。

「男子部幹部会の最後に演壇に進み出た池田大作会長は『世界連邦への道は、学会の地球民族主義であり、その平和実現のために原水爆禁止に学会は実力行動をとる。原水爆を使用する国の責任者は死刑にせよ』と叫び、この訴えを、世界の大国の指導者にしたいと思う、と前置きして『実は、ある人を通してケネディとの会見をあっせんしようという話があったが、いろいろ政

¹³⁹⁾ 前出、高瀬広居「都知事選五十万のカギをにぎる創価学会」、17頁。

¹⁴⁰⁾ 前出、央忠邦『日本の潮流』、143～144頁。なお、央は、創価学会に関する次著『池田大作論』(大光社、1969年)では、ケネディとの会談について触れていない。

¹⁴¹⁾ 『聖教新聞』1963年2月5日付1面。

治的妨害があって、私は今回は見送った。しかし、このつぎは率直に語り合うつもりだ』

と述べている¹⁴²」（下線引用者）

「〔その後〕有力民間人を介して、池田の丁寧な断わりのあいさつがケネディ大統領に伝えられ¹⁴³」、池田としては次の機会を待つことにした。実は、ケネディは1964（昭和39）年2月に訪日を考えており、二人はワシントンではなく東京で会う可能性もあったのである。しかし、ケネディが凶弾に倒れたことで実現に至らなかった。

池田は、突然の死去を悼み、弔電をジャクリーン夫人とアメリカ総支部の学会員一同あてに送っている¹⁴⁴。

ケネディの国葬が終わってジャクリーン夫人から謝電がきた時、池田は『本当に会って話したい人だった』とポツリ、側近の幹部にもらしたという¹⁴⁵。

また池田は、浅野に対して、次のように語っている。

「仏法の絶対平和主義を話したら、ケネディならわかるでしょう¹⁴⁶」

池田としては、ケネディとの会談は、あくまで延期であり、機会をとらえてぜひとも話しあいたいと考えていたのである。*The Japan Times* 紙のインタビュー記事からは、改めてそのことが読み取れる。

池田は、1993（平成5）年11月21日に開催された創価学会の中部祝賀大総会において、「私が会長に就任した少しあと、大統領が『お会いしたい』とのことであると、大統領の関係者から連絡があった。準備を進めていたのだが、さまざまな状況があり、お会いできないでいるうちに、大統領は凶弾に倒れた¹⁴⁷」（下線引用者）と語っている。

また、ケネディのもとでインド大使を務めたJ・K・ガルブレイスとの1990（平成2）年10月5日の対談でも、次のように語っている。

「私も実は、ケネディ大統領から連絡があり、お会いする予定になっていました。準備も進んでいましたが、結局、大統領が凶弾に倒れられ（一九六三年十一月）、実現しませんでした。三十年近く前になりますが、今なお残念な思いが胸にあります¹⁴⁸」（下線引用者）

このように、ケネディからの会談の要請が私的なものであったにもかかわらず¹⁴⁹、それがあったからか、創価学会に関する情報がケネディのもとに寄せられるようになった。CIAは、1963（昭

¹⁴² 前出、高瀬広居「都知事選五十万のカギをにぎる創価学会」、17頁。

¹⁴³ 前出、浅野秀満『あすの創価学会』、57頁。

¹⁴⁴ 前出の浅野秀満『あすの創価学会』の57～59頁、および、『聖教新聞』1963年12月10日付8面・11月26日付1面を参照。

¹⁴⁵ 前出、浅野秀満『あすの創価学会』、58頁参照。

¹⁴⁶ 同前、58頁。

¹⁴⁷ 『聖教新聞』1993年11月23日付4面。

¹⁴⁸ 『聖教新聞』1990年10月7日付2面。

¹⁴⁹ 前出の浅野秀満『あすの創価学会』では、「ケネディ大統領が両国政府に関係なく、貴下と個人的な資格で会見をもちたい、と希望されている」（55頁）と記されている。

和38)年8月2日付で創価学会についてレポートを作成し、ケネディのもとに提出している¹⁵⁰。また、全米で740万部発行されているフォト・ジャーナル誌 *LOOK* 1963年9月10日号の日本特集(15～40頁)では、その大半を創価学会のことに割いている。

b. ケネディ家の末弟エドワード上院議員と池田の会談

日本とケネディ家との交流の要であったロバート・ケネディが、1968(昭和43)年6月6日に凶弾に斃れた。それから10年。末弟のエドワード・ケネディ上院議員が1978(昭和53)年1月の中国訪問の帰途、京都を経て、広島医師会館での講演や原爆資料館の見学などを行い¹⁵¹、11日夜に上京。12日に聖教新聞社で池田と会談している¹⁵²。池田は、「忘れ得ぬ出会い22」の中で、この時のことを次のように記している¹⁵³。

「訪中を終えたばかりの氏からは、興味深い中国事情や米中関係、日中関係をめぐる意見を聴くことができました。また、核軍縮と南北問題についても意見を交換した。私は核兵器廃絶に向かって全生命を賭しても奔走しゆくことが氏の使命であろう、と申し述べた。氏は大きくうなずいて、核絶滅は人類共同の目的として取り組むべきだ、と賛同してくれた」

また、ホフライイトネルとの対談で池田は、次のように語っている。

弟のエドワード・ケネディ上院議員とは、一九七八年一月に東京でお会いしました。

冷戦がまだ続いていた最中の会見でした。私は申し上げました。「大事なものは人間的価値観です。国際社会に多くの課題があることは当然です。しかし、ソ連も人間です。中国も人間です。『人類は、一つの共同体である』との国際世論を高めていくべきです」と。

上院議員は、答えられました。「私は思います。人々が互いに理解し合うには『まず自分が人間的行動を起こす』ことです」「回帰すべきところは『人間』です。『人間に帰れ』です」と¹⁵⁴

この会談を報じた『読売新聞』東京版は、「〔ケネディ上院議員は〕池田大作会長と約五十分、会談した。この会談では、特に日中、米中関係について活発な意見の交換が行われ、池田会長が『核廃絶こそ人類の課題』と強調、これに対しケネディ議員も『全人類の共同目的で遂行して行かなくてはならない』と述べ、核軍縮に向けて努力することで一致した。また、南北問題について

¹⁵⁰ SPECIAL REPORT OFFICE OF CURRENT INTELLIGENCE として、BUDDHIST MILITANTS IN JAPANESE POLITICS のタイトルで作成された。ジョン・F・ケネディ大統領記念図書館博物館所蔵。

¹⁵¹ エドワード上院議員の広島訪問には、故ケネディ大統領の長女キャロライン(当時、ハーバード大学に在学中)も同行していた。後に、オバマ政権の駐日大使になったキャロラインは、オバマ大統領の広島訪問に尽力している(『中国新聞』1978年1月12日付朝刊2・14面、および、『読売新聞』東京版2017年1月18日付朝刊11面を参照)。

¹⁵² 『聖教新聞』1978年1月13日付1面・14日付2面参照。

¹⁵³ 『サンデー毎日』第37巻第37号(毎日新聞社、1978年12月31日)、48頁。

¹⁵⁴ リカルド・ディエス=ホフライイトネル/池田大作『見つめあう 西と東—人間革命と地球革命』(第三文明社、2005年)、148頁。

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作—実現に至らなかった会談をめぐって—

も、同議員が『豊かな国が貧しい国に果たすべき責任』について強調したのに対し、池田会長も宗教者の立場から『今後、生涯にわたって、あらゆる努力を積み重ねて行きたい』と決意を述べた¹⁵⁵』と報じている。

c. フルシチョフ首相との会談への意欲

それでは、フルシチョフとの会談についてはどうだったのか。

The Japan Times 紙（1963年2月16日付）の池田へのインタビュー記事には、次のように書かれている。

Ikeda told *The Japan Times* in an interview Thursday that he wanted to meet Kennedy because the President is one of the two “responsible leaders of the world today.” The other is Premier Nikita Khrushchev of the Soviet Union, whom Ikeda also hopes to meet.

池田は、2月14日、本紙とのインタビューで、ケネディ大統領との会談を望むのは“今日の世界において責任ある指導者”二人のうちの一入であるからだと言った。もう一人は、ソ連のニキータ・フルシチョフ首相で、そちらとも会談を望むと述べた。

記事の見出しには、“Group’s Leader Eyes K’chev Parley Too”（「フルシチョフとの会談も視野に」）と書かれているが、それはケネディからと同様に、先方から申し入れがあれば会いたいとのメッセージではないだろうか。

ちなみに、高瀬広居『第三文明の宗教 創価学会がめざすもの』の「エピローグ」には、次のように書かれている。

「昭和三七一年一一月の寒い日、創価学会聖教新聞の一室で、青年参謀がアラブ連合の代表者と語りあっていた。その一週間前には、イスラエルの学者が来た。アメリカ大使館、ソビエト大使館と、学会へはいつも外交官がくる。一体何のためにくるのだろう。（中略）学会はいま、池田会長中心に、北条浩副理事長、秋谷城永〔栄之助〕青年部長を両脚に、青年参謀、理事の集団指導で動いている。この指導者層に共通していえることは、学会青年首脳部が『政治はソビエトにある』とみていることだ。ことにフルシチョフが、キューバ問題でみせた外交手腕を高く評価し、そこから学びとろうとしている¹⁵⁶」（下線引用者）

また高瀬は、次のようにも書いている。

「池田大作氏にむけられている世界の眼は、もちろんアメリカだけではない。むしろソビエトの方が早いし熱心だ。私は、某日、ソビエトの通商代表部の人から、学会のもつ信仰内容・組織・とくに池田会長のめざす『新社会主義社会の構想』やそのリーダーシップ・権威性について執拗な質問をうけた。原水爆禁止を訴えるなら、現在の革新系団体との共同戦線結成の可能性が

¹⁵⁵ 『読売新聞』東京版1978年1月13日付朝刊2面。

¹⁵⁶ 前出、高瀬広居『第三文明の宗教 創価学会がめざすもの』、288～289頁。

かどうか、ともたずねられた。そして、私が、創価学会が単純な個人救済を主眼とした信者集団ではなく、思想団体であり、変革を志向する実践的集団であることを説明すると、彼らはしばらく暗然とし、腕を拱いて沈思していた¹⁵⁷」（下線引用者）

ちなみに、1963（昭和38）年9月25日、創価学会青年部長秋谷城永ほか青年部幹部2人が、ソ連の『今日のアジア・アフリカ』編集局の招きでソ連国民の生活視察に出発、モスクワ・レニングラード・キエフ（キーウ）・トビリシを訪問している¹⁵⁸。そして、視察者の一人である渡部城克（一郎）の「ソ連の印象記」が『公明新聞』同年10月22日付7面に掲載されている。創価学会とソ連との交流の第一歩が記された。

7. 池田にとってケネディは「心の盟友、

a. 「平和的人間革命、を目指したケネディ

ケネディ政権で大統領特別顧問を務めた、シオドア・C・ソレンセンは、『ケネディの遺産 未来を拓くために』（1970年刊）において次のように述べている。

「『ケネディの遺産』の本質が前進する平和革命の哲学として偉大な重要性を持つのは、こういった政治的枠組み〔参加する民主主義。〕においてである。二人の特異な人間〔ケネディ兄弟〕とその部下たちの生活、発言、行動を通じて、それはほとんどの場合偶然にそして時には一貫性に欠けるような形で発展したのだが、私の見るところでは最終的に統一された原理の体系になったと思われる。

（中略）

ケネディ兄弟の生涯を通じて示され残された先例と原理、二人が理性と和解と平和革命にかけた期待、われわれの子孫の将来に対する強い関心、平和と自由への信仰——これらすべてが今日の必要に対して適用されなければ、『ケネディの遺産』が意味するところは非常に少なくなってしまう。

（中略）

私が『ケネディの遺産』と呼んだアプローチだけが、現代の平和的人間革命の達成に必要な原理と重点を明示できるものである。それは二人のケネディだけがその遺産を形成したからではなく、二人の生涯と哲学がその遺産を最も集中的に具現したからである¹⁵⁹」（下線引用者）

さらにソレンセンは、同書の日本語版に寄せた「ケネディ兄弟と日本の針路」において、次の

¹⁵⁷ 前出、高瀬広居「戦後異色人物探検 33 創価学会会長池田大作」、74頁。

¹⁵⁸ 『聖教新聞』1963年9月12日付1面・9月28日付1面、および、*The Seikyo News* 紙1963年9月16日付1面・9月30日付1面・10月14日付1面・10月21日付1面を参照。2025年12月13日に行った秋谷栄之助からの聞き取りによれば、この話はイズベスチャ紙の東京支局長から持ち込まれたもので、当時「鉄のカーテン」で、うかがいがい知れなかったソ連国内の様子をつぶさに視察することができた。ただし、その後のソ連との交流には、つながらなかったとのことである。

¹⁵⁹ 前出、シオドア・C・ソレンセン『ケネディの遺産』、290～291頁。ソレンセンの原文では、“sets forth the priorities and principles needed to achieve a peaceful human revolution in our time”と記されている。

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作—実現に至らなかった会談をめぐって—

ように記している。

「ジョン・ケネディとロバート・ケネディの『遺産』」は、日本国民の皆さんにとって、特別の意味を持つものであると、私は信じています。両ケネディが世界と米国内の諸問題に取り組んだ姿勢——暴力と悪罵の代わりに理性と和解を強調するアプローチ——は、貴国においてとりわけ尊重される理由があるのであります。

ケネディ兄弟は、生前、平和と繁栄と進歩を体現する世界共同体の建設にあたって、日本が重要な指導的役割を演ずる国であることを、明確に認識していました。私は本書がこの目的達成に、何らかの貢献を果たしうることを、念願してやみません。

(一九七〇年二月)¹⁶⁰ (下線引用者)

ケネディには、日本に対する深い理解とともに、平和な地球社会建設に日本が指導的役割を担うことへの強い期待があったのである。それはまさに、出会うことが叶わなかった池田と響き合うものであった。

後年池田は、『新・人間革命』第8巻の「激流の章」において、ケネディの死を次のように書き綴っている。

「彼〔池田〕は、〔公民権法案など〕ケネディに共感するところが多かった。もし、ケネディの立場にいたならば、多くの面で、同じことをしていただろうと思えた。

彼には、ケネディの死が盟友の死のように感じられてならなかった。語るべき相手を、ともに世界を担うべき人を亡くした無念さが、今、ひたひたと伸一〔池田〕を包んでいた。

伸一は、心の盟友として、自分は何をもって、ケネディの死に応えるべきかを考えた。答えは明白であった。ケネディの理想を受け継ぎ、この地上から、人間への差別をなくすことだ。この世界に、永遠の平和を築き上げることだ¹⁶¹ (下線引用者)

b. 池田への寄稿要請の増加

1963 (昭和 38) 年に池田とケネディとの会談は実現することはなかった。しかし、ケネディが会談を申し入れた人物ということもあったからか、この年から池田に雑誌や新聞への寄稿を求められることが増えている。1952 (同 37) 年 7 月に公政連が参議院の第三勢力となったことで、彼の存在感が増してきたのである。

その端緒といえるものが、『中央公論』1963 年 5 月号に掲載された「宗教と政治理念」である。同誌の目次には、「焦点に立つ創価学会会長が初めて筆をとって所信を世に問う」と書かれている。

池田は、この寄稿の最後を次のように結んでいる。

「どうか、公政連¹⁶²の、今後十年、二十年の活動を見守っていただきたい。私も選挙民の一人として、公政連を見守るとともに、公政連の議員はもちろん、すべての議員の墮落等に対して

¹⁶⁰ 同前、1 頁。

¹⁶¹ 池田大作『新・人間革命』第8巻 (聖教ワイド文庫、2004 年)、302 頁。

¹⁶² 1964 年 11 月に公明党が結成される。

は、嚴重に監視し、いましめてゆく決心である。

私たちは、あくまでも日本の安泰のみを願っている。そして世界の平和実現を心から願っている。日本が安泰となり、世界平和に寄与しうるりっぱな国になったならば、創価学会は解散してもよいとも考えている¹⁶³」(下線引用者)

次に、核兵器廃絶に対する池田の考えを端的に示すものとして、『週刊朝日』1967(昭和42)年8月11日号の特集「私の中のヒロシマ 日本を動かす各界70人の原爆意識」(下線引用者)に掲載された質問と池田の回答を紹介しておきたい¹⁶⁴。

質問は、次のとおりである。

- ① 将来地球上のどこかで「第二のヒロシマ」が起る可能性はありますか。あるとすれば、どこでしょうか。
- ② 「第二のヒロシマ」を防止するのに日本がとりうる有効な方法がありましたら、提案してください。
- ③ 原爆について小説、詩、手記、映画、演劇などが数多く発表されています。その中で感銘をうけたものがありましたら、一つだけ挙げてください。

それに対する池田の答えは明快である。

- ① 可能性はあるが、断じておこさせてはならない。
- ② 現在、世界平和は「力の均衡」によって保たれている。だが力による抑止は、あくまで相対的なもので「第二のヒロシマ」を完全に防止することはできない。理性に訴え、人間性に基づく「絶対平和主義」の思想を浸透せしめる以外に方法はないと思う。
- ③ 井伏鱒二『黒い雨』

c. 識者との対話と平和提言の開始

池田は、戸田の遺訓である「原水爆禁止宣言」から11年後の1968(昭和43)年9月8日に「日中国交正常化」を提言。さらに、6年後の74(同49)年5月に初訪中し、9月8日にはソ連(現在のロシア)を初訪問。12月には再度中国を訪れ、対立関係にあった両国の和解へ向けた民間外交を行っている。

かつて戸田は、次のように語ったという。

「戦争をなくすためには、社会の制度や国家の体制を変えるだけではだめだ。根本の『人間』を変えるしかない。民衆が強くなるしかない。民衆が賢くなるしかない。

そして、世界中の民衆が、心と心を結び合わせていく以外にない!¹⁶⁵」

池田は戸田の思いを受け継いで、生涯に54カ国・地域を訪問し、記録に残っているだけでも

¹⁶³ 『中央公論』第78年第5号(中央公論社、1963年5月)、309頁。

¹⁶⁴ 『週刊朝日』第72巻第34号(朝日新聞社、1967年8月11日)、22頁。

¹⁶⁵ ジョセフ・ロートブラット/池田大作『地球平和への探求』(潮出版社、2006年)、「はじめに」の18～19頁参照。

国内外の識者 7000 人以上と語り合っている¹⁶⁶。

各国の識者と膝詰めの対話を重ねてきた池田は、1972（昭和 47）年以降、数多くの対談集・鼎談集を発表している。トインビー、キッシンジャー、ガルブレイス、カズンズ、ポーリング、ロートブラットなど、主なものだけでも 93 冊（28 カ国 87 人）を数えることができる。その中では、ケネディも目指していた平和な地球社会実現のための率直な対話が交わされている（資料 8）¹⁶⁷。また池田は、1983（昭和 58）年以降 2022（令和 4）年まで、Soka Gakkai International（S G I）会長として、S G I 結成の日である 1 月 26 日に、毎年平和提言を発表している¹⁶⁸。

おわりに

本稿においては、「はじめに」で提示した 6 つの疑問に対して、*The Japan Times* 紙（1963 年 2 月 16 日付）のインタビュー記事などによって、以下の考察を行うことができた。

① ケネディは、なぜ池田との会談を希望したのか。そして、どのようなことを池田と語り合いたいと考えたのか。

1962（昭和 37）年 10 月のキューバ・核ミサイル危機を回避した後、ケネディが最も苦慮していたのは、核兵器保有の懸念が高まっていた中国への対応だった。そのためにも、日本との良好な関係構築が望まれた。そのような中、同年 7 月に行われた参議院議員選挙の結果、創価学会が推薦する公明政治連盟が参議院の第三会派になり、今後さらに飛躍する可能性を秘めていた。創価学会の若き会長池田大作は、恩師である戸田城聖の遺命である核兵器廃絶と地球民族主義を強く主張していた。核不拡散と核実験禁止条約の締結に向けて強い意志を持っていたケネディは、そのような池田と一人の私人として会うことにしたのではないか。

② 池田の存在を誰がケネディに伝え、ケネディの会談希望の意向を誰が池田に伝えたか。

誰がケネディに池田との会談を勧めたかは明らかではない。ただ、渡部一郎からの聞き取りにあるように、平和部隊に参加したアメリカの青年部員の可能性は考えられる。次に、ケネディからの会談申し入れを伝えた人物について、池田は名前を明かしていない。ただ、ケネディが一人の私人としてこのようなことを依頼できるのは、日本の民間人では、細野軍治が最も有力である。

¹⁶⁶ 池田大作「随筆 人間世紀の光 192」（『聖教新聞』2009 年 6 月 28 日付 2 面）参照。国外の主な知識人の会見者と会見年月は、前出の『池田大作 世界との対話』の 280～318 頁を参照。

¹⁶⁷ そのほかに、章ごとに対談者が入れ替わる対談集、池田からの聞き取りを主とするもの、創価学会の教学に関するものなどもあるが、資料 8 では割愛した。

¹⁶⁸ 1983 年から 2008 年までの平和提言の骨子は、東洋哲学研究所編『世界市民池田大作 識者が語る平和行動と哲学』（第三文明社、2008 年）の 312～317 頁に掲載されている。

③ ケネディに会った際、池田は何を語ろうと考えていたのか。

池田は、核実験の停止と「地球民族主義」の思想、さらには、米ソ首脳会談の早期再開および原水爆や戦争の問題などを忌憚なく語り合える「世界首脳会議」の開催を提案したかったと述べている。

後年池田は、「ケネディ大統領も、東西の冷戦下にあつて、新しき対話の道を切り開こうと、命を賭して挑戦されていた。会話が実現すれば、いかなる語らいが広がったことか¹⁶⁹」「もしも、ケネディと会っていれば、世界の平和や人類の未来のことなどについて、どんなに有意義な語らいができたかと思うと、残念でしかたがなかった¹⁷⁰」と記している。戸田城聖から託された「地球民族主義」と核兵器廃絶を実現したいと考える池田との会談は、ケネディにとっても自らの信念を補強する実りあるものになったであろう。

④ *The Japan Times* 紙に書かれている『政治的理由により頓挫』とは、どのようなことだったのか。

自民党の大物代議士が、ケネディとの会談を認める代わりに、政治的取引を求めたことで、1963(昭和38)年2月か3月始めに予定されていた会談の中止を池田が決断したことを意味する。

⑤ *The Japan Times* 紙の見出しに「JFKとの会談を予定」とあるが、会談中止後も実現の可能性はあったのか。

1963(昭和38)年2月頃に予定されていたケネディとの会談については実現することはできなかったが、池田は次の機会を待っていたことが、*The Japan Times* 紙(1963年2月16日付)のインタビュー記事や、彼の発言から読み取れる。

⑥ *The Japan Times* 紙の見出しにある「フルシチョフとの会談も視野に」の意味することは。

ソ連のフルシチョフ首相から同様の申し出があれば、ぜひとも語り合いたいということであり、すでに具体的な話があったということではない。

¹⁶⁹ 池田大作「随筆 人間世紀の光 124」(『聖教新聞』2007年2月21日付3面)。

¹⁷⁰ 池田大作『新・人間革命』第8巻(聖教ワイド文庫、2004年)、290～291頁。

キューバ・核ミサイル危機後、米ソが融和の兆しを見せる中で、ケネディにとって大きな外交課題は、国連に加盟していない中国といかに向き合うかということであった。当時アメリカは、共産主義の拡大を阻止するために、中国封じ込め政策を取っていた¹⁷¹。しかし池田は、ケネディ死去から1年後の公明党結成大会（1964年11月17日）前に、党の外交政策の骨格として「中華人民共和国を正式承認し、日本は中国との国交回復に努めるべきである」と提案している。これは、公明党結成にあたり創立者である彼からの唯一の提案であった¹⁷²。

その後池田は、1968（昭和43）年9月8日に開催された創価学会第11回学生会総会で、「日中国交正常化提言」を発表¹⁷³。西園寺一晃は、池田がこの提言を発表した当時の背景を振り返りながら、次のように述べている。

「池田名誉会長が日中国交正常化を提言された当時（一九六八年）は〔日中間の関係が〕非常に険悪でした。『中国と付き合う』というだけで白眼視されていました。そういう時代に、堂々と『日中友好』を訴えるということは、大変なことでした。時代状況からいって、本当に『命懸けの戦い』であったはず¹⁷⁴」

しかし、時流は日中平和友好条約の締結へと向かっていった。日中国交正常化は、ケネディからの会談申し入れがあった頃には、すでに池田の中にあつた考えかもしれない。戸田が掲げた「地球民族主義」からすれば当然行き着くことだからである¹⁷⁵。その後池田は、中国・ソ連を相次いで訪問し、両国首脳との対話によって中ソ融和に向けた「民間外交」を行った。まさに、ケネディがやり残した「むつかしい宿題」¹⁷⁶に取り組んだといえよう。池田は、恩師である戸田から常々「世界中に大きく平和を作る人生であれ」と教えられてきたという¹⁷⁷。まさにその通りの人生を歩んだのである。

池田は、平和な地球社会実現への確かなロールモデルを私たちに示した。「創価」に対する信頼という財産を残した。彼は、1971（昭和46）年4月の創価大学開学にあたって、建学の精神

¹⁷¹ 1949年10月に中華人民共和国が成立したが、アメリカとは国交がない状態が続き、72年に関係が改善されたものの、正式に国交が樹立されたのは79年である。1960年6月の朝鮮戦争以降、アメリカは台湾の中華民国政府をもって中国を代表する正統政府として支持・援助し、中華人民共和国に対しては、国家としての承認を拒み、軍事的・経済的に封じ込める政策を継続していた。しかし、ケネディ政権の時代になって、もはや中華人民共和国を無視しては国際関係を考えることができないとの認識が行政部からも出されたこともあり、ケネディは1963年11月10日の記者会見において「中共の態度いかんでは中国政策を変える用意がある」と発言している。このことについては、山際晃『米中関係の歴史的展開 一九四一年～一九七九年』（研文出版、1997年）、3・13・46～47頁、『読売新聞』東京版1963年11月15日付朝刊3面、『朝日新聞』東京本社版同日付夕刊1面、などを参照。

¹⁷² 前出、『増訂版 公明党50年の歩み』、36頁参照。池田は、『現代の眼』第5巻第9号（現代評論社、1964年9月）の丸山邦男「池田会長への六つの質問」でも同様の発言をしている（80頁参照）。

¹⁷³ 提言の骨子は、『朝日新聞』東京本社版1968年6月8日付朝刊1・2面で紹介されている。総会前日までは、プレス・リリースされていた。

¹⁷⁴ 『聖教新聞』1997年5月17日付3面。

¹⁷⁵ 『聖教新聞』1968年9月10日付5面参照。

¹⁷⁶ 前出、『侯野健輔の回想』、359頁。

¹⁷⁷ ドジョーギーン・ツェデブ・池田大作『友情の大草原—モンゴルと日本の語らい』（潮出版社、2007年）、70頁参照。

のひとつとして「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」を掲げ、多くの青年が続くことへの大きな期待を表明している。

本稿は、あくまで途中経過の報告である。今後新たな資料が発見され、ジョン・F・ケネディと池田大作についての研究が進展することを心より期待してやまない。

資料1 *The Japan Times*紙1963年2月16日付のインタビュー記事(英文および和訳)

<原文>

Group's Leader Eyes K'chev Parley Too

Soka Gakkai Plans JFK Meeting

By GYO HANI

Daisaku Ikeda, 35-year-old head of the ever-growing religious body Soka Gakkai, is planning to meet President John F. Kennedy before long as the representative of "one million youths of Japan."

Ikeda told *The Japan Times* in an interview Thursday that he wanted to meet Kennedy because the President is one of the two "responsible leaders of the world today." The other is Premier Nikita Khrushchev of the Soviet Union, whom Ikeda also hopes to meet.

"Our organization now has one million youths. This means that we have Japan's future in our hands."

"Representing these one million young men and women, I would like to meet President Kennedy and ask him to stop testing nuclear weapons."

Opposition to nuclear weapons tests is nothing new. But when it comes from the sharp-eyed, stocky Ikeda, it becomes more than a harmless, hackneyed slogan for he is the leader of more than six million devout followers of Nichiren Shoshu Buddhism, a religious-political group that is rapidly growing into Japan's third political power.

Furthermore, the Soka Gakkai is expanding abroad. Ikeda is just back from his fifth world preaching tour during which he visited the United States and 10 countries in Europe and Southeast Asia together with his eight top aides.

Ikeda said that the purpose of his world tour was to give "encouragement and correct guidance" to overseas members—about 3,700 households in the U.S., a few hundred families in Europe and several thousand households in Southeast Asia, most of whom are of Japanese extraction. He denied any ambition of making Nichiren Shoshu a world religion. He noted, however, that the existing great religions of the world, including Christianity, have become stalemated, and that the time was now ripe for the propagation of the gospel of St. Nichiren, 13th century Buddhist saint.

"The second purpose of my meeting with President Kennedy is to tell him that the solution for ending present world tensions is inherent in the gospel of St. Nichiren," Ikeda said. He termed it "global racialism."

"Although I am not at all sure whether President Kennedy will listen to me on this point," he added with a smile.

He declined to say when he would go to Washington, but indicated that it would be in the not too distant future.

Actually, it was planned that the Soka Gakkai leader would meet Kennedy sometime this month or early next month, but because of political reasons the plans fell through. According to informed sources. Liberal-Democratic Party leaders tried to secure Ikeda's commitment to support Ryotaro Azuma in the April election for Tokyo governor in exchange for backing Ikeda's meeting with Kennedy. However, the proposed deal reportedly angered the Soka Gakkai leader.

There is every reason for such pressure being brought to bear on Daisaku Ikeda.

Soka Gakkai, with its 500,000 Tokyo members, has the power in its hands to decide the winner of the Tokyo gubernatorial race, being fought between Tory-backed Azuma and Socialist-supported Masaru Sakamoto, former governor of Hyogo Prefecture.

At the last election in 1959, Azuma beat his Socialist-backed opponent Hachiro Arima by a margin of 169,157. Azuma had 1,821,346 votes and Arima had 1,652,189. There were strong reasons to believe that Soka Gakkai members voted for Azuma.

Ikeda told The Japan Times that Koseiren, the political body composed of 15 House of Councillors members from Soka Gakkai, will pick one of the two candidates and urge Soka Gakkai members to follow that choice.

"We will make the choice strictly on the basis of our judgment as to which of the two men will better serve the welfare of the people of Tokyo. Money or any other form of pressure from the candidate or his supporters will work against the candidate," he warned.

Ikeda also emphasized that choosing one of the two does not necessarily mean that Soka Gakkai is throwing its support to the political party which is backing the candidate. He said Japanese political parties today are riddled with factional strife and are neglecting their duty of serving the people by whom they are elected.

"Our hope is to provide true stability for Japan. For the past 17 years since the end of the war, political parties have been completely unable to do this. As a result, the people have suffered. All this derives from the fact that the Japanese have no guiding concepts. Other countries of the world have some great sustaining philosophy that serves as the foundation of their thinking and behavior, but the Japanese lack such a fundamental base"

"The gospel of St. Nichiren fills this vacuum. That is why we have such a great number of youths in our organization."

He said it was no exaggeration to claim a membership of one million youths—men and women between the ages of 12 and 30.

"If this is a lie—it won't live long without betraying itself. The claim on our

membership is tested at each election by the number of votes we collect.”

Through the militant face-to-face crusading method known as “shakubuku,” the religious group’s membership grew from several thousand in 1951—the year the body aggressively expanded under its second president Josei Toda—to about a million in 1956. Today, it includes more than six million members.

This year Soka Gakkai has set its goal for expansion at 400,000 new households. Except for last year, this increase is actually below the annual average of 500,000 new households. According to Ikeda, this limit has been set in order to deepen the understanding of St. Nichiren’s gospel among the present members.

Soka Gakkai now has 15 representatives in the House of Councillors, but none in the House of Representatives. Asked if it would be more effective to send men into the Lower House to further Soka Gakkai’s political goal, Ikeda said:

“I am not considering it at present. But I can’t speak about the future because the need may arise and the people may desire to have our men elected to the Lower House in the days to come.”

<日本語訳>

創価学会はJFKとの会談を予定

会長、フルシチョフとの会談も視野に

羽仁翹記者

拡大を続ける宗教団体・創価学会の35歳の会長池田大作は、近いうちに「日本の青年100万人」の代表としてジョン・F・ケネディ大統領との会談を予定している。

池田は、2月14日、本紙とのインタビューで、ケネディ大統領との会談を望むのは、“今日の世界において責任ある指導者”二人のうちの一入であるからだと言った。もう一人は、ソ連のニキータ・フルシチョフ首相で、そちらとも会談を望むと述べた。

「我々の組織には現在100万の青年がいます。これは日本の未来は我々の掌中にあるということです」

「私は、この100万の男女青年を代表してケネディ大統領とお会いし、核実験をやめるよう伝えたい」

核実験への反対自体は目新しくもない。しかし、眼光鋭くがっしりとした池田がそういう場合、人畜無害で陳腐なスローガン以上の意味を帯びてくる。彼は、日蓮正宗の熱心な信者600万人を率いる指導者で、その宗教政治団体は日本の第三の政治勢力へと急速に発展しているからだ。

さらには、創価学会は海外でも拡大している。池田は5回目となる海外布教の旅から帰国したばかりだ。今回はアメリカと、欧州・東南アジア合わせて10カ国を、8名の側近と共に歴訪した。

池田は、海外訪問の目的を「激励と正しい指導、を海外の会員に与えるためとした。アメリカには約3,700世帯、欧州に200～300世帯、東南アジアに数千世帯の会員がおり、ほとんどが日系だという。池田は、日蓮正宗を世界宗教にする野望はないと否定した。しかし、キリスト教を含む世界の偉大な諸宗教は行き詰まっており、13世紀の仏教僧である日蓮大聖人の教えを広める時が熟したと語った。

「ケネディ大統領と会談する第二の目的は、今日の国際的緊張を解消する方途は、日蓮大聖人の教えに内在していることを伝えるためです」

池田はこれを「地球民族主義」と言った。

「ただし、その点に関してはケネディ大統領が耳を傾けてくれるかは分かりませんよ」と池田は笑顔で付け加えた。

池田は、ワシントン行きがいつになるか明言は避けたが、そう遠くない未来になるだろうと示唆した。

実際のところは、池田会長は今月か来月はじめ頃にケネディと会談する予定であったが、政治的理由により頓挫したのだ。情報筋によれば、自民党幹部らはケネディ会談の後押しをする見返りとして、池田から4月の都知事選で東龍太郎への支持確約を取り付けようとした。しかし、この取引の提案は、池田の逆鱗に触れたのだと言う。

池田大作にそのような圧力がかけられるのには、十分すぎるほど理由がある。

東京に会員50万人を擁する創価学会は、保守系の東と、社会党系の元兵庫県知事・阪本勝が争う東京都知事選の勝者を決定するだけの力を手にしているのだ。

前回1959年の都知事選で、東は169,157票差で社会党系の有田八郎を破った。東の得票数は1,821,346に対し、有田は1,652,189であった。創価学会員は東に投票したとする確かな根拠がある。

池田は本紙に対し、創価学会員の参議院議員15名から成る政治団体・公政連は、両候補のいずれかを選び、それに追随するよう創価学会員に促すことになるであろうと語った。

「我々は、どちらの候補がより東京都民の福祉のためになるのか、厳正にその判断に基づいて選択をします。両候補およびその支援者から、金銭その他のいかなる形であれ圧力があれば、それはその候補にとってマイナスになるでしょう」と池田は警告した。

池田はまた、どちらかの候補を選んだからといって、必ずしも創価学会がその候補を推している政党を支持するという意味ではない、とも強調した。池田は、今日の日本の政党は派閥争いに明け暮れていて、自分たちを選んでくれる民衆に奉仕する義務を怠っていると語った。

「日本に真の安定をもたらすのが我々の願いです。終戦から17年、諸政党はまったくそれが出来なかった。そのために民衆は苦しんできた。それもすべて、日本人には指針がないことが原因です。他の国々には、考え方や行動の基盤となる偉大な哲学がある。しかし日本人には、そのような基盤がありません」

「その空白を埋めるのが、日蓮大聖人の教えです。だから我々の組織には、これだけ多くの青年がいるのです」

池田は、12歳から30歳までの男女青年部員100万人という数字は、決して誇張ではないと述べた。

「それが嘘ならば、すぐにばれてしまうでしょう。創価学会の公称会員数は、選挙のたびに我々が集める票の数で検証されています」

創価学会の会員数は、「折伏」として知られる対面／ひざ詰めの強硬な／過激な布教方法によって、戸田城聖第二代会長のもとで猛烈に拡大した1951年の数千人から、1956年には約100万人に増加し、現在は600万人を超える。

創価学会は今年の拡大目標を40万世帯としている。昨年を除き、年平均50万世帯の拡大を下回る目標だ。池田によると、これは既存の会員間で日蓮大聖人の教えに対する理解をより深めるために、低く設定したのだという。

現在、創価学会は参議院に15名の代表を送っているが、衆議院にはゼロだ。衆議院にも代表を送れば、創価学会の政治目的実現のために、より効果的ではないかと質問すると、池田はこう述べた。

「今は考えておりません。しかし将来はどうか分かりません。今後、必要が生じて、創価学会の代表を衆議院にも送りたいと民衆が望むようになるかもしれませんから」

付記：インタビューをまとめた羽仁翹記者について

The Japan Times 紙は、1897年に創刊された英字新聞。インタビューにあたったのは、当時、同紙記者であった羽仁翹^{はにぎょう}。このインタビューが行われた背景として、同紙の論説委員長の齋藤忠^{ちゆう}が小平芳平『創価学会』（鳳書院）の「私の見た創価学会」に、再版（1962年8月15日刊）から文章を寄せていること¹⁷⁸、および、取締役・編集主幹の平沢和重がロバート・ケネディ夫妻歓迎日本青年委員会の実行委員であり、ケネディ大統領に深い関心を持っていたことをあげておきたい。

羽仁は、1931年、自由学園創立者羽仁吉一の弟賢良の三男として東京に生まれる。自由学園初等部、男子部中等科、高等科をへて最高学部を1953年に卒業。英字新聞を発行するジャパンタイムズ社に入社、編集局勤務。1960年にフルブライト全給費奨学生として米国コロンビア大学大学院ジャーナリズムスクールに入学。翌61年、修士号を得て卒業。1977年、取締役編集局長、82年、同編集担当を務め、85年退社。同年4月、学校法人自由学園の副学園長に就任。1990年、学園長に就任。2004年、学園長を退任する。2004年4月、名誉学園長。同年10月死去¹⁷⁹。この

¹⁷⁸ 齋藤忠の文章は、第4版（1964年4月2日刊）まで掲載されている。第5版以降は、「私の見た創価学会」の部分がなくなった。

¹⁷⁹ 羽仁翹『よく生きる人を育てる 偏差値ではなく人間値』（教文館、2005年）の「著者紹介」、および、自由学園100年史編纂委員会『自由学園100年史』（自由学園出版局、2021年）を参照。

インタビューは、帰国2年後に行われている。

羽仁は、初等教育から高等教育まで自由学園で学んでいるが、自由学園の小学校主事佐藤瑞彦（1893～1981年）について触れておきたい。彼は、現在の岩手県水沢市出身。岩手県師範学校附属小学校の首席訓導であった佐藤は、1928（昭和3）年4月の自由学園小学校設立申請にあたり招聘され、1971（昭和46）年7月の退職まで38年間主事を勤める。1963（昭和38）年から68（同43）年まで、日本私立小学校連合会の会長を務めている。

佐藤は、『東京朝日新聞』1931年3月27日付朝刊6面に「教育指導の原理 創価教育学体系第一巻」という書評を掲載。牧口常三郎の創価教育学を高く評価し、「続刊を待望しているものである」と記している。牧口と自由学園および佐藤瑞彦との交友関係は明らかになっていないが、大正新教育運動の中で接点があったであろうことは推察できる。

また羽仁は、ジャパントイムズ社を退職後、母校自由学園の三代目の学園長として14年間勤めているが、彼の著書のタイトル『よく生きる人を育てる 偏差値ではなく人間値』の「人間値」という言葉に着目したい。偶然かもしれないが、創価大学の教職員学生を精力的に取材してまとめられた『シリーズ大学は挑戦する 創価大学』（栄光教育文化研究所、1996年）の著者悠木夏文は、創価大学を評するのに「人間値」という言葉を使い、「二一世紀の世界に必要なものは高い偏差値ではなく、優れた人間値、に違いない。新たな四半世紀に向かう創価大学の挑戦が、それを実証し続けることを期待している」で結んでいる。

羽仁と池田には通じ合うものがあつたのではないか。ちなみに、*The Japan Times* 紙は、本学の開学について1971（昭和46）年4月3日付2面で紹介している。

資料2 1963（昭和38）年2月1日の創価学会男子部幹部会（早稲田記念会堂）での池田講演から（『聖教新聞』1963年2月5日付1面）

私も、三百万世帯を越えた今日、なんとか、原水爆禁止の主張と、それから東洋仏法の神髄たる、唯心・唯物二大思想をも指導する色心不二の大生命哲学でなければ、絶対に、この行き詰まりを、どうしようもないということを、世界の大国の指導者に教えたい、聞いても聞かなくてもいいから訴えておきたい、こういう念願でございました。

いろいろ方法もあろうと思いますが、どうしても政治的に複雑になってしまったり、その機会がとらえられなかった。今回も、ときには、まず、ケネディ大統領、ラスク〔国務〕長官にも、その主張がいえるような機会のルートができたのでありますけれども、日本の為政者が、なんとなくじゃましたり、おせっかいかけて、ひじょうに、そういうものに迎合するのは私はいやであります。今回は見送ろうと思っておりますけれども、いずれにしても、はやかれおそかれ、たとえ聞いても聞かなくても、その恩師の主張をば、下は民衆の大きい波とし、上は全世界の責任ある指導者に、われわれのこの恩師の主張を、情熱をこめ、真心こめて、ともに訴えきっていかうではありませんか。

資料3 1963(昭和38)年2月4日の創価学会女子部幹部会(早稲田記念会堂)での池田講演から(『聖教新聞』1963年2月7日付1面)

先日は男子部の幹部会の時に、恩師戸田先生の原水爆禁止の主張を再確認して、しっかりそれを世界に流布していこう、こういうふうに申しました。その一つの具体的な方法といえますか、または日本民族の行き方として、全世界に向かって、日本の国だけが原水爆の洗礼を受けた犠牲の国です。どんなことがあっても、原水爆の戦争はあってはならない。禁止をすべきだといえる資格のあるのは日本民族です。

で、戸田先生の主張は、とうぜん私も、第一線に立って死ぬまでいいきっていきます。皆さん方の努力も得ますし、皆さん方も同じようにがんばっていただきたいと思います。私は、ひとつの例として、世界の指導者、すなわち、大統領、首相、総理大臣など、世界には国が百前後あると思いますが、その百人の世界の指導者が、それは通訳を連れてきてよいでしょう。二月にいったんでも、また三月にいったんでもいいと思います。できれば毎月やってもらいたい。なぜかなれば、一日でフランスでもアメリカへも、どこへでも行けるジェット機の時代であります。忙しいといったって、一日や二日、どうということはありませんよ。学会人のほうがよほど忙しいですよ、忙しいといえば(笑い)。また旅費といったも、そんな大統領や、それから首相はみんなたくさんお金を持っていると思うのですよ。持っていないのは、皆さんか、私だけです。(中略) ぜんぶ指導者も世界の平和のために、協議をしてもらいたい。

指導者であるならば、世界の平和を念願するのはとうぜんです。それを念願しない指導者があるならば、指導者ではありません。みんな全人類がしあわせになるために、一刻もはやくしあわせになるために、戦争をさせないために、一生懸命に、百人が、今はタイ国で会議をしよう、全体会議でもよい、名前はいつでもよい、それから、この次はエチオピアでやろう、その次はソ連でやろう、モスクワでやろう、その次はアメリカでやろう、その次は日本でやる、その次は中共でやる、こういうふうに、どんなことを論じてもよいけれども、究極の目的は、ぜんぶ世界の平和、人類の幸福、戦争は絶対に禁止、こういうふうに話し合いを一年、二年つづけていくならば、私はひじょうにいい、有意義な結果になるだろうと思うし、また指導者にそれだけの雅量が必要ならぬと私は思うのですけれど、どうでしょうか。

どうか私どもは、個人の幸福はとうぜんのこと、または、その個人も、社会、一国、世界というものに影響をうけた個人でありますから、不幸な人、それから社会のため、民族のために、しっかりまた力を合わせて、今月も有意義にがんばっていこうではありませんか」

資料4 浅野秀満『あすの創価学会』（1970年刊）の池田からのインタビューに基づく記述

かつて池田は、アメリカの故ケネディ大統領から「内密の会見、を申しこまれたことがある。東京・信濃町にある学会本部に、ある有力民間人が意向打診に現われた。

アメリカ国務省の意を受けてきたといい、

「ケネディ大統領が両国政府に関係なく、貴下と個人的な資格で会見をもちたい、と希望されている。国務省が私に、使者として意向をたしかめてほしいと依頼してきた。いかがですか」

池田は、突然の話に驚いたが、二人の会見がケネディ大統領の強い希望であることを確認したあと、しばらく考えたという。

池田が会長に就任して三年目の〔昭和〕三十七年十二月で、当時、日米安保条約締結による混乱が尾を引き、左右両翼が激しい対立をみせていた。学会は、そうした国内情勢のなかで、参議院に進出するなど、政治的にも比重が大きくなりつつあった。ケネディ大統領の会見意図はなにか。内外に政治的に利用されないか。アメリカ布教のこともある……。

「お会いしましょう。私もお話したいことがいろいろあります」

早速、北条浩副会長（当時、総務）ら最高幹部を集めて「ケネディ会見、を伝え、必要な準備を指示した。

公明党（当時、公明政治連盟）幹部にも秘かに会見のことが伝えられた。会見に備えて内外の情勢分析が池田を中心に専門家を集めて行なわれた。池田はアメリカのアジア政策や核政策について一つの構想をいだけただけに、このさい、腹藏なくケネディにぶつけてみる気になった。

早速、訪米計画を立て、会見日程を組みこむことになった。日程はケネディ大統領のスケジュールと合わせた。

手土産は池田が選んだ日本の名刀一振り。

「ケネディに、日本人の心を語るのにちょうどいいですからね」

と後に語っている。

洋服屋が呼ばれ、タキシードも新調。ディナー・パーティーに備えてだった。

あわただしく準備が進むうち、当時の駐日大使であったライシャワーが二人の会見計画を知って驚き、渡米前に会見したいと申しこんできた。会うことになった。

その前夜、自民党の故人となった大物代議士が、池田の前に現れたのである。

「ケネディに会うそうだが、自民党内には異論の声もある。なんとか私が骨を折ろう。そこで、一つだが、力をかしてくれないか」

政治的圧力で会見などどうにでもなるとほのめかしながら、目前に迫っていた東京都知事選の協力を、暗にちらつかせたいらしい。

池田は会見計画に、政治の暗い影がさしてきたのを察知すると怒った。

「それでは話が違ってきます。またの機会をまちましよう」

その場で、大物代議士のさそいを断わり、ケネディとの会見をとりやめた。

キューバ・核ミサイル危機後のジョン・F・ケネディと池田大作—実現に至らなかった会談をめぐって—

ライシャワーとの会談も中止した。有力民間人を介して、池田の丁重な断わりのあいさつがケネディ大統領に伝えられた。

池田とケネディ大統領の会見準備は、二人とも一私人としてすすめていたので、池田が旅券申請するまで、外部では知らなかった。

池田の日程に「大統領会見、が組みこまれていることがわかると、間もなく、自民党筋の知るところとなったという。

それから一年後、ケネディはダラスで凶弾に倒れた。池田はそのニュースを地方指導先きの鹿児島県指宿のホテルで聞き、即座に東京の学会本部に、ジャクリーヌ夫人とロスアンゼルス本部に、それぞれ弔電を打つように指示、また、ロスアンゼルス本部には「ジャクリーヌ夫人に弔電を打つこと」と電報を打たせた。

池田はこんな細かな配慮をわすれない。国葬が終わってジャクリーヌ夫人から謝電がきたとき、「本当に会って話したい人だった」

とポツリ、側近の幹部にもらした。

最近になって池田は、

「あのときは洋服までつくって損しちゃいましたよ」

笑いで茶化しながら、

「ケネディはきっと、学会が将来、どっちの方向に行くのか、反共になるのか、容共になるのか、じかに聞いたかったのでしょう。私もアメリカのアジア政策についてあれこれ聞いたりしたかった」

と、私に語った。そして、「流れた会見、を残念ながらながらいった。

「仏法の絶対平和主義を話したら、ケネディならわかるでしょう」

資料5 ケネディとの会談に言及した主な池田の記述・発言（資料1～4を除く）

No	会合名・書名	実施年	会合もしくは 会談の月日	掲載年	掲載月日	主な内容	池田大作全集	
							巻	頁
1	ライナス・ポーリングとの対談 『生命の世紀への探究』			1990	10月2日	ケネディ大統領から招待状をいただいたとお会いする予定でした。折悪しく私のほうの都合でお会いすることができず、今もって残念な思いが残っております。	14	148
2	J・K・ガルブレイスとの2度目の対談	1990	10月5日	1990	10月7日	私も実は、ケネディ大統領から連絡があり、お会いする予定になっていました。準備も進んでいましたが、結局、大統領が凶弾に倒れられ（一九六三年十一月）、実現しませんでした。三十年近く前になりますが、今なお残念な思いが胸にあります。	—	—
3	中部祝賀総会	1993	11月21日	1993	11月23日	私が会長に就任した少しあと、大統領が「お会いしたい」とのことであると、大統領の関係者から連絡があった。準備を進めていたのだが、さまざまな状況があり、お会いできないでいるうちに、大統領は凶弾に倒れた。	83	367
4	『新・人間革命』第7巻「文化の華」の章			1997	5月31日	アメリカのケネディ大統領から、会見を申し込まれたのである。ある著名な民間人が仲介を、ケネディとの会見の意向を打診したのだ。その人は言った。「私は、本日はアメリカの国務省の意向を受け、その使者としてまいりました。（以下略）」	—	—
5	『新・人間革命』第7巻「萌芽」の章			1997	7月24日	実は来月、ワシントンでケネディ大統領と会うようになると思いますが。ある筋を通して、私に会いたいという連絡があったんです。	—	—
6	『新・人間革命』第7巻「操舵」の章			1997	10月8日	伸一とケネディとの会見は、先方の要請もあり、極めて秘かに準備を進めてきたが、伸一が海外訪問から帰った時には、渡航手続きなどの関係からか、外部の知るところとなっていた。そして、政権政党の大物といわれている古老の代議士が、突然、伸一に会見を求めてきたのである。	—	—
7	世界の指導者と語る14 エドワード・ケネディ			1998	8月23日	実は私は、かつてケネディ大統領から会見の申し込みを受け、お会いする予定になっていた。しかし、日本である横濱が入って会見を取り止めたという経緯があった。	123	313
8	第25回本部幹部会	1998	8月27日	1998	9月1日	ケネディ大統領とも、お会いする予定があったが、横濱が入って中止になった。その後、凶弾に倒れられ、私たちの会見は、ついに実現しなかった。残念である。	89	260
9	第29回本部幹部会	1998	12月8日	1998	12月13日	大統領から会見の申し出があったが、実現する前に、大統領は凶弾に倒れてしまった。	90	30
10	ブラジリア連邦区のクリストヴァン・ブアルケ前知事との会見	1999	1月16日	1999	1月17日	ジョン・F・ケネディ大統領との会見も妨害によって実現しなかったことや、トインビー博士との会見にも反対があったことを述懐した。	—	—
11	随筆 新人間革命 360			2003	12月1日	一九九一年九月、私がハーバード大学で第一回の講演を行った会場は、ケネディ政治大学院のウィナー講堂であった。かの若きケネディ大統領からは、かつて私も会見のお話をいただいております。その足跡が偲ばれてならなかった。	134	408

No	会合名・書名	実施年	会合もしくは 会談の月日	掲載年	掲載月日	主な内容	池田大作全集	
							巻	頁
12	随筆 人間世紀の光 22			2004	4月10日	かつて私も、ケネディ大統領の関係の方から、ご招待をお受けしたことが懐かしい。昭和三十八年（一九六三年）の二月、ワシントンで大統領と会見の予定となっていた。しかし、日本のある政治家の嫉妬の邪魔が入り、実現を見ぬまま、その年の十一月、大統領が凶弾に倒れられ、まことに残念な思いをした。	135	220
13	各合同同研修会	2004	8月7日	2004	8月11日	かつて大統領との会見の要請が関係者からあったが、実現しなかった。	—	—
14	『第三文明』連載のリカルド・ディエス＝ホフアライトネルとの対談「見つけあう西と東」第9回			2004	12月1日	実はケネディ大統領からは、私も、一九六〇年に創価学会の会長に就任してまもなく、会見の申し出をいただいていた。それが実現できないうちに、大統領が凶弾に倒れてしまったことは、残念でなりません。	117	119
15	随筆 人間世紀の光 61			2005	1月14日	ケネディ大統領から、私に会いたいと連絡が入ったのは、一九六二年（昭和三十七年）の暮れであった。大統領との会見を推進してくださったアメリカの方々もおられた。語り合いたいことは山ほどあった。しかし、年が明けてから、日本の政治家の下劣な嫉妬と政略によって、会見の話は結局、押しつぶされてしまったのである。	136	179
16	随筆 人間世紀の光 124			2007	2月21日	振り返れば、ハーバード出身の方々との最初の縁は、ケネディ大統領であった。一九六三年の二月、私が首都ワシントンを訪問し、お会いする予定が進んでいたのである。（中略）ケネディ大統領も、東西の冷戦下において、新しき対話の道を切り開こうと、命を賭して挑戦されていた。会話が実現すれば、いかなる語らいが広がったことか。	138	58
17	山梨最高協議会	2007	9月9日	2007	9月19日	私には、ケネディ大統領と会見する予定もあった。残念ながら、実現しなかったが、後に、大統領の心を携えて、弟のエドワード・ケネディ上院議員が、わざわざ聖教新聞社に來訪してくださいました。	—	—
18	新時代第15回本部幹部会	2008	2月6日	2008	2月13日	じつは私は、ケネディ大統領から会見の申し込みを受け、お会いする予定になっていた。しかし、日本で、ある横槍が入って会見が取り止めになった。	—	—
19	創価学園特別文化講座 創立者大詩人 ダンテを語る 4			2008	5月15日	実は、私は、ケネディ大統領からの要請もいただき、お会いする予定がありました。しかし、日本の政治家から邪魔が入って、会見は中止になった。その後、大統領が亡くなってしまったのです。	—	—
20	新時代第23回本部幹部会	2008	10月28日	2008	11月3日	兄のケネディ大統領とお会いする予定もあったが、さまざまな事情で実現しないうちに、大統領が暗殺されてしまった。	—	—
21	全国代表幹部会	2009	9月25日	2009	9月30日	アメリカのケネディ大統領からも会見の要請があった。残念ながら実現しなかったが、弟のエドワード・ケネディ上院議員が、東京の聖教新聞社へ来てくださった。	—	—
22	新時代第33回本部幹部会	2009	10月24日	2009	11月4日	ケネディ大統領からは、会見の要請があった。しかし、さまざまな事情で実現しないうちに、大統領が亡くなられてしまった。本当に残念であった。	—	—

資料6 小説『新・人間革命』第7巻（聖教ワイド文庫、2004年刊）におけるケネディ大統領との会見に関する記述

「キューバ危機、を経て間もなく、アメリカのケネディ大統領から、会見を申し込まれたのである。ある著名な民間人が伸一〔池田〕を訪ね、ケネディとの会見の意向を打診したのだ。

その人は言った。

『私は、今日はアメリカの国務省の意向を受け、その使者としてまいりました。突然の話で驚かれるかもしれませんが、ケネディ大統領は、あなたと個人的に会見を希望されております。そして、あなたに、会見する意向があるのか確かめるように依頼されたのです。あなたのお気持ちをお聞かせください』

一瞬、伸一は回答に窮した。会見を希望する意図がどこにあるのか、即座に判断しかねたからだ。しかし、その瞬間に、彼の頭脳は、目まぐるしく回転した。

——学会は同志を参議院に送り、今や十五議席を確保し、公明会を誕生させるに至った。また、三百万世帯を達成し、事実上、日本最大の宗教団体となった。しかも、民衆のなかから生まれ、民衆を組織した全く新しい勢力といえる。

それだけに、ケネディは、創価学会に対して、大きな関心をいだいているにちがいない。

また、学会の存在は、日本の社会にあって大きな比重を占めるだけに、左右両勢力のいずれにつくのか、確認しておこうという意図もあるのかもしれない。

それは、世界の指導者としては、当然の着眼といえよう。しかし、伸一は、その会見が政治的に利用されることを憂慮した。

彼は、東西両陣営のいずれにも与する意志はなかった。社会主義か自由主義かといっても、本来は社会制度上の概念であったはずである。

人間性を最大限に生かしていかなければ、社会主義も人間を抑圧する機構と化していくし、自由主義も退廃を免れない。創価学会がめざしているのは、政治・経済体制を超えた、『人間主義』であり、『地球民族主義』である。

だが、伸一は、東西の冷戦に終止符を打ち、核戦争を回避していくためには、西側陣営の指導者であるケネディと会い、忌憚のない語らいをしていく必要性を痛感していた。

さらに、アメリカでの布教を考えるなら、大統領の創価学会への正しい認識が大事になる。誤解に基づく無用な摩擦は避けたかった。

何秒間かの沈黙のあと、伸一は、静かに答えた。

『わかりました。ケネディ大統領とお会いすることにいたしましょう』

ケネディ大統領と山本伸一の会見は、その後、具体的に煮詰まっていった。

会見の日は、ケネディのスケジュールに合わせ、年が明けた二月と決まり、伸一がワシントンを訪ねることになった。

伸一は、一月八日から二十七日まで、海外メンバーの指導のため、アメリカ、ヨーロッパなど

を歴訪することになっていたのですが、帰国後、またすぐに渡米することになる。

伸一は、その会見には、将来のために、男女青年部や学生部の幹部の代表も、同席させたいと思った。さらに、土産の品にも心を砕き、日本の文化の一つの象徴として、日本刀を贈ることにした。伸一の妻の峯子も、大統領夫人へのプレゼントに、真珠のネックレスを用意した」（98～101頁）

「山本伸一は、海外訪問から帰った翌日の二十八日には、この年初の教学部の教授会に出席し、さらに、二十九日には、本部幹部会に臨んだ。

その一方で、彼は二月に予定していたアメリカのケネディ大統領との、会見の準備に力を注いでいた。伸一は、ケネディとは、語り合いたいことがたくさんあったが、時間的な制約もあるだけに、話す内容を整理しておく必要があった。

彼が、なんとしてもケネディに伝えなければならないと考えていたのは、師の戸田城聖が『第一の遺訓』とした『原水爆禁止宣言』であった。

伸一の脳裏には、あの三ツ沢の陸上競技場での恩師の叫びがこだましていた。

『……核あるいは原子爆弾の実験禁止運動が、今、世界に起こっているが、私はその奥に隠されているところの爪をもぎ取りたいと思う。

それは、もし原水爆を、いづこの国であろうと、それが勝っても負けても、それを使用したものは、ことごとく死刑にすべきであるということを主張するものであります。

なぜかならば、われわれ世界の民衆は、生存の権利をもっております。その権利をおびやかすものは、これ魔ものであり、サタンであり、怪物であります』

常々、仏法者として死刑には反対の立場をとっていた戸田が、あえて『死刑にせよ』と叫んだのは、原水爆を『絶対悪』と断ずるゆえであった。

彼が『原水爆禁止宣言』を行った一九五七年（昭和三十二年）当時、大国の核兵器の開発と製造が加速されていた。そして、この核兵器を正当化していたのが、いわゆる核抑止論であった。つまり全面核戦争になれば、人類は滅びるかもしれないという恐怖が、戦争を「抑止する」というのである。

しかし、人類の生存の権利を「人質、にとり、その恐怖を前提としたこの思考こそが、「魔性の爪、を育てている」といってよい。

戸田の宣言は、その魔性を、根本から打ち砕こうとするものであった。

（中略）

その〔キューバ・核ミサイル危機〕緊張のなかで、彼〔ケネディ〕は強い精神力と冷静な判断をもって、核戦争の回避のために、最大限の努力をしたといえる。

そのケネディならば、恩師の『原水爆禁止宣言』の心を深く理解するであろうし、彼の偉大な人格は、全人類の幸福と平和を願う恩師の精神と、共鳴の調べを奏でるにちがいないと、伸一は確信していた。

伸一は、世界の平和を打ち立てていくには、戸田城聖の『原水爆禁止宣言』の精神を、現実化

せねばならぬと思っていた。

彼は、そのために、ケネディに提案したいことがあった。

それは、米ソ首脳会談の早期再開であった。

(中略)

また、伸一は、核を廃絶し、恒久平和への流れを開くために、米ソ首脳会談とともに、世界各国の首脳が同じテーブルに着き、原水爆や戦争の問題などを忌憚なく語り合う、世界首脳会議の開催も提案しようと考えていた。

(中略)

伸一は、戸田城聖が叫んだ、地球民族主義の大理念をもって世界を結び、恒久平和を実現しなければならぬ時が来たことを、深く自覚していた。

彼は世界の平和への突破口を開くために、ケネディとの語らいに多大な期待を寄せていた。いや、そこに掛けていたとってよい。

——ところが、その後の事態は思わぬ展開を遂げることになる。

伸一とケネディとの会見は、先方の要請もあり、極めて密かに準備を進めてきたが、伸一が海外訪問から帰った時には、渡航手続きなどの関係からか、外部の知るところとなっていた。そして、政権政党の大物といわれている古老の代議士が、突然、伸一に会見を求めて来たのである。

伸一は、無下に断っては失礼であると考え、会見に応じることにし、彼の方から出向いていった。

代議士は、あいさつもそこそこに、横柄な馴れ馴れしい口調で語り始めた。

『山本君、今度、君はケネディに会うことになっているらしいが、それに対して、わが党のなかで、強い反対意見が出ていてね。

早い話が、外交問題にもかかわってくるのだから、勝手なまねはさせるな。なんで、そんなことを放置しておくのだ、というわけなんだ。

実は外務省の方でも、君の動きに対して、かなり神経を尖らせているようだ。

今のままでは、一波乱起こることは間違いない。政権を担っているわが党のなかで、強硬に反対している者がかなりいるとなれば、この会見の実現も、極めて危ういことになるのではないかと思う』

それは、自分たちの圧力で、いつでも会見などつぶしてみせるぞという、威嚇であった。

伸一は強い憤りを感じながらも、静かに相手の話を聞いていた。

代議士は、上目遣いで彼を見て、反応をうかがいながら語っていった。

『山本君にとっては、ケネディと会うことは創価学会の会長として箔をつけることにもなるし、社会に学会をアピールする絶好のチャンスであることはよくわかる。しかし、状況はあまりにも厳しい。わが党にも、外務省にも、君の対応によって、日米関係に支障をきたすようなことになっては大変だという、強い気持ちがあるからね。

だが、私は、なんとか君を守りたい。学会の青年会長である君には、まだまだ未来がある。君は、これから、もっともっと大きくなっていく人物だと、私は思っている。それだけに、今回の

チャンスを、ぜひものにしてほしい。

だから、私が骨を折ろうと思う。私が動けば、反対を押さえ込むことはできる。これは私の親心と思ってもらってよい。誠意から言っているのだ。

その代わりといっちはなんだが、君にも、力を貸してもらいたい。これからは、お互いに協力し合っていこうじゃないか。そうすれば、君も得るものは大きいはずだ。

たとえば、学会は参議院に公明会をつくったが、はっきり言ってしまえば、まだ取るに足らない力だ。しかし、もし私と一緒にやるなら、もっと政界での力をもてるようにしよう』

伸一は黙って聞いていたが、彼の頭は目まぐるしく回転していた。

——この代議士の狙いは明らかだ。私に恩を着せ、それを糸口に、学会を政治的に利用しようというのであろう。政治権力の薄汚れた手で、この純粋な学会の世界が掻き回されるようなことは、絶対に避けなければならない。しかし、この政治家の意向を無視すれば、ケネディ大統領との会見をつぶしにかかるだろう。そうして自分たちの力を見せつけ、勝ち誇ったように、何度でも、自分の軍門に下れと言ってくるにちがいない。

こんな政治家たちに付け入る隙など、与えてなるものか！

そのためには、まことに残念ではあるが、この際、ケネディ大統領との会見は取りやめるしかないだろう。守るべきは学会である。私は、自分のために会おうというのではない。彼らにお願いしてまで、会わせてもらう必要はない——。

伸一は、航路を急旋回させたのである。

山本伸一は、代議士の話が一段落すると、微笑を浮かべて、しかし、きっぱりと言った。

『お話の趣旨はよくわかりました。あなた方のご意向を尊重いたします。ケネディ大統領との会見の話は、なかったことにいたしましょう。すべて中止します。

またの機会を待つことにしましょう』

伸一の回答は、あまりにも、予想外であったのであろう。狼狽したのは、代議士の方であった。『会見は中止する？ し、しかし、そんなことをして、この大事な機会を逃してしまえばだね……』

伸一は、相手の言葉を遮って言った。

『私は、皆さんのお力をお借りして大統領とお会いするつもりは、毛頭ありません。それでは話が違ってきます。

また、アメリカの大統領と会って、箔をつけようなどという卑しい考えも、私には全くありません。それが政治家の方々の考え方なのかもしれませんが、甚だしい勘違いです。

私がケネディ大統領とお会いしようとしたのは、人類の平和への流れをつくりたかったからです。東西両陣営の対話の道を開きたいからです。そして、それが日本の国のためにもなると考えているからです。

公明会をつくったのも、民衆のための政治を実現させたいからです。現在の政権が、あまりにも民衆を度外視しているから、私たちが一石を投じたんです。

私には、公明会を使って政治権力を手に入れ、国を支配しようなどという野望めいた考えは、いっさいありません。民衆の幸福を、社会の繁栄を、世界の平和を、純粹に、一途に考え、行動しているのが創価学会です。その学会に、私利私欲の絡んだ政治的な駆け引きは通用しません。

私は、誠実には、大誠実をもって応えます。傲慢には、力をもって応えます。邪悪には、正義をもって戦います。それが私の信条であり、信念です』

代議士の額には、汗が噴き出していた。彼はそれをハンカチで拭いながら、狼狽を押し隠し、鷹揚さを装って言った。

『いやあ、実に見事な決断だ。前々から私は、山本君は見どころのある青年だと思っていたが、ますます確信がもてたよ。頼もしいかぎりだ。また、会って話し合おうじゃないか』

会見は終わった。

ケネディと伸一との会見は、こうして白紙に戻った。

山本伸一は、学会に迫る、政治権力の影を感じた。

彼は代議士との会見が終わると、この`横槍、の背後に、何があるのかを考えざるをえなかった。`多くの政治家たちは、三百万世帯を超えた創価学会に恐れをいさぐ一方、自分の傘下に置いて、自在に操りたいと、考えているのであろう。その学会の会長である自分が、政権政党の頭越しにケネディと会見することになったことが、悔しくてならないにちがいない。彼らの本質は、嫉妬以外の何ものでもない。

そう考えると、伸一は、日本の国を動かしている政治家たちの狭量さに、情けなさを覚えた。同時に、学会は、これからも、政治権力に、永遠に狙われ続けるであろうことを、覚悟しなければならなかった。

学会は民衆を組織し、民衆の力をもって、人類の幸福と世界の平和の実現をめざしてきた。それゆえに、民衆を支配しようとする権力から、さまざまな圧力が加えられるのは、むしろ当然と
いってよい。

(中略)

『来年の四月には、戸田城聖先生の七回忌を迎えますが、先生亡きあと、いつも私の胸に響き渡っているのが、あの`原水爆禁止宣言、の叫びであります。

この宣言には、核戦争の脅威から人類を解放しゆく、大原理が示されております。

私は、この宣言の精神を、どんなことがあっても、人類のため、子孫のために、世界の指導者に、絶対に伝え抜いていかなければならないと、強く決意しておりました。

そして、その機会を考えていたところ、ある有力な民間人を通して、アメリカのケネディ大統領から、個人的に会いたい旨の要請があり、会見が具体化していました。

ところが、日本の政界から横槍が入ったのです。そして、恩着せがましい、お節介なことを言い出す政治家がおりましたので、いろいろ考え、今回は見送ることにいたしました。そうした動きに迎合し、学会が政治的に利用されるようなことを、私はしたくありません』(319～333頁)

資料7 小平芳平『創価学会』（鳳書院）各版の「私の見た創価学会」に掲載されている人物

▼初版（1962年5月12日刊）

内閣総理大臣 池田勇人、日本社会党書記長 江田三郎、衆議院議員・自由民主党 南条徳男、衆議院議員・日本社会党 赤松勇、参議院議員・民主社会党 永末英一、参議院議員・日本共産党 須藤五郎、東京都知事 東龍太郎、東京都民銀行頭取 工藤昭四郎、東京駅長 大橋猛敏、日本旅行会専務取締役 南新太郎、政治評論家 藤原弘達、東洋大学助教授 高木宏夫、作家 山岡莊八、塚本総業株式会社社長 塚本素山、東京都医師会医道審議委員 平沢益吉、日本大学教授 小沢省吾、東京慈恵会医科大学助教授 藤田承吉、東京工業大学助教授 岩井津一、大阪府立大学教授 植田勇、コレジ・ド・フランス研究員 山崎鋭一、洋画家 二重作龍夫、声楽家 船越玲子、創作インド舞踊家 和井内恭子、ピアニスト 川村深雪

▼再版（1962年8月15日刊）

内閣総理大臣 池田勇人、日本社会党書記長 江田三郎、衆議院議員・自由民主党 佐藤栄作、同藤山愛一郎、衆議院議員・日本社会党 赤松勇、参議院議員・民主社会党 永末英一、参議院議員・日本共産党 須藤五郎、東京都知事 東龍太郎、東京都民銀行頭取 工藤昭四郎、毎日新聞社常務取締役 山本光春、政治評論家 御手洗辰雄、政治評論家 藤原弘達、東洋大学助教授 高木宏夫、ジャパントイムズ論説委員長 斎藤忠、作家 佐藤春夫、作家 山岡莊八、作家 平林たい子、俳人 石田波郷、写真家 三木淳、日本画家 児玉三鈴、日本ビクター株式会社専務取締役 北野善朗、東京慈恵会医科大学助教授 藤田承吉、医学博士（外科）岸寿、医学博士（内科）藤田朝雄、東京工業大学助教授 岩井津一、徳島大学助教授 荒谷文雄、衆議院議員・自由民主党・弁護士 林博、弁護士 松井一彦、ピアニスト 川村深雪

▼三版（1963年5月12日刊）

内閣総理大臣 池田勇人、建設大臣 河野一郎、衆議院議員・自由民主党 佐藤栄作、衆議院議員・自由民主党 藤山愛一郎、衆議院議員・自由民主党 弁護士 林博、衆議院議員・日本社会党 江田三郎、衆議院議員・日本社会党 赤松勇、参議院議員・民主社会党 永末英一、参議院議員・日本共産党 須藤五郎、東京都民銀行頭取 工藤昭四郎、毎日新聞社常務取締役 山本光春、三和銀行専務取締役 村野辰雄、政治評論家 御手洗辰雄、ジャパントイムズ論説委員長 斎藤忠、作家 佐藤春夫、作家 山岡莊八、作家 平林たい子、俳人 石田波郷、日本画家 児玉三鈴、金原舜二、東京慈恵会医科大学助教授 藤田承吉、医学博士 藤田朝雄、早稲田大学教授 根本誠、東京外国語大学教授 土井久弥、東京工業大学助教授 岩井津一、高知大学教授 今西襄、日本電波映画取締役・本門講々員 伊藤史郎、弁護士 松井一彦、ピアニスト 川村深雪

▼四版（1964年4月2日刊）¹⁸⁰

内閣総理大臣 池田勇人、衆議院議員・自由民主党 中曽根康弘、日本社会党書記長 江田三郎、

¹⁸⁰ 1964年4月2日発行の3版が存在する。ただし、「私の見た創価学会」は、4版と同じ。

衆議院議員・日本社会党 赤松勇、衆議院議員・民主社会党 西尾末広、参議院議員・日本共産党 須藤五郎、政治評論家 御手洗辰雄、神奈川大学教授 大熊信行、朝日新聞記者 富重静雄、読売新聞政治部記者 渡辺恒雄、ジャパンタイムズ論説委員長 斎藤忠、作家 平林たい子、俳人 石田波郷、日本画家 児玉三鈴、日本勧業銀行頭取 中村一策、三菱銀行頭取 宇佐美洵、毎日新聞社常務取締役 山本光春、清水建設株式会社社長 清水康雄、大林組社長 大林芳郎、日本大学会頭 古田重二良、東京慈恵会医科大学助教授 藤田承吉、早稲田大学教授 根本誠、東京工業大学助教授 岩井津一、高知大学教授 今西襄、弁護士 松井一彦、ピアニスト 川村深雪

※ 五版（昭和43年1月15日刊）以降は、小平芳平『創価学会』に「私の見た創価学会」の部分は無くなった。

資料 8 池田大作が出版した主な対談集・鼎談集

No	対談者・鼎談者名	対談者・鼎談者の主な肩書	居住地 (現在の表記)	書名	出版社	日本語版の 出版年	平和実現への 言及	池田大作全 集の巻数
1	リヒャルト・クレーデンホー フ＝カレルギー	パン・ヨーロッパ運動提唱者	オーストリア ／日本で出生	文明・西と東	サンケイ新聞 社出版局	1972	◎	102
2	大森実	国際問題ジャーナリスト	日本	革命と生と死—大森実直撃インタビュー 古典を語る	講談社	1973	○	—
3	根本誠	創価大学教授	日本	古典を語る	潮出版社	1974	○	16
4	アーノルド・J・トインビー	王立国際問題研究所前研究 部長、ロンドン大学教授	イギリス	二十一世紀への対話（上・下）	文藝春秋	1975	◎	3
5	松下幸之助	松下電器産業創業者	日本	人生問答（上・下）	潮出版社	1975	○	8
6	宮本顕治	日本共産党委員長	日本	人生対談	毎日新聞社	1975	◎	—
7	後藤隆一	東洋哲学研究所所長	日本	仏法・西と東	東洋哲学研究所	1976	○	—
8	アンドレ・マルロー	作家・政治家	フランス	人間革命と人間の条件	潮出版社	1976	◎	4
9	井上靖	作家	日本	四季の雁書 往復書簡	潮出版社	1977	◎	17
10	ルネ・ユイグ	美術史家、コレージュ・ド・ フランス教授	フランス	闇は暁を求めて—美と宗教と人間の再発見	講談社	1981	○	5
11	アウレリオ・ベッチェイ	ローマクラブ創設者・会長	イタリア	二十一世紀への警鐘	読売新聞社	1984	○	4
12	ブライアン・ウィルソン	国際宗教社会学会元会長、 オックスフォード大学教授	イギリス	社会と宗教（上・下）	講談社	1985	○	6
13	アナトーリー・A・ログノフ	モスクワ大学総長	ロシア	第三の虹の橋—人間と平和の探求	毎日新聞社	1987	◎	7
14	ヘンリー・A・キッシン ジャー	アメリカ合衆国元国務長官	アメリカ/ ドメイン出身	「平和」と「人生」と「哲学」を語る	潮出版社	1987	◎	102
15	カラン・シン	世界ヒンディ語財団会長	インド	内なる世界—インドと日本	東洋哲学研究所	1988	◎	109
16	ヨージェフ・デルボラフ	ボン大学名誉教授	ドイツ/ オーストリア出身	二十一世紀への人間と哲学—新しい人間 像を求めて（上・下）	河出書房新社	1989	◎	13
17	土井健司	創価大学教授	日本	吉川英治と世界	六興出版	1989	○	16
18	ライナス・ポーリング	ノーベル化学賞・平和賞受 賞者	アメリカ	「生命の世紀」への探求—科学と平和と 健康と	読売新聞社	1990	◎	14
19	常書鴻	敦煌研究院名誉院長	中国	敦煌の光彩—美と人生を語る	徳間書店	1990	○	17
20	土井健司	創価大学教授	日本	人間と文学を語る—ロマン派の詩人ヴィ クトル＝ユゴフを語る	潮出版社	1991	○	106

No	対談者・鼎談者名	対談者・鼎談者の主な肩書	居住地 (現在の表記)	書名	出版社	日本語版の 出版年	平和実現への 言及	池田大作全 集の巻数
21	ノーマン・カズンズ	ジャーナリスト、元世界連邦協会会長	アメリカ	世界市民の対話—平和と人間と国連をめ ぐって	毎日新聞社	1991	◎	14
22	児玉良一	ブラジルへの第一次移住者・日伯交流の功労者	ブラジル/ 日本出身	対談・太陽と大地 開拓の曲—ブラジル 移住八〇年の庶民史	第三文明社	1991	○	61
23	チンギス・アイトマートフ	作家、ソ連邦最高会議員	キルギス	大いなる魂の詩 (上・下)	読売新聞社	1991・1992	◎	15
24	チャンドラ・ウイックラマ シンゲ	天文学者・ウェールズ大学 教授	イギリス/ スリランカ 出身	「宇宙」と「人間」のロマンを語る—天 文学と仏教の対話 (上・下)	毎日新聞社	1992・1993	○	103
25	アナトリー・A・ログノフ	モスクワ大学元総長	ロシア	科学と宗教 (上・下)	潮出版社	1994	○	7
26	アウスレジェジロ・デ・ アタイデア	ブラジル文学アカデミー前 総裁	ブラジル	二十一世紀の人権を語る	潮出版社	1995	○	104
27	ヨハン・ガルトゥング	オスロ国際平和研究所創設者	ノルウェー	平和への選択	毎日新聞社	1995	◎	104
28	ミハイル・S・ゴルバチョフ	ソ連初代大統領	ロシア	二十世紀の精神の教訓 (上・下)	潮出版社	1996	○	105
29	フィリップ・モワンス/ トリス・モウラ/高村忠成	ヴィクトル・ユゴフ記念館 館長/パリ第5大学研究室 室員/創価大学教授	フランス/ フランス/ 日本	波瀾万丈のナポレオン—「人間」と「歴 史」のロマンを語る	潮出版社	1997	○	106
30	パトリシオ・エイルウイン・ アソカル	チリ共和国前大統領	チリ	太平洋の旭日	河出書房新社	1997	◎	108
31	金庸	中国武俠小説の作家	中国	旭日の世紀を求めて	潮出版社	1998	○	111
32	アリベルト・A・リハノーフ	ロシア国際児童基金協会総裁	ロシア	子どもの世界—青少年に贈る哲学	第三文明社	1998	○	107
33	アクシニア・D・ジュロヴァ	国立ソフィア大学教授	ブルガリア	美しき獅子の魂—日本とブルガリア	東洋哲学研究所	1999	○	109
34	ルネ・シマノ/ギョー・ブルジョ	モントリオール大学前学長 /モントリオール大学教授	カナダ	健康と人生—生病死を語る	潮出版社	2000	○	107
35	マジッド・テヘラニア	ハワイ大学教授、戸田記念 国際平和研究所所長	アメリカ/ イラン出身	二十一世紀への選択	潮出版社	2000	◎	108
36	デイビッド・クリーガー	核時代平和財団所長	アメリカ	希望の選択	河出書房新社	2001	◎	110
37	シンテリオ・ヴィティエール	ホセ・マルティ研究所所長	キューバ/ アメリカ出身	カリブの太陽 正義の詩—「キューバの 使徒 ホセ・マルティ」を語る	潮出版社	2001	○	110
38	ヴィクトル・A・サドーヴ ニチイ	モスクワ大学総長、ロシア 大学総長会議議長	ロシア	新しき人類を新しき世界を—教育と社 会を語る	潮出版社	2002	○	113

No	対談者・鼎談者名	対談者・鼎談者の主な肩書	居住地 (現在の表記)	書名	出版社	日本語版の 出版年	平和実現への 言及	池田大作全集の巻数
39	季義林/蔣忠新	中国敦煌トルファン学会会長/中国社会科学院教授	中国	東洋の智慧を語る	東洋哲学研究所	2002	○	111
40	ロケッシュ・チャンドラ	インド文化国際アカデミー理事長	インド	東洋の哲学を語る	第三文明社	2002	○	115
41	趙文富	国立済州大学前総長	韓国	希望の世紀へ 宝の架け橋—韓日の万代友好を求めて	徳間書店	2002	○	112
42	ハイゼル・ヘンダーソン	未来学者、市民運動家	アメリカ/ イギリス出身	地球対談 輝く女性の世紀へ	主婦の友社	2002	○	114
43	ヴィクトル・A・サドヴ ニチイ	モスクワ大学総長、ロシア 大学総長会議議長	ロシア	学は光—文明と教育の未来を語る	潮出版社	2004	○	113
44	アレクサンデル・セレブロフ	宇宙飛行士、全ロシア宇宙 青少年団「ソユーズ」会長	ロシア	宇宙と地球と人間	潮出版社	2004	○	141
45	趙文富	国立済州大学前総長	韓国	人間と文化の虹の架け橋—韓日の万代友好のために	徳間書店	2005	○	112
46	ベッド・P・ナンダ	世界法律家協会名誉会長	アメリカ/ インド出身	インドの精神—仏教とヒンズー教	東洋哲学研究所	2005	◎	115
47	J・K・ガルブレイス	経済学者、ハーバード大学 名誉教授	アメリカ/ カナダ出身	人間主義の大世紀を一わが人生を飾れ	潮出版社	2005	◎	—
48	リカルド・アイエス=ホフ ライトネル	ローマクラブ名誉会長	スペイン	見つめあう西と東—人間革命と地球革命	第三文明社	2005	○	117
49	エリース・ボールディング	平和学者、社会学者	アメリカ/ ルウェー出身	「平和の文化」の輝く世紀へ!	潮出版社	2006	○	114
50	モンコンブ・S・スワミナサン	バグウォッシュ会議会長	インド	「緑の革命」と「心の革命」	潮出版社	2006	◎	140
51	ジョセフ・ロートブラット	バグウォッシュ会議名誉会長	イギリス/ポー ランド出身	地球平和への探求	潮出版社	2006	◎	116
52	ロナルド・ボスコ/ ジョエル・マイアソン	ソロ協会前会長/同協会 前事務総長	アメリカ	美しき生命 地球と生きる—哲人ソロ とエマソンを語る	毎日新聞社	2006	—	—
53	ドゥ・ウエイミン	ハーバード大学教授	アメリカ/ 中国出身	対話の文明—平和の希望哲学を語る	第三文明社	2007	○	117
54	フレックス・ウンガー	ヨーロッパ科学芸術アカデ ミー会長、医学博士(心臓外科)	オーストリア	人間主義の旗を一寛容・慈悲・対話	東洋哲学研究所	2007	◎	—

No	対談者・鼎談者名	対談者・鼎談者の主な肩書	居住地 (現在の表記)	書名	出版社	日本語版の 出版年	平和実現への 言及	池田大作全 集の巻数
55	スール・ヤーマン	文化人類学者、ハーバード 大学教授	アメリカ/ トルコ出身	今日の世界 明日の文明—新たな平和の シルクロード	河出書房新社	2007	○	140
56	ドジョーギーン・ツェアブ	文学者、モンゴル国立文化 芸術大学学長	モンゴル	友情の大草原—モンゴルと日本の語らい	潮出版社	2007	○	—
57	ハービー・コックス	宗教学者、ハーバード大学 教授	アメリカ	二十一世紀の平和と宗教を語る	潮出版社	2008	◎	141
58	ニラカンタ・ラダクリ シュナン	マハトマ・ガンジー非暴力 開発センター所長	インド	人道の世紀へ—ガンジーとインドの哲学 を語る	第三文明社	2009	○	—
59	饒宗頤／孫立川	香港中文大學終身主任教授 ／文学者、魯迅研究の第一人 者	中国／中国	文化と芸術の旅路	潮出版社	2009	○	—
60	ロナウド・モウラン	天文学者、作家	ブラジル	天文学と仏法を語る	第三文明社	2009	○	116
61	アドルフ・ペレス＝エス キバル	人権活動家、ノーベル平和 賞受賞者	アルゼンチン	人権の世紀へのメッセージ—「第三の千 年、に何が必要か	東洋哲学研究所	2009	◎	—
62	ハンス・ヘニングセン	アスコー国民高等学校元校長	デンマーク	明日をつくる—教育の聖業、—デンマー クと日本 友情の語らい	潮出版社	2009	○	—
63	張鏡湖	中国文化大学理事長	台湾	教育と文化の王道	第三文明社	2010	○	—
64	アブドウルラフマン・ワヒド	インドネシア共和国元大統領	インドネシア	平和の哲学 寛容の智慧—イスラムと仏 教の語らい	潮出版社	2010	○	—
65	章開沅	華中師範大学元学長	中国	人間勝利の春秋—歴史と人生と教育を語る	第三文明社	2010	○	—
66	ルー・マリノフ	アメリカ実践哲学協会会長	アメリカ/ カナダ出身	哲学ルネサンスの対話	潮出版社	2011	○	—
67	ミハイル・ズグロフスキー	ウクライナ国立キエフ工科 大学総長	ウクライナ	平和の朝へ 教育の大光—ウクライナと 日本の友情	第三文明社	2011	○	—
68	シャルル・ナポレオン	ナポレオン家当主	フランス	21世紀のナポレオン—歴史創造のエス プリ(精神)を語る	第三文明社	2011	○	—
69	アンワル・K・チョウドリ	元国連事務次長	パングラデ シュ	新しき地球社会の創造へ—平和の文化と 国連を語る	潮出版社	2011	○	—
70	高占祥	中国「中華文化促進会」主席	中国	地球を結ぶ文化力	潮出版社	2012	○	—
71	顧明遠	中国教育学会会長	中国	平和の架け橋—人間教育を語る	東洋哲学研究所	2012	○	—

No	対談者・鼎談者名	対談者・鼎談者の主な肩書	居住地 (現在の表記)	書名	出版社	日本語版の 出版年	平和実現への 言及	池田大作全 集の巻数
72	ピンセント・ゴードン・ハーディング	人権運動家、キング記念センター初代所長	アメリカ	希望の教育 平和の行進—キング博士の夢とともに	第三文明社	2013	○	—
73	ウエイン・シヨクター／ハービー・ハンコック	ジャズ奏者、作曲家／ジャズピアニスト、作曲家	アメリカ	ジャズと仏法、そして人生を語る	毎日新聞社	2013	◎	—
74	ヴィクトル・A・サドーヴニチ	モスクワ大学総長、ロシア大学総長会議議長	ロシア	明日の世界 教育の使命—二十一世紀の人間を考察する	潮出版社	2013	◎	—
75	サーラ・ワイダー	エマソン協会元会長	アメリカ	母への讃歌—詩心と女性の時代を語る	潮出版社	2013	○	—
76	ジム・ガリソン／ラリー・ヒックマン	バージニア工科大学教授、ジョン・デューイ協会会長／南イリノイ大学教授、ジョン・デューイ研究所長	アメリカ	人間教育への新しい潮流—デューイと創価教育	第三文明社	2014	○	—
77	スチュアート・リース	シドニー平和財団理事長、シドニー大学名誉教授	オーストラリア／イギリス出身	平和の哲学と詩心を語る	第三文明社	2014	◎	—
78	エルンスト・U・フォン・ヴァイツェツッカー	環境学者、ローマクラブ共同会長	ドイツ／スイス出身	地球革命への挑戦—人間と環境を語る	潮出版社	2014	◎	—
79	ユッタ・ウンカルト＝サイフェルト	声楽家、ヨーロッパ青年文化協会会長、オーストリア政府元文部次官	オーストリア	生命の光 母の歌	聖教新聞社	2015	○	—
80	ホセ・V・アブエバ	カラヤアン大学学長、元フィリピン大学総長	フィリピン	マリノロードの曙—共生の世紀を見つめて	第三文明社	2015	○	—
81	劉連義	香港中文大学第6代学長	中国	新たなグローバル社会の指標—平和と経済と教育を語る	第三文明社	2015	○	—
82	パラティ・ムカジー	ラビンドラ・バラディ大学元副総長	インド	新たな地球文明の詩を—タゴールと世界市民を語る	第三文明社	2016	○	—
83	ケビン・クレメント	オタゴ大学国立平和紛争研究所所長	ニュージーランド	平和の世紀へ 民衆の挑戦	潮出版社	2016	◎	—
84	王蒙	作家、元文化相	中国	未来に贈る人生哲学—文学と人間を見つめて	潮出版社	2017	○	—
85	アクシニア・D・ジュロヴァ	国立ソフィア大学教授	ブルガリア	大いなる人間復興への目覚め	東洋哲学研究所	2026	○	—

◎：核兵器廃絶にまで言及しているもの。—：『池田大作全集』（全150巻、聖教新聞社、1988～2015年）に未収録

ジョン・F・ケネディと池田大作関係事項年表

西暦	和暦	月日	事項
1943	昭和18	8月2日	ケネディが艇長を務める魚雷艇PT109が、南太平洋のソロモン海で、日本の駆逐艦天霧の体当たりで沈没。
1945	20	3月9日～10日	東京大空襲。死傷者12万人。
		8月6日・9日	アメリカ軍が広島・長崎に原子爆弾を投下。死者は、広島約14万人、長崎約7万4千人。
		8月15日	戦争終結の詔書を放送。
1949	24	10月・11月	池田、編集長を務める少年雑誌『少年日本』において、原子力の利用と原爆の悲惨さを特集。
1950	25	6月25日	朝鮮戦争始まる（～1953年7月27日）
1951	26	10月下旬頃	下院議員だったケネディが、弟ロバート・妹バトリシアとともに中東・アジアを視察旅行の途次、来日。東京で細野軍治と会い、自身が艇長を務めていた魚雷艇に体当たりした日本の駆逐艦の艦長を探してほしいと依頼。
1952	27	10月	ケネディ、マサチューセッツ州から連邦上院議員に当選。
1954	29	3月1日	中部太平洋のピキニ環礁で行われた水爆実験で、第五福竜丸ほか多数の漁船などが被ばく。
1957	32	9月8日	戸田城聖創価学会第2代会長、横浜市三ツ沢の陸上競技場で「原水爆禁止宣言」を発表。
1960	35	5月3日	池田、創価学会第3代会長に就任。
1961	36	1月20日	ケネディ、アメリカ合衆国第35代大統領に就任。
		6月3日～4日	ケネディとフルシチョフ、ウィーンで会談。
		6月20日～22日	ケネディ、ワシントンで池田勇人首相と会談。
		8月13日	東ドイツ、東西ベルリンの境界に壁を構築。
		9月25日	ケネディ、国連での演説で核実験禁止条約の早期締結を提唱。
		11月27日	公明政治連盟結成。基本政策の第一に核兵器反対を掲げる。
1962	37	2月4日～10日	ロバート・ケネディ司法長官来日。
		7月1日	第6回参議院議員選挙で、公明政治連盟の候補者が全国区7人地方区2人全員当選。非改選と合わせて15人となり、参議院の第3会派となる。
		10月22日	ケネディ、ソ連がキューバにミサイル基地を建設中と公表。海上封鎖を発表。（キューバ・核ミサイル危機）
		10月27日	池田、創価学会10月度本部幹部会でキューバ危機について言及。
		10月28日	フルシチョフ、キューバからの「攻撃的武器」の撤去を命令。（キューバ・核ミサイル危機収束）
		11月27日	会員300万世帯を達成したと創価学会11月度本部幹部会で発表。
		12月3日	ケネディ、第2回日米貿易経済合同委員会出席の日米双方の閣僚に、アジアにおける共産主義の脅威を力説。
		12月6日	公明会結成国民大会（台東体育館、15000人参加）。
		暮	ある著名な民間人が池田を訪ねて来て、ケネディの池田と個人的に会いたいとの意向を伝える。
		1963	38
1月8日	池田一行、アメリカほか10カ国歴訪に出発。		

西暦	和暦	月日	事項
		1月14日	池田、ニューヨーク支部長に任命した秋山富哉にケネディと会見するかもしれないと発言。
		1月27日	池田一行帰国。
		1月末	自民党大物代議士の横やりで、池田は2月末か3月のはじめに決まっていたケネディとの会談中止を決める。
		2月1日	池田、創価学会2月度男子部幹部会で、ケネディとの会談中止について発言（発言要旨は、『聖教新聞』2月5日付に掲載）
		2月14日	<i>The Japan Times</i> 、池田へのインタビューを行う。
		2月16日	<i>The Japan Times</i> 、池田へのインタビューを掲載。
		4月2日	公明政治連盟が『公明新聞』で、自民党推薦の東龍太郎支持を表明。
		4月17日	東京都知事・大阪府知事・大阪市長選挙など、第5回統一地方選挙実施。
		5月1日	池田、『中央公論』5月号に「宗教と政治理念」を寄稿。
		5月24日	創価学会、アメリカで海外初の法人格が正式に認可される。
		6月10日	ケネディ、アメリカン大学卒業式での演説「平和の戦略」において、核実験禁止を訴える。
		8月5日	米英ソが、部分的核実験禁止条約に正式調印。9月24日、アメリカ上院が80対19の大差で批准。10月発効。
		8月28日	アメリカで人種差別撤廃と雇用拡大を求めるワシントン大行進が行われ、20万人が参加。この日、キング牧師ら代表が、ケネディと会見。
		11月22日	ケネディ、グラスで凶弾に倒れる。池田、弔電を打つ。
1964	39	5月3日	創価学会第27回本部総会で、池田が「公明党」結成を提案。満場一致で決まる。
		10月15日	ソ連首相フルシチョフの解任が発表される。
		11月17日	公明党結成大会。党結成にあたり、創立者の池田は、外交政策の骨格として、中華人民共和国を正式承認し国交回復に努めるべきであると提案。
1968	43	4月4日	黒人運動指導者キング牧師がメンフィスで狙撃され、死亡。
		6月5日	ロバート・ケネディがロサンゼルスで銃撃され、翌日死亡。
		9月8日	池田、創価学会第11回学生部総会で「日中国交正常化」を提言。
1978	53	1月12日	池田、エドワード・ケネディ上院議員と会談。
1991	平成3	9月26日	池田、ハーバード大学ケネディ政治大学院で、「ソフト・パワーの時代と哲学」と題して講演。
1993	5	9月23日	池田、ケネディの生家を訪問。
		9月24日	池田、ハーバード大学ケネディ政治大学院で、「21世紀文明と大乘仏教」と題して講演。